

# マッカーサーと“バターンボーイズ”(二・完)

——日米開戦からバターン“死の行進”まで——

増 田 弘

はじめに

- (1) マッカーサーのフィリピンとの邂逅
- (2) バターンボーイズの誕生
- (3) 日米開戦前夜からマニラ脱出まで
- (4) マニラ陥落と第一次バターン攻防戦

..... (以上八一巻六号)

- (5) コレヒドール脱出計画
  - (6) マッカーサー一行のコレヒドール脱出
  - (7) 第二次バターン攻防戦とバターン“死の行進”
- おわりに

..... (以上本号)

## (5) コレヒドール脱出計画

——一九四二年二月初旬から二月下旬まで——

### 1 ケソンの抗米的な中立化要求

元来ケソン・フィリピン大統領は、マッカーサーが要請するフィリピンの首都マニラからの退去に反対であった。その心の用意がなかった彼は、マッカーサーに対し、「貴官は敵と戦うのが任務であるが、私の第一の務め

は一般市民を保護し、社会秩序を維持することにある」と抗弁した<sup>(1)</sup>。マッカーサーの本音は、ケソンが日本軍に捕まり、日本側がフィリピン大統領府首長を自陣に匿って、「錦の御旗」とするのを阻止することであった。その意味で、絶対にケソンを日本に手渡ししてはならなかったのである。彼はアメリカの重要な政治捕虜であったところが日本側の記録である『比島攻略作戦』を見る限り、このフィリピン首長捕獲作戦などまったく見当たらない。まもなく東条英機首相がフィリピンの独立承認を提起するわけであるから、日本がケソンをいかに味方に付けるかは検討すべき重要課題であつたらう。ともかくこの一件では、マッカーサーの度なる説得を受け入れて、ケソンは家族（妻と娘二人と息子一人）とともにコレヒドール島へと退避したのである。国家元首の移住によって、必然的に、フィリピンの首都はマニラから沖繩の小浜島と同じ程度の小島に移転することとなった。

一九四一（昭和一六）年二月二七日の『朝日新聞』は、一面に「皇軍、マニラへ猛進撃 米軍司令部撤退開始 政府各機関も移転発表」という見出しを掲げ、「政府はマックアーサー東亜軍司令官の勧告により政府を他に移すことに決した。余は軍司令部当局と協力、移転先より引続き政務を掌理する」とのケソン大統領の声明を伝え、非常事態宣言により内閣を従来の九名から四名へと縮小して大統領権限を強化させた旨を明らかにした。この時点でも、日本側はまだマッカーサー一行のコレヒドール移転を察知してはいなかった。

しかし結核に苦しんでいたケソンの病状は、日々続く空襲と砲撃、また日々乏しくなる配給とそれに伴う飢え、そして何よりも頼みの綱であるアメリカの援軍が一向に現れないことへの苛立ちと絶望によって、一層悪化していった。彼は日中には車椅子を必要とし、夜は咳き込み、モルヒネが欠かせなくなった。ケソンは負傷兵を除けば、島の最重病人となっていた。

そのような苦悩の中で、彼はいくつかの政治的決断を下した。その第一は、マニラから運ばれた国家財産の処分であった。セイヤー高等弁務官の財務担当顧問ジョン・デービス (John K. Davis) は、一九四二（同一七）年

一月二三日、マニラ銀行からコレヒドール島へ運ばれたフィリピンの通貨と信用証書等が、日本の手に落ちないように破棄されるか、それとも同島からアメリカへ送られるか、いずれかを選択すべきことをワシントンに提言した。一六日、マーシャル参謀総長はマッカーサーを介してケソンに対し、敵にフィリピン資産を処理させない点で財務省と合意している旨を伝えた。そこでマッカーサーの副官ハフは、財務省の許可を得た上で、数名の将校とともに数百万ドルの紙幣をドラム缶に放り入れ、ガソリンを使って焼却処分した。ドル紙幣の続き番号はすべて控えておいた。煙が立ち上ると、カビデの日本軍がその燃やしている場所を目がけて砲弾を撃ち込んで来た。またマニラから運んできていた一〇〇〇万ドルほどの金銀の延べ棒は、二月四日夜、密かに米潜水艦トラウト号によって島外へと持ち出された。<sup>(2)</sup>

第二は、マッカーサーら要人に対する特別報償金の支払いであった。一月三日、ケソンは秘密の行政命令第一号を発し、アメリカ国内の銀行口座にあるフィリピン連邦資金から六四万ドルを引き出させ、その金をマッカーサー(五〇万ドル)ほか、参謀長ザザラランド(七万五〇〇〇ドル)、参謀次長マーシャル(四万五〇〇〇ドル)、副官ハフ(二万ドル)に与える旨を決定した。約六週間後、マッカーサーはこの報償金を手にした。これは軍事顧問という職務に対する特別報償金という名目であったが、報償の対象としてマッカーサーが陸軍少将(のちに大将)へと現役復帰していた一九四一(同一六)年七月から一二月までの期間をも含んでおり、したがってこの報償金授受は軍規に違反していた。問題は、なぜこのような支払いがこの時期にケソンによって実行されたのかという点である。シャラー教授は、「日本軍当局は、マニラを占領するやいなや、フィリピン人幹部に対し職務を続行するよう要求した。……数多くの友人が日本軍に協力することにシヨックを受けたケソンとマッカーサーは、お互いの忠誠心を再確認する方法を捜し求めた」結果がこの報奨金授受であると解釈しているが、この問題はそれほど単純な理由によるのではなかったであろう。<sup>(3)</sup> この支払いには、いくつかの複雑な文脈と要件が絡んでいる

ように思われてならない。この支払いの経緯については、サザーランドの秘書兼タイピストであったロジャーズ軍曹が詳細な記録を残しているので、彼の記録に基づいてこの不可解な謎について後述したい。

第三は、ケソンの突発的で抗米的な「フィリピンの中立化および早期独立」の要求であった。その背景としては、第一に、日本の傀儡である行政機関がマニラ市長に任命されたホルヘ・ヴァルガスを中心として、一月七日以降に発足していたこと、第二に、同月二日に東条首相が貴族・衆議両院での施政方針演説の中で、「比島に関しては、将来同島の民衆にして、帝国の真意を了解し大東亜共栄圏建設の一翼として協力し来る場合においては、帝国は欣然として彼等に独立の榮譽を与えんとするものである」と、フィリピンの条件付の独立承認を表明したこと、第三に、その日本に呼応して、二月六日、ケソンの政敵エメリオ・アギナルド (Emilio Aguinaldo) 將軍がマニラの放送を通じて、マッカーサーに対し、これ以上のフィリピン人の犠牲とフィリピンの破壊をもたらしないうちに即刻抵抗を止めて降伏するよう要求したことがあった。<sup>(4)</sup>

とりわけアギナルドの反米・反マッカーサーの放送はケソンを苛立たせた。彼はアギナルドの親日的主張が、フィリピン人の多数を占める非インテリ層に大きな影響を及ぼすことを知っていたからである。それ以上に、彼にはワシントンの消極的態度が承服し難かった。車椅子に座りながらアメリカのラジオ放送に耳を傾けていたケソンは、「大量の援助物資と兵力がヨーロッパへと直ちに送られるだろう」との声明に接し、ついに怒り心頭に発した。これを憂慮したマッカーサーは、流暢なスペイン語を話す G 2 (情報部) 部長のウイロビー大佐に命じて、ケソンをなだめさせようと試みた。しかしケソンのアメリカに対する憤慨を静めることはできなかった。彼はマッカーサーに対して、「これまでの反日姿勢を変更することを真剣に考えている」と告げた。マッカーサーはその誤りを糺して、「日本側がケソンをマラカニヤン宮殿の主として厚遇するとは思えない」と説いたが、ケソンは受け入れず、「フィリピン国民は日本と協力すべきであり、前線にいるフィリピン兵士は降伏して米軍か

ら離脱すべきことを表明する」との強い決意を伝えた。ただし彼は日本の慈愛に力点を置いた当初の政策案はあきらめ、「フィリピン戦争終結と日米両国によるフィリピン中立化の承認」を求め、*「第二案」*に落ち着いた。そしてケソンは形骸化された閣議を開き、アメリカ政府の戦争姿勢を厳しく非難するルーズベルト大統領宛の書簡を読み上げた。これにはオスメーニャ副大統領やマニエル・ロハス (Manuel A. Roxas) が異論を唱えたが、ケソンが両者に辞任を迫ったため、やむなく二人はこの書簡に同意せざるをえなかった。<sup>(5)</sup>

二月八日午後、ワシントンではスティムソン陸軍長官がマッカーサーを介したケソン比大統領からの書簡の内容に頭を抱えていた。マーシャル参謀総長も同様にショックを受けた。冒頭ケソンは、「軍事的観点からすれば、直ちにアメリカからの援助が届けられなければ、勇敢に戦っている将兵を救うことができない。……わが兵士達は誠実に戦争を受け入れた。……わが野戦軍は援助が早急に到着するとの考えによって奮い立ってきた。(しかし)この考え方は実現されていない。わが国民は今や死と苦難と荒廃に直面している」と危機的な現状を訴えていた。さらに翌朝、その続編がマッカーサーとセイヤーからの電文の中でスティムソンへ伝えられた。それは以下のとおりであった。

「私はここでの状況がある解決を導き出すと思う。それは私の祖国が二つの強大な国家(日米)間の戦場として、これ以上の破壊を免れるようにすることである。……マクダフィー・タイディング法の下で、アメリカはフィリピンが一九四六年に独立することを公約した。同時に、同法は大統領に対してフィリピン中立化の論議を開始する権利をも与えた。同様に、日本帝国政府はフィリピンの独立容認に肯定的な対応を表明している。上記に基づいて、私は次のことを提示する。早急に完全かつ絶対的な自由がアメリカからフィリピンに与えられるべきである。フィリピンの中立化は直ちに達成されるべきである。しかるべき時期に、日米両軍はフィリピン政府との合意の上で撤退すべきである。いずれの国もフィリピンに占有基地をもたず、フィリピン軍は直ちに解体され、適切規模の「警察軍 (constabulary)」とな

るべきである。フィリピンと関係諸国間の貿易協定はすべてフィリピンと外国との間で決定されるべきである。相互的かつ適切な規定の下で日米双方の軍隊を撤退させるべきである。私はこの所見を貴殿と日本に対して直ちに公表するよう提案する。もし両国によってそれが受け入れられるなら、撤兵を行う一方で、直ちに休戦が合意されるべきである」。

この要望書に加えて、セイヤーからも「アメリカからの援助の早期到着が望み得ないのであるならば、私はケソン大統領のフィリピンの自由と中立化への提言は論理的な方向であると思う」とのケソンを支援する添え書きがあった。そしてマッカーサーから次のような「軍事状況の推察」が提示されていた。自軍は約五〇％の犠牲に よって半減し、師団は連隊の、連隊は大隊の、大隊は中隊の規模になっている、「兵士は休みなく戦っており、疲労困憊している。救援と休息が至急必要である。士気は良いと見ているが、軍隊は防衛体制で戦うだけとなっている。あらゆるタイプの補給が不足しており、過去一カ月、全軍が半分の支給となっている」と改めてマッカーサーは窮状を強く訴え、この軍事状況は絶望的段階に達したことを述べ、「最終的な行動」、つまり「降伏」を示唆すると同時に、暗にケソンの中立化要求がやむをえない旨を伝えた。<sup>(6)</sup>

マッカーサーは回顧録の中で、「米国の政策を指導した人々は、フィリピンが米国の領域の中で一番弱い地点であることがわかっていたはずだ。この人たちは、はじめからフィリピンの防衛を強化すべきだったのだ。私は前途の情勢が思わしくないと判断するや否やルーズベルト大統領に電報して、フィリピンを米防衛計画の中に組み入れるよう要請した。しかし満足すべき回答は得られなかった。……一体いつまで私たちは一人ぼっちで置かれるのだろうか。ワシントンではフィリピン戦線は重要ではなく、従っていませんが、あるいはフィリピンの抵抗力がなくなるまで救援する必要はないとでも決定しているのだろうか」と、ワシントンの首脳陣が大局観を欠いていたと非難するとともに、ケソンがルーズベルトに対して、「米国は即時にフィリピンに独立を与え、次いで

日米間の議定書でフィリピンを中立化<sup>(7)</sup>させよとの痛烈な手紙を書き上げざるをえなかった立場を擁護した。ケソンを弁護する半面、「しかし私はこの提案を思いとどまるよう口を尽してケソンを説得することにつとめ、私はそれを支持しないし、米国や日本がそれを承認するようなことは絶対にはあり得ないとはつきりいった」とマッカーサーは弁明する。あたかもどちらに転んでもいいように保険をかけたような言い回しである。本当にマッカーサーがケソンをそのように口説いたか否かについては確証がない。

一方、ワシントンは事態を深刻に受け止めた。ルーズベルト、ステイムソン、マーシャルら首脳は、ケソンの「フィリピン中立化や早期独立」など一連の要求に衝撃を受け、明らかに感情を害した。ケソンを「裏切り者」と同然と判断し、マッカーサーが暗に彼を支持していることに怒りを覚えた。とくにステイムソンは、ケソンの提案が非現実的であり、またマッカーサーの「軍事状況の推察」はケソンの書簡以上にひどい内容であると感じた。アイゼンハワーの日記は、そのようなワシントンの空気を率直に語っている。一月二十九日「マッカーサーはケソンからの手紙を前面に押し出している。アギナルドからの声明を(前面に押し出している)。彼は情報不足や部隊の不足について不平を述べている。彼は神経質だ。二月三日「マッカーサーは気後れしつつあるように見える。彼のキャンキャンした声がわれわれに拍車をかける。……彼はつねに不確かな人物だ」。八日「マッカーサーの『戦略』に関するもう一本の長いメッセージ。彼は側面攻撃の良さを激賞するものを送ってきた。彼が考えていることはわれわれが長年研究していることではないか。彼の講義は士官学校の最下級生には良いだろう。今日、もう一本長いものがケソンから来た。私は待ち続けねばならない、それはひどく誤ったものだから。私は彼が降参したがっていると思う」。九日「一日中、マッカーサーとケソン宛の大統領メッセージの草案を用意するために過ごした。長く困難で、イラつく作業だ。両者とも赤ん坊だ。しかし今われわれは何が起ころるかを見極めるだろう。今晚六時四五分、私は大統領に会い、そのメッセージを送付することの承認を得た」<sup>(8)</sup>。

こうしてホワイトハウスではルーズベルト、ステイムソン、マーシャル、さらに新任の海軍作戦部長アーネスト・キング (Ernest J. King) 大将とスターク前作戦部長も参加して対応策が協議され、二月九日午後遅く、二本の電文がマッカーサーとケソンへ送付された。

一本目は、ルーズベルトからのステイムソンを介したマッカーサー宛の機密電報 (主題「極東状況」) であった。そこでは、ルーズベルトはケソンの二月八日の提案を明確に拒否し、「米軍はフィリピンでわが軍旗を掲げ続ける」との強い決意を伝えると同時に、ケソンおよびその閣僚の避難ばかりでなく、セイヤーとマッカーサーおよび両家族の避難にも論及していた。二本目はマーシャルからのマッカーサー宛の機密電文であり、ルーズベルトのケソン宛回答についてコメントしていた。とくにケソンが日米両国の当局に対して自己のメッセージを公開するよう求めていた点について、ルーズベルトが直接ないし間接に公的な声明を出さない旨をマッカーサーが了解するよう説いていた。そして、改めてケソンの潜水艦による「避難計画」を早急に具体化するよう要請していた。これに対してマッカーサーは、両文書を確認した上でのことか否か不明であるが、改めてケソンの掲げるフィリピンの完全独立に論及する電文をワシントンに送付したのである。<sup>(9)</sup>

他方、ケソンはこのルーズベルトの拒絶回答に落胆せざるをえなかった。彼は秘書に大統領領辞表を口述筆記させ、翌朝その原稿に署名すると述べた。それを阻止したのがオスメーニャであった。彼は、もし辞任すれば歴史はケソンを卑怯者、反逆者と記すだろうし、家族を伴ってマニラへ行けば、「愛娘たちは日本兵に暴行されるだろう」と説いた。結局ケソンは考えを翻した。二月一二日、ケソンはマッカーサーを介してルーズベルトへ書簡を送り、「われわれは貴殿が決定したこと的基本的理由を十分評価し、それを受諾する」と言明した。<sup>(10)</sup>以降、二度とこの問題が蒸し返されることはなかった。

この騒動の結果、ワシントンの首脳は一段とケソンを危うい存在と判定し、早急にケソンらをコレヒドール島



から脱出させるようマッカーサーに強く促すこととなったのである。

## 2 ケソンおよびセイヤーのコレヒドール脱出

アメリカ側の公文書を見る限り、ケソンをコレヒドール島から退避させる案はすでに一九四一(昭和一六)年二月三日付のマーシャル陸軍参謀総長からのマッカーサー司令官宛暗号電文の中に見出せる。その中でマーシャルは、ルーズベルト大統領とスティムソン陸軍長官とワシントン駐在のフィリピン弁務官がケソンのアメリカへの逃避について協議したことを報告し、もしマッカーサーとケソンが同意するならば、その逃避に関して海軍の協力を求めるつもりであることを提案していた。<sup>(11)</sup>

一九四二(昭和一七)年一月一日の午後遅く、上記の暗号電報がコレヒドール島のマッカーサーの下に届いた。彼はケソンの避難問題について本人と相談する前に、サザラード参謀長、マーシャル参謀次長、ウイロビー情報部長、ハフ副官と会議をもった。結局、「ケソンがコレヒドール島に残留することが最善の道である」点で全員一致し、その上でケソンとの会見に臨んだ。ケソンに続いてセイヤーもマッカーサーの部屋に到着した。マッカーサーはマーシャルからの電文を読み、次いでケソンの「残留」を是とする返信草案を読み上げた。長い沈黙ののち、ケソンは彼の閣僚との談合を求めた。ケソンはオスメーニヤらと相談した上で、マーシャル宛の短い書簡を認め、その書簡はマッカーサーを介してワシントンへと発信された。それは要するに、マッカーサーの返信文面の範囲内にあった。すなわち、マッカーサーの返信には「ケソン大統領の避難はあまりにも危険が大きすぎる。パターン半島とコレヒドール島は完全に包囲されており、退出手段は航空機か潜水艦かしかない。しかし制空権と制海権は完全に敵側にある」と記されていた。<sup>(12)</sup> マーシャルの提言は、体よく拒否されたのである。

しかし同月一日、国務省は、セイヤー高等弁務官もケソンと同様に「日本側に捕らえられないよう配慮せよ」

との指示をマッカーサーに伝えた。一日には今度はルーズベルト周辺からマッカーサーに対して、ケソンのコレヒドール島からの避難について丁寧に再考を求めた<sup>(13)</sup>。

マッカーサーがこれに即答した形跡は見当たらない。マッカーサーからすれば、ケソンは病弱であり、また実質的権限は限定されていたとはいえ、フィリピンのシンボルである大統領が母国を去ることになれば、それはフィリピン軍兵士へマイナスの影響を与えるばかりでなく、国民全体への打撃は計り知れないと予想されたからである。それはもちろん厳しい戦線状況に厭戦の気運をもたらす可能性があった。ワシントンもその点は十分承知しており、したがって、政府と軍首脳はセイヤーと連絡を密にしながら、マッカーサーの意向と威信を尊重しつつ慎重に事を進めていかざるをえなかったのである。

二七日、ハル国務長官はルーズベルトへ書簡を送り、マーシャルとキングという陸海軍最高責任者の同意の下に、ケソン大統領とその家族およびオスメーニャ副大統領が日本軍の手に陥らないよう留意すること、また軍事状況の進展如何により、セイヤー、マッカーサー、ハートも同様の留意をすべきことを直言した。ただしルーズベルトはマッカーサーの意向が尊重されるべきであり、セイヤーがこの点を最優先し、かつ慎重に行動するよう求めた<sup>(14)</sup>。

ようやくマッカーサーからマーシャルへこの件についての返信が届けられたのは、二月二日であった。バターソンでの苦戦がさらに深まり、その絶望的情勢からマッカーサーが降伏を示唆する直前であった。彼はマーシャルに対し、「バターソンが最終的に陥落した場合、またコレヒドール島が包囲された場合、ケソン大統領、その家族、オスメーニャ副大統領、連邦政府閣僚の最終的な保護について問題が生じる」ことを認めた上で、ケソン一行の避難には、「航空機」ではなく、「潜水艦」を使用するよう促し、その際の具体的計画を質した。またケソン本人は避難地としてアメリカを希望していることも付け加えた<sup>(15)</sup>。この時点で、ようやくマッカーサーは従来の否定的

態度を翻したのである。

マーシャルは、同日、この電文に即答した。彼は「大統領と側近はもはやケソンら要人がコレヒドール島に留まることなく、家族とともに避難するよう望んでいる」と断言する一方、その避難グループの中に、「セイヤーと家族、さらにはマッカーサー本人と家族、その他の人物をも加えるかどうか」という問題と、潜水艦によって避難すべき日時の問題については、「軍事情勢が避難作戦に直接影響を及ぼすであろうから、すべてマッカーサーに一任する」と伝えた<sup>16)</sup>。そこには明らかにマッカーサーの自尊心を傷つけないように、壊れやすいガラス細工に触るかのような細やかな配慮がなされていた。

九日には、ルーズベルトもスティムソンを介してマッカーサーへ回答した。「もしケソン大統領と閣僚の避難が無事に実施されれば、アメリカでは名誉とされ、大いに歓迎されるであろう。オーストラリア経由でこちらに來られるべきである。それはまた高等弁務官にも適用される。もし貴官が適切と考えるならば、セイヤー氏と貴官の家族にはこの機会を与えられるべきである。しかし貴官自身が状況によりその行動を決定しなければならぬ。このメッセージをセイヤー氏にも伝えてほしい」。またルーズベルトは同日に重ねてマーシャルを通じてマッカーサーに対し、大統領の意思を受けて、ケソンの潜水艦脱出計画を早急に具体化するよう「助言を得たい」と要請した<sup>17)</sup>。このとき、マッカーサーはケソンの反米的な中立宣言に相乗りする形で、ワシントンから宿願の援助と譲歩を引き出そうと試みたものの、ルーズベルトから冷徹に拒絶され、ケソンと同様に挫折感を味わっていたはずである。

マッカーサーは、その心中を整理できたのか、一日、ワシントンに返信した。そこでは彼は、大統領からの電文をケソンとセイヤーに伝達したことを報告するとともに、「もし合理的かつ堅実な機会が得られるならば、私は連邦政府の閣員と高等弁務官、その妻子を避難させたい。私の家族をそのリストの中に加えてもらったこと

には深く感謝するが、私の家族と私は守備隊と運命を共にする決意である」と述べている。<sup>(18)</sup>つまり、マッカーサーはケソンおよびセイヤーと彼らの家族の脱出を認めるのとは反対に、自己とその家族の脱出については断固拒否する態度を示したのである。それはマッカーサーの決死の覚悟を表明したものであったが、他面、ルーズベルトによってケソンおよび自己の要求を躊躇もなく拒絶されたことへの意趣返しでもあったらう。まさしくマッカーサーとルーズベルトの面子と面子、意地と意地とが火花を散らしているかのようである。

さらに一六日、マッカーサーはマーシャルに対して、ケソンと閣僚がアメリカではなく、フィリピン中部の未占領地であるビサヤ諸島に連邦政府を移すつもりであり、ルーズベルト大統領の願望に従って、彼らは日本軍に對して「一層効果的な抵抗（つまりゲリラ活動）を続けるつもりである」ことを指摘した。またコレヒドール脱出に際しては、一行は夜間に海路を進むが、日本軍からの攻撃次第では、安全なミンダナオ島に留まる可能性を述べ、たとえワシントンがこれに反対しても実行すると強調し、数日以内に潜水艦を派遣するよう求めた。そして、ケソンとセイヤーを同時に退避させることは困難であるため、まずケソン一行を先に出發させ、セイヤー一行を後発させる予定を伝えた。マーシャルは即刻、これらの要求をすべて承認した。<sup>(19)</sup>

こうしてケソンとセイヤーのコレヒドール脱出は決定された。そこでケソンとマッカーサーは慌しく最後の処理に取り掛かった。すでに一三日、マッカーサーはケソンから「コレヒドールの金庫室にまだ銀貨など財貨が残っている」との秘密を告げられた（ロジャーズによれば、金庫室の置かれた場所は内部で知られていたという。したがって、マッカーサーは以前からその秘密を察知していたであろう）。そこでマッカーサーは、ワシントンにこの事実を報告すると同時に、これらの財貨が敵の手に渡らないために処分を行う旨を伝えた。翌一四日にルーズベルト大統領によって、この極秘の処分が承認されると、一七日、マッカーサーはケソン大統領が「金の延べ棒五本、銀の延べ棒一本、金塊など二六四個、一〇〇〇ペソ毎の六三〇袋」を米海軍へ發送した記録をワシントンに報告

した。ただしこの事実は一切公表されないと約束がなされた<sup>(20)</sup>。それゆえ、この資産の行方は謎に包まれたままである。

この財貨発送の間際の一日、マッカーサーは三日以来留保していたケソンとの特別報償金五〇万ドル授受の手続きを取った。すなわち、彼はフィリピン連邦政府の一般資金を預かるニューヨーク市チェース・ナショナル銀行に対して、「ケミカル・ナショナル銀行とニューヨークのトラスト会社のマッカーサーの口座に五〇万ドル」を振り込むほか、サザランドの七万五〇〇〇ドル、マーシャルの四万五〇〇〇ドル、ハフの二万ドルをそれぞれ指定された銀行口座に振り込むように依頼した。その依頼書にはケソン承認のサインとホセ・アバド・サントス財務長官のサインが付されていた<sup>(21)</sup>。この時点ではまだマッカーサーは自身と家族のコレヒドール脱出を承諾しておらず、ワシントンではケソンとセイヤーの脱出に続いて、いかにマッカーサーに彼および家族の脱出を決意させるかということに注意が注がれており、そのことが緊急課題となっていた。一方ではマッカーサー自身の脱出問題、他方ではフィリピン財貨の搬出問題という二つの微妙な問題の合間を縫ったかのような絶妙のタイミングであった。

ここで二つの疑問点が生じる。なぜマッカーサーがこの時点でケソンから巨額な報償金を受け取ったのかという疑問点と、なぜケソンがこの時点で最後のフィリピン財貨をマッカーサー経由でアメリカ側に引き渡すことを決意したのかという疑問点である。前者については次節で論じることとして、ここでは後者について考察する。

まず解明されなければならないのは、大晦日におけるマーシャルの「ケソン退避勧告」と、それに対する一月元旦におけるマッカーサーの「拒否反応」との関連である。マッカーサーはケソンとの会見に先立つ側近たちとの協議の結果、「ケソンのコレヒドール脱出はあまりにも危険である」との理由に基づいた回答草案を用意していた。そして、その上でケソンの同意を求めた。ケソンは長い沈黙ののち、閣僚と会議をもち、結局これに従う

決定を下したものの、それが会心の同意ではなかったことは彼の「長い沈黙」によって明らかである。つまりケソンは逡巡したわけである。そもそも彼は首都マニラからの移動に反対であったし、コレヒドールでの闘病生活は苛酷であった。しかしケソンは「政治的囚人」としてマッカーサーに頼る以外になく、客観情勢からしてマッカーサーの回答を否認できなかったであろう。とすれば、ケソンが数日後に五〇万ドルという大金をマッカーサーに提示したことは、自分とマッカーサーとの運命共同体を自覚してでもあったし、その大金はフィリピン首脳陣の身柄を預ける保険代金でもあったろう。それはあるいは、自己の立場を少しでも優位に立たせようとする交渉取引上の政治的手段でもあったと解釈できよう。なおサザーランドの秘書兼タイピストのロジャーズは、ケソンによる大金の提示は、これまでケソンの軍備計画に反対してきた反ケソン勢力に対する「牽制」である、との解釈を下している。<sup>(22)</sup>

その後ワシントンの首脳陣は、マッカーサーの抵抗を押し切って、ケソンの「退避」を本格化させた。その過程で、①退避のタイミング、②退避の方法、③退避の最終地点が問題となった。①のタイミングについては、一月となると、バターン攻略戦への影響という点では早すぎ、四月では遅すぎるであろう。敵との攻防戦という観点からすれば、一時的に敵側の攻勢が緩む二月後半から三月前半が、ケソン退避のもっとも適切な時期ではあったが、ケソンのフィリピン中立化などの性急な対米要求がその時期を早めて、二月中旬となったのである。②の方法については、ケソンの病状が複雑な影響をもたらした。ケソンに付き添う医師は潜水艦による避難方法に難色を示した。しかし通常の水上艦では日本軍に捕獲されてケソンが殺される危険性があった。結局ケソンは当初の潜水艦による脱出方法を選択し、米潜水艦のコレヒドール到着日が脱出日となった。③の最終地点は二転三転した。当初ワシントン側はアメリカへのケソンの避難を歓迎し、ケソンもそれに同意したが、途中からビサヤ諸島ないしミンダナオ島への避難へと変更された。ケソンと閣僚の間、あるいはケソンとマッカーサーの間にとの

ような議論があったか不明であるが、マッカーサーの立場からすれば、ケソンがアメリカに避難滞在するとなれば、彼はルーズベルトによって政治的に封じ込められるとの思いがあったであろう。とすれば、マッカーサーは対日ゲリラ戦を指揮するとの名目で、自己の統制が効くフィリピン中南部にケソンを避難させる方が好ましいと判断したと推測できる。

次にフィリピン財貨問題であるが、この資産はケソンにとつては最後の頼みの綱であり、避難生活には不可欠な資金としてそれを活用せねばならず、その使途については不明とする方が好ましかった。ルーズベルトはその意味を理解して、あえてマッカーサーの依頼通りに公表する義務を免除したのである。<sup>(23)</sup>

こうした一連の処理を終えて、一七日にはケソンとセイヤーを避難させるための調整が終了した。そして一九日、米潜水艦ソードフィッシュ号が日本軍の包囲網を掻い潜ってコレヒドール島に到着し、翌二〇日、ケソン大統領とその家族計五名、そして閣僚らが同島を去った。ただしマッカーサーの信頼厚いロハスだけは残った。その三日後、同じ潜水艦でセイヤー一家三名を含む計二一名がコレヒドール島を脱出し、オーストラリアへと向った。<sup>(24)</sup>もはや島に残る女性は、ジーン夫人と家政婦のアチューのみとなったのである。

### 3 マッカーサーのコレヒドール脱出応諾

ワシントンでマッカーサーのコレヒドール脱出が協議されたのは、一九四二(昭和一七)年一月二七日のことであった。この日、ハル國務長官はマーシャルおよびキング陸海軍首脳との協議の上で、ケソン大統領やセイヤー高等弁務官ばかりでなく、マッカーサー自身もコレヒドール島から避難させることを考慮すべきであるとルーズベルト大統領に提言したのである。ただしルーズベルトはあくまでマッカーサーに決定の裁量権を与えるとの慎重な姿勢を崩さなかった。<sup>(25)</sup>

前述のとおり、ケソンのコレヒドール脱出についてマッカーサーの態度が否定から肯定へと転回したのが二月二日であったが、マーシャル参謀総長はこの機会を見逃さず、同日、脱出メンバーはケソンおよびその家族とオスメーニヤばかりでなく、「セイヤー氏、その家族、マッカーサー夫人と息子、その他のアメリカ人を含めた顔ぶれにするかどうかという問題がある」とマッカーサーに畳み掛けた。<sup>26</sup> マッカーサーに新たな課題を投げたわけである。

マッカーサーは回顧録の中で、「マーシャル將軍は、マッカーサー夫人とアーサーを潜水艦で撤退させてはどうかと私に提案してきた。軍事情勢は急速に悪化して、私が深く愛するこの二人を脱出させるチャンスが再びあるかどうかかわからない情勢だった。ケソン夫妻は、夫妻とセイヤー夫妻も直ちに脱出する計画だから、マーシャルの提案を受け入れるようにと私に強くすすめた。それは私の生涯に数少ないせっぱ詰ったひと時だった。……妻の返事はわかっていた。……私はマーシャルの思いやりのある提案に『私と家族は防衛軍と運命を共にする』と回答した」と叙述している。実際ジーン夫人は次のように証言している。「將軍は私を呼び、彼のオフィスに行ったことを覚えている。そして彼は私にそのメッセージを見せた。私はこう言った。『將軍、私は行きません。……彼(マーシャル)に感謝します。でもアーサーと私はあなたと残ります』と。私は決心しました。<sup>27</sup>」なおマッカーサーが「私と家族は防衛軍と運命を共にする」と回答したのはこのときではなく、一週間後のルーズベルト大統領からの提言に対する回答の際であった。

これに対して陸軍省戦争計画部(WPD)部長のゲロー准将が、二月四日、次のような極秘電文をマッカーサーへ送った。「もつとも重要な貴官の移動の問題は、貴官の軍がもはやバターンを維持できなくなった場合であり、またコレヒドールを守るしかない場合である。このような状況の下では、貴官の職務上必要なことは、そこで戦い続けるよりも極東のほかの場所で戦い続けることかもしれない」。同電文はこのように再度マッカーサー



のコレヒドール退避の可能性に論及した上で、マッカーサーの新しい任務について提案していた。すなわち、この新しい任務には、具体的には二つのケースがあり、一つはミンダナオ島へと進み、当地でゲリラ作戦を指揮すること、もう一つはさらに南方のオーストラリアへと進み、現地の爆撃機隊を中心に支援態勢を固めることである。以上に関するマッカーサーからの回答はすべて極秘とし、「陸軍省には一切の記録が残らないように措置する」こと、マーシャル参謀総長も「閲覧のみ(アイズ・オンリー)とする」こと、そしてこの電文は「大統領決定に先立つものである」ことも同電文は明記していた。<sup>(28)</sup> いかにもワシントンがマッカーサーに対して細心かつ特別な配慮をしていたかがわかる。

しかしこのような配慮にもマッカーサーは頑として応じようとはしなかった。むしろマッカーサーは前述のとおり、二月八日(本間司令官がバターン攻略戦の一時中止を命じた当日)、ワシントンに対して大きな賭けに出た。ケソンのフィリピン中立化や早期独立といった諸要求を前面に押し出して、懸案の援助と援軍を引き出す作戦であった。しかしルーズベルトの翌九日の回答はその期待を粉碎するものであった。ケソン共々、マッカーサーはこの政治的賭けに完敗したといえる。しかもルーズベルトはケソンならびにその家族ばかりでなく、セイヤー高等弁務官とその家族、そしてマッカーサーの家族にも避難の機会が与えられるべきであると提言していた。大統領直々の公式の申し出であった。さらにルーズベルトは、「私は防衛軍のうちフィリピン人将兵の降伏をとりはからう権限を貴下に与える。……その中には部隊の分離計画、および貴下の判断で必要と思われる場合、米人将兵をフォートミルズ(ニューギニア)に撤退させることも含まれる。これらを、いつどの段階で実行するかも貴下にまかせる。……近く貴下がきわめて切迫した状態に追込まれるかもしれないことを十分に知りながら、この非常に難しい任務を貴下に与える」と述べた。

すると今度はマッカーサーが拒絶する番であった。一日、彼はケソン一行とセイヤー一行の避難については

同意するものの、「私の家族をそのリストの中に加えてもらったことには深く感謝するが、私の家族と私は守備隊と運命を共にする決心である」と返答すると同時に、「私の指揮下のフリーピン部隊を降伏させるような気持ちには、私は毛頭もっていない。私はバターンで壊滅するまで戦い、コレヒドールでもそうするつもりである」と降伏の勧めを斥け、あえて「殉死」を選ぶと宣言したのである。<sup>(29)</sup> ここには、マッカーサーの勇氣というよりも、むしろ彼のルーズベルトに対する威信とプライドをかけての反発といった観があった。

しかしマッカーサーはその後、ワシントンと自分との格の違いを思い知らされることになる。まず一四日、再びマーシャルが「貴官の家族が避難しない」との決定に関して、「その後に危機的状況がさらに深刻化した場合、貴官とその家族とを引き離すことを余儀なくされるかもしれない」し、そのような危急に際して「貴官が『痛恨の極み』とならないかを案じている」と説いたのである。これはマッカーサーの論理的弱点を鋭く突いており、恐らくマッカーサーの心中を揺さぶる効果があつたろう。<sup>(30)</sup> このタイミンクで、前節のとおり、一三日にケソンが極秘のフリーピン財貨問題がマッカーサーへ提起され、それがワシントンに通報されるのである。しかもケソンとマッカーサーはルーズベルトに一切この事実を秘匿するよう依頼した。それに対して、ルーズベルトはその意味する内容を理解した上で、一四日、これを承認するのである。一三日当日にマリント・トンネル内でなされたマッカーサー・サザーランド会議の記録を残しているロジャーズ軍曹は、この会議でマッカーサーとケソンが話し合い、結局ケソンがマッカーサーへ働きかけたとの「正当と偽善を装った証拠を残す」ことで両者は合意し、サザーランドがそれを文書化したというのが自己の解釈に近いと述べている。<sup>(31)</sup>

ともかく翌一五日、マッカーサーは上記の承認に対する感謝の意をルーズベルトに伝達すると同時に、懸案であつたケソンからの報償金五〇万ドルの支払いをニューヨーク市チェース・ナショナル銀行に陸軍省を介して要請した。即日、陸軍長官(ステイムソン)はこれを認め、同銀行への支払い手続きを指示したのである。<sup>(32)</sup> このス

ムーズな了解は一体何を意味するのであろうか。

シャラー教授は、このマッカーサーの不可解な行為は、「ケソンの独立要求」に対する「ルーズベルトの拒絶」と関連しており、この五〇万ドルが自分の銀行口座に移される間、マッカーサーは「五〇万ドル以上の価値のある一二〇〇万ペソの借り入れを、ケソンの側近ロハスに申し込んだ（彼は移転が確認された後で、この金を返却している）」。マッカーサーに授与されたすべての勲章と報償金のうち、これだけは彼が内密にしていたものだった。マッカーサーの複雑な行動は、彼が法律上の問題を知悉していることを示したが、また、彼が『守備隊と運命を共有する』つもりのないことを示唆していた」と鋭く分析している。<sup>(33)</sup>ただし、このシャラー説は半分正しく、半分は誤りであろう。正しいと思われるのは、第一にマッカーサーのこの報奨金の授受行為とルーズベルトの拒絶とが関連していること、第二にこの授受はマッカーサーが「守備隊と運命を共にする」つもりはなかったこと、つまりコレヒドール脱出がすでに彼の頭の中にあつたというシャラー分析である。誤りとは、マッカーサーとケソンの間の暗黙の了解、そしてマッカーサーとルーズベルト（ないしスティムソン）の間の暗黙の了解がどのようなものであつたかが、ここでは解明されていないことである。

ロジャーズ軍曹は、一月三日のケソンによる行政命令第一号の実施をなぜマッカーサーが二月一五日まで猶予したのかという疑問について、「マッカーサーはルーズベルト政権下で参謀総長として勤務しており、スティムソンやルーズベルト（の性格）を知っていたし、当時のコレヒドールからの公文書を受け取ったあとに続く一連の動きを知っていた」からであると指摘する。つまり、警戒心の強いマッカーサーは軍法会議などで違法性を追及される可能性を想定し、報奨金を直ちに受け取らず、受け取るタイミングを計っていたといえる。また同日のタイミングについてロジャーズは、「これら二人（スティムソンとルーズベルト）がフィリピンの中立化というケソンの提案のショックによって揺れ動いているとき」を狙つたと解釈しているが、この点はやや腑に落ちない。

憶測の域を出るものではないが、ルーズベルトもスティムソンもマーシャルも、マッカーサーの五〇万ドル請求を、彼が家族共々コレヒドール島での名誉の「死」ではなく、ミンダナオ島ないしオーストラリアでの「生」を選択するとの意思表示のシグナルと受け止めたのではなからうか。なぜなら、死ぬ者に五〇万ドルの大金は不要であろうからである。とすれば、前者のフィリピン資産の搬出問題とともに、この報償金問題は、マッカーサーのコレヒドール脱出受諾との交換条件という意義をもっていたことは間違いない。それゆえ、ルーズベルトもスティムソンも、この法的に難色を示すべき行為を阻止できなかったにもかかわらず、あえてそれを黙認したのである。それでもいくつかの疑問が残る。第一に、資金の移動に関する明確な文書の記録があるものの、マッカーサーの預金口座への最終的な振込み記録がないことである。これには、恐らくコレヒドール島に残り、マッカーサーとケソンとの間の連絡役を果すロハスが何らかの役割を果しているであろう。ロジャーズは次のような興味深い事実を明らかにしている。「私はマッカーサーの財政問題について非常に注意した。一月末、(マッカーサー副官の) デイラーが私に数頁の文書をコピーするよう命じた。それはマッカーサーの名前と彼の財産の総額を記した所有財一覧 (security holdings) であった。デイラーは私に何回も、これはマッカーサーの個人財産だと警告し、私はこの文書を一回だけコピーし、もう二度とコピーしないと私に誓わせた。デイラーは私の傍でコピーが終わるのを待っており、再び私がもう一枚のコピーをもっていないかどうかを再度尋ねた。私は苛立った。彼は私の人権に挑発しているように思われたからだ」。また二月一三日の彼の日記には、「フィリピン連邦政府の行政法第一号は、マッカーサー將軍に米貨五万ドル〔五〇万ドルの誤り―注はロジャーズ本人〕、三名の將校に、それぞれ四五〇〇〇ドル、四万ドル、二万ドル。オー、私は將軍になりたい」とある。結局この資金問題は、前述のフィリピン資産と同じくグレーゾーンの中にあり、マッカーサーの永遠の謎であろう。

第二は、なぜマッカーサーの側近(のちのバターンボーイズ)からサザーランド、マーシャル、ハフだけが選抜

され、たとえば、なぜそこからウイロビーがはずされたのかという疑問である。実はウイロビーは軍事使節団のメンバーではなかった。彼は軍事使節団が解散したのちの、一九四一（昭和一六）年一月に極東陸軍司令部に入った人物であった。したがって、期間上、彼は報償金授受に関わらなかつたという点をロジャーズは理由にしているが、ただコレヒドール島でマッカーサーとケソン間のスペイン語の通訳などをウイロビーが務めたことなどが考慮されてもおかしくなかつた。結局ウイロビーのやや偏屈な人間性が報償金授受を妨げた可能性もある。<sup>34</sup>

さて前記の推論に立脚すれば、以降のコレヒドールとワシントン間の通信は儀式にも似た行為となる。二月一五日（推測）、マーシャルは「大統領は貴官がフォート・ミルズ（コレヒドール島を指す）を去ってミンダナオへと進むための調整をするよう指令している」こと、さらに「貴官はミンダナオ島からオーストラリアへと進み、そこで連合国軍すべての指揮を振る」こと、「貴官はサザラント参謀長を同伴することが許される」ことをマッカーサーに伝えた。ケソン一行がコレヒドールを去った二一日、改めてマーシャルはマッカーサーに「大統領は貴官がフィリピンの指揮を取るためにミンダナオへ行くことを命じることの適否を検討中である」こと、ステイムソン陸軍長官も自分も貴官の見解を待ち望んでいることを伝えた。<sup>35</sup>

マッカーサーはこの日の指令について、回顧録に次のように記述している。「二月二一日、ちょうど私の息子の四回目の誕生日に、マーシャルからルーズベルト大統領は私をミンダナオ島に移してフィリピン南部防衛のための新しい作戦基地を作ってもらうことを考慮している、と知らせてきた。同じ日、私はそのことを知らなかつたが、オーストラリアのキャンベラで閣議が開かれ、私を直ちにオーストラリアに移して新設の南西太平洋地域の司令官に任命するようワシントンに要請するという決定が下された。カーティン・オーストラリア首相からの提案を受け取ったルーズベルト大統領はできるだけ早くミンダナオに向かい、その防衛体制を安定させると同時にオーストラリアへ向かえと命令した親書を私宛に送って来た」。

しかしマッカーサーにはまだワシントンとのポーカージェームを止める意思はなかった。彼は次のように当時の自己の心理と自己の陣営内とフィリピン島内を描写する。「私がまず感じたことは、将校をやめ一志願兵としてバターンの部隊に加わっても命令のあとの方の部分は実行したくない、ということだった。しかしサザーランド参謀長以下私の全幕僚がそういった気持ちに反対した。幕僚たちは、オーストラリアに兵員、兵器、輸送船が大量に集結されているに違いないから、私は救援作戦を指揮しながらまたたく間にフィリピンに帰って来れる、と私を説得した。幕僚たちはまた、どうしてもいやであれば出発を延期してはどうかとの意見を述べた。私は決定を二日間のばしたのち、大統領にあてて私が出発した場合の結果の重大さを警告した電報を送った。電文の内容は——フィリピンに十分な支援を与えなかったことでむずかしい情勢が起きており、私がある程度それを押えることができた唯一の理由は、フィリピンの軍と民衆がその当否はともかく私に絶対的な信頼を置いていることだった。従って、私が急に去ることはフィリピン戦線の崩壊を招きかねない。そのため私の出発を延期させてほしい——という趣旨だった。……この問題については、私の考えを重んじていただきたい。当地にいる私にはフィリピンのことがわかっており、このようなデリケートな行動には正しい時期を選ばなければ、急にすべてが崩壊する結果になりかねない。当地の人々はいま私を頼りにしている。私がフィリピンに直ちに救援をもたらすこと以外の理由で引き抜かれるというような考えを、もしフィリピン人が抱けば、いかに説明しても効果はない」<sup>(36)</sup>。フィリピンの全国民から自分は全幅の信頼を得ている、その自分がいなくなればフィリピン戦線が崩壊する、と躊躇することなく断言するところがいかにもマッカーサーらしい。

そこでマッカーサーは二四日、マーシャルへ返信し、その内容は直ちにルーズベルトへ伝えられた。電文の冒頭で彼は、マーシャルの指示内容に「深く満足の意を表する」と述べながら、「しかし指令されている性急な移動はあまりにも唐突かつ抽象的であり、それはオーストラリアからの反攻手段を講じる以前に、全地域に対して

逆効果となり、フィリピン地域の崩壊をもたらすかもしれないというのが私の検討した見解である」と反論した。それでいてマッカーサーは、「この見解は貴殿が心に留めておられる早急な再建を阻止するものではない。ましてや極東での全軍の指揮を私は再度引き受けたいというものではない」と説明し、自己の移動の日時とタイミングについては、「私の助言を容れてくださるようお願いものである。私はフィリピン現地の状況を知っているし、もしこの微妙な作戦の適切な時期の選択を誤れば、突然の崩壊が起こりうるし、それは人々だけではなく、政府をも崩壊へと運ぶだろう。良くも悪くも、これらの人々は今軍事面ばかりでなく国民として私に依存しつつある。……どうかこの件では私に御一任願いたい」と要請した。<sup>(37)</sup>ここに見られる、フィリピンの片隅の小島コレヒドールに居る者が、全フィリピンの国土と国民を把握しているかのような誇大妄想は、マッカーサーの自意識がいかなるものかを物語っている。

このようなマッカーサーの尊大な回答を予想していたのがアイゼンハワー准将であった。彼は日記に次のように記している。二月二二日「ABDA(米・英・蘭印・豪を指す)地域は不統一になりつつある。われわれはマッカーサーにオーストラリア地域等での指揮を取らせるために南部への出発命令文書を調整している。私はつねにこの計画を恐れている。彼はいかなる場所よりもバターンにいる方が良い仕事をするだろうと思う(電文草案はFDR(ルーズベルトを指す)へ渡った)。二三日「マッカーサー宛電文草案は大統領によって承認され、発出された。私はそれについて疑問をもっている。われわれは彼によって混乱させられているし、彼は軍事的論理ではなくて『世論』に対応していると思わざるを得ない。ワトソンはマッカーサーが『五個軍団』並みの価値ある男だから、彼を脱出させねばならないと確信している。彼(マッカーサー)はアチャコチラでうまく仕事をこなしているが、もっと複雑な状況でもうまくやれるかどうか疑わしい。バターンは彼にとつて命令できる場所だ。そこには大衆の目が光っている。彼は大衆の英雄となっている。すべてドラマの要素がある。彼はその場所では知

られた王様である。もし彼がそこから脱出すれば、彼は大衆から脚光を浴びる立場から彼を失墜させるような地位へと追い落とされるだろう」。二四日「マッカーサーは言う、『今ではない』と。私は彼が正しいと思う。このような心理的な戦いは、誰も彼の顎にパンチを食らわせる者がいないために、WPD〔陸軍省戦争計画部を指す〕の足下へと落ちてくる。われわれは恐らくそれをやらせることになるだろう」<sup>(38)</sup>。

アイゼンハワーの予想は的中した。二五日、マーシャルはマッカーサーに対して、貴官の見解が「大統領によって注意深く検討された。大統領は貴官の発達の時期と方法の詳細について完全な決定は貴官の手に負かされると指令した」こと、また陸軍省がオーストラリアのメルボルン司令部にいるブレット少将に、貴官から指示された時期に重爆撃機をミンダナオへと発進させることを伝達したことを伝えた。この回答に対して、マッカーサーはもちろん異論なく、二六日に「満足の意」をマーシャルに返信した。<sup>(39)</sup> マッカーサーは最後の駆け引きでルーズベルトに勝ち、脱出の時期と方法に関するフリーハンドを獲得できたのである。

- (1) 前掲書『ダグラス・マッカーサー(上)』二四九頁参照。
- (2) 〈STRICTLY CONF〉From Cabot Coville, Foreign Affairs Adviser to the US High Commissioner, Ft. Mills P.I., John K. Davis, Jan. 11, 1942; 〈SEC〉From Marshall to Gen. MacArthur, Jan. 16, 1942; *ibid.* My Fifteen Years With General MacArthur, p.49; *ibid.* MacArthur and Wainwright, p.89.
- (3) 前掲書『マッカーサーの時代』九七頁参照。
- (4) 『朝日新聞』一月八日、一一日、一二日。 *ibid.* MacArthur and Wainwright, p.92.
- (5) *Ibid.* MacArthur and Wainwright, pp.92-94; *ibid.* Excerpts from Oral Reminiscences of Major General Charles A. Willoughby.
- (6) 〈SEC〉From Ft. Mills to Gen. Marshall, MacArthur, Feb. 8, 1942; *ibid.* MacArthur and Wainwright, pp.96-



- 100.
- (7) 前掲書『マッカーサー大戦回顧録(上)』五九～六〇頁、六五頁。
  - (8) *Ibid.* MacArthur and Wainwright, p.100; *ibid.* The Eisenhower Diaries, pp. 46-47.
  - (9) <SEC> Memo for the Adjutant Gen., Subj: Far Eastern Situation, Franklin D. Roosevelt, 2/9/42; <SEC> Copy of Message sent by Gen. Marshall to MacArthur, Feb. 9, 1942; <SEC> From Ft. Mills to Gen. George C. Marshall, MacArthur, Feb. 10, 1942.
  - (10) 前掲書『ダグラス・マッカーサー(上)』二二八～三頁参照。<SEC> From Fort Mills to Gen. George C. Marshall, MacArthur, Feb. 12, 1942.
  - (11) <SEC> Draft of Proposed Cablegram to Gen. MacArthur, Marshall, Dec. 31, 1941.
  - (12) *Ibid.* MacArthur and Wainwright, pp.58-59.
  - (13) <STRICTLY CONF> From Cabot Coville, Foreign Affairs Adviser to the US High Commissioner, Ft. Mills P.I., John K. Davis, Jan 11, 1942; Proposed Cable to Gen. MacArthur Written Last Night by Mr. McCloy, Jan. 18, 1942.
  - (14) <STRICTLY CONF> Memo for the President, Jan. 27, 1942.
  - (15) <SEC> From Fort Mills to Gen. Marshall, MacArthur, Feb. 2, 1942.
  - (16) <SEC> From Marshall to Gen. MacArthur, Feb. 2, 1942.
  - (17) <SEC> Memo for the Adjutant Gen., Subj: Far Eastern Situation, Franklin D. Roosevelt, 2/9/42; <SEC> Copy of Message sent by Gen. Marshall to MacArthur, Feb. 9, 1942.
  - (18) <SEC> From Ft. Mills Ck to The Adj. Gen., MacArthur, Feb. 11, 1942.
  - (19) <SEC> From Ft. Mills to Gen. George C. Marshall, MacArthur, Feb. 16, 1942; <SEC> Memo for the Adjutant Gen., Subj: Far Eastern Situation, Marshall, Feb. 16, 1942.
  - (20) <SEC> From Ft. Mills to The Adj. Gen., MacArthur, Feb. 13, 1942; <SEC> Memo for the Adjutant Gen., Subj: Far Eastern Situation, Franklin D. Roosevelt, Feb. 14, 1942; <SEC> From Fort Mills to AGO, MacArthur, Feb. 17, 1942; <SEC> From Hq Philippine Dept. in the Field to AG, Feb. 15.

- (21) <CONF> From Ft. Mills CK to AGWAR, MacArthur, Feb. 15, 1942.
- (22) MacArthur and Quezon: Executive Order Number One.
- (23) 一部にはマッカーサーがこれを持ち出したとの噂があるが、その可能性は低い。報償金はむしろケノンらの生活資金として使用されたと理解すべきであろう。この点は一切公表されなかったため、真相は闇の中にある。
- (24) Adm Glassford to Gen MacArthur, Feb. 17, 1942; <SEC> MacArthur to adm Glassford, Feb. 17, 1942. なお前掲書『マッカーサー大戦回顧録(上)』六九〜七〇頁にセイヤーが先に島を去り、その後ケノンが去ったとの記述があるが、誤解である。
- (25) <STRICTLY CONF> Memo for the President, Jan. 27, 1942.
- (26) <SEC> From Marshall to Gen. MacArthur, Feb. 2, 1942.
- (27) 前掲書『マッカーサー大戦回顧録(上)』六八頁。 *Ibid.* Papers of Jean MacArthur: Oral History, Transcript #5.
- (28) <SEC> Secret Radio for Gen. MacArthur, I.T.Gerow Brig. Gen. Feb. 4, 1942.
- (29) <SEC> Memo for the Adjutant Gen., Subj: Far Eastern Situation, Franklin D. Roosevelt, 2/9/42; <SEC> From Ft. Mills Ck to The Adj. Gen., MacArthur, Feb. 11, 1942. 前掲書『マッカーサー大戦回顧録(上)』六六〜六七頁参照。
- (30) <SEC> Memo for the Adjutant Gen., Subj: Far Eastern Situation, Marshall, Feb. 14, 1942.
- (31) <SEC> Memo for the Adjutant Gen., Subj: Far Eastern Situation, Franklin D. Roosevelt, Feb. 14, 1942; *ibid.* MacArthur and Quezon: Executive Order Number One.
- (32) <CONF> From Ft. Mills CK to AGWAR, MacArthur, Feb. 15, 1942; <SEC> From Hq Philippine Dept. in the Field to AG, Feb. 15; <CONF> Memo for the Adjutant Gen., J.R. Deane, Feb. 15, 1942.
- (33) 前掲書『マッカーサーの時代』九九頁参照。
- (34) Papers of Paul P. Rogers, Box 1, Folder #1; *ibid.* MacArthur and Quezon: Executive Order Number One.
- (35) <SEC> From Gen. Marshall to Gen. MacArthur, 1942; <SEC> Memo for Officer in Charge of Message Center, Marshall, Dwight D. Eisenhower, Brig. Gen., Feb. 21, 1942.
- (36) 前掲書『マッカーサー大戦回顧録(上)』七〇〜七二頁。

- (75) Memo for the President, Marshall. 2/24/42; (SEC) From Ft Mills Pt to Gen. George C. Marshall, MacArthur, Feb. 24, 1942.
- (88) *Ibid.* *The Eisenhower Diaries*, p. 49.
- (89) (SEC) Secret radiogram to Gen. MacArthur, Marshall, Dwight D. Eisenhower, Brig. Gen., Feb. 25, 1942; (SEC) From Ft. Mills Pt to Gen. George C. Marshall, MacArthur, Feb. 26, 1942.

(6) マッカーサー一行のコレヒドール脱出

——一九四二年二月下旬から三月中旬まで——

1 コレヒドール脱出の方法と同伴者の選抜

前述のとおり、ハル国務長官が陸海軍首脳と合意した上で、ルーズベルト大統領にマッカーサーもコレヒドール島から避難させるよう進言したのは、一九四二(昭和一七)年一月二七日のことであった。次いで二月二日にマーシャル陸軍参謀総長は、マッカーサーがケソンのコレヒドール脱出を否定から肯定へと転じた瞬間を捉えて、マッカーサーの妻子と「その他の人物」(マッカーサーとも読める)も脱出メンバーに加えるよう提言した。この提言が受け入れられなくなると、同月四日、今度はマーシャル直属のゲロー戦争計画部(WPD)部長が隠密裏にマッカーサーのミンダナオ島ないしオーストラリアへの「移動」「避難」という語句は用いていない)を検討するよう求めた。そして九日、ルーズベルトは南方における反攻準備という新任務を名目にして、マッカーサーのコレヒドール脱出を婉曲に促した。その上でマーシャルは、一五日と二一日の二度、大統領命令とステイムソンの陸軍長官の名を前面に出してマッカーサーに決断を迫ったわけである。

紆余曲折を経て、マッカーサーは自身と家族の脱出を応諾するが、いつの時点で彼がそれを決意したかについ

ては定かでない。マンチェスターの著作は、ワシントン電がコレヒドール島の司令部に届いた「二月二三日の幕僚会議の翌二四日である」と指摘している。同書はその状況を次のように叙述する。「幕僚が集まると、將軍は大統領命令を読んで聞かせ、私はきわめて難しい立場に立たされたと言った。ローズヴェルトの命令に従わなければ、軍法会議にかけられることになる。命令に従えば、部下を見棄てることになる。だから司令官の任を辞してバターンに渡り、『一志願兵として』部隊に加わるつもりだ、と。幕僚たちは抗議の声をあげた。この一週間、フィリピンではオーストラリアに大救援部隊が集結しているとの噂がとびかっていた。この食糧と弾薬がつかえる前に、その救援部隊を率いて戻ってくるべく、將軍はオーストラリアに行けと命じられているのだというのが彼らの意見であった。……悩んだマッカーサーは、とにかくいったんは辞表を口述し、用意した。だが、サザーランドの説得をいれて、一晩よく考えることにした。朝になると、一大反撃計画はいつそう本当らしく思えたので、彼はローズヴェルトに電報を打ち、出発することに同意したが、出発の『心理的タイミング』の選択は、自分にまかせてほしいと要請した」。

この幕僚会議に出席した人物は誰なのか、サザーランド以外は不明ではあるが、会議の日時と会議のやりとりには大きな誤りがないであろう。しかしマッカーサーがコレヒドール脱出を決意したのは、この幕僚会議の日よりもっと以前、恐らくケソンから五〇万ドルの報償金を受け取る手続きを取った一三日、あるいはその直前であった可能性が高い（ロジャーズは大統領命令が出た九日と推測している）。そもそも「一志願兵」となって死を覚悟する者に、大金など必要であろうか。いかに潔く勇氣ある人物であっても、コレヒドール島の厳しい客観的情勢は理解されていたはずであり、生き残るためにはここを脱出する以外になかった。マッカーサーの著作にも、またマンチェスターの著作にも、この報奨金授受およびケソン資産処分の件について一切の論及がないが、明らかにマッカーサーは、将来に向けて自分と家族のための路銀の手配を済ませた上で、①脱出方法、②脱出メンバ

③、③脱出の日時とルートの検討へと進んでいったことは間違いない。

まず①の脱出方法について、マッカーサーは二月二四日のマーシャル宛返信で、「水上艦と潜水艦の両方によってミンダナオへ行き、そこから空路で最終地に行くことが賢明であると私は思う」と述べていた。また二日後の二六日には、コレヒドール島へ潜水艦二隻を派遣するよう海軍省への依頼を求めていた。<sup>(2)</sup>ワシントンでもコレヒドール島の現地でも潜水艦の使用を当然視していた。ところがマッカーサーは潜水艦ではなく、高速魚雷艇(P.T.ボート)の使用へと傾いていく。この選択について、副官のハフ中佐は次のように証言している。「ワシントンは明らかにわれわれがほかの者(ケソンやセイヤー)と同様に潜水艦で行くことを期待していた。それは私も同じだった。それ以外の方法など考えつかなかった。さらに同行者リストに挙げられた者とその時やその後に関し合った限り、誰もが潜水艦で行くことを考え、それ以外の方法はないと考えていた。(それゆえ)私はそれを聞いて驚いた。敵が封鎖する中を魚雷艇で突破を試みることなどまったく考えていなかったからだ。将軍が潜水艦よりもP.T.ボートを好むことが明白になった。なぜなのか私にははっきりしなかったが、彼は「閉所恐怖症」であるかのようにだった。彼が地下のトンネルで眠ることを拒否した態度を思い出した。同様に、彼は「潜水艦内」<sup>(3)</sup>狭苦しい空間にいることを嫌ったのだと私は感じた」。

マッカーサーの閉所恐怖症がP.T.ボート選択の決定要因であったとは興味深い指摘であるが、実際は彼の高速魚雷艇に対する深い理解と高い評価があったからであろう。そもそも彼のフィリピン防衛構想では、海軍力を数百隻に及ぶP.T.ボートに依存することになっていた。マッカーサーは広い海岸線と七〇〇以上の諸島から成るフィリピン群島を守る場合、スピードの出る小型艇の方が効果的であると確信していたのである。もつとも、当時はまだそのような着想を持つ者はいなかった。まもなく四隻の第三高速魚雷艇隊を率いて敵陣を突破することになる総指揮官のバルクレイ中尉は次のように証言する。「P.T.ボートこそが」彼を捕まえようとしている日本

軍を驚かせ、目的を達成させる唯一の方法だと彼自身が決断した。それは天才だ。魚雷艇が脱出に使われるとは誰も以前考えなかった。……日本軍がマニラ湾を取り囲んでいた（彼は「コレヒドール入口、バターン入口の外に二二―二七隻の艦艇を至る所に配備していた」と証言するが、日本軍側の記録によれば、そのような事実はなかった）。彼らは浮遊機雷を敷設しており、そのような湾上を通過するのはきわめて危険だった。だから誰もそれを考えなかった」。PTボートの専門家ですら驚くような卓抜な発想であった。もう一つ、別の理由としては、もし潜水艦で目的地まで行くとすると、PTボートよりも四八時間、丸二日も遅れることが判明した点が挙げられる。となると「脱出できるのは、われわれが持っているPTボートのような高速艇だけだった」とバルクレーは断言する。<sup>(4)</sup>

結果論としても、潜水艦を避けたことがマッカーサーの命ばかりでなく、家族、バターンボーイズら一行全員の命をも救うこととなった。もし彼が無難な方法として潜水艦を選択していたならば、はたして無事ミンダナオ島まで到達できたかどうかかわからない。もし日本の艦艇に発見されて撃沈されたり、事故を起こしていれば、もはやマッカーサーの英雄伝説はその時点で終わっていたかもしれない。結局マッカーサーの常識にとらわれない先見性こそが、一行の生死を分けたといえる。

こうしてPTボートの使用が固まるとなれば、海軍側の協力が欠かせなくなった。そこで出発の一週間前の三月四日、マッカーサーはフィリピン第一六海軍区司令官のロックウェル少将に対して大統領からのコレヒドール脱出命令の秘密を打ち明け、ロックウェルと参謀長のレイ大佐の同伴を希望する旨を伝えた。次いで艇隊を率いるバルクレーへと打診された。まず副官のハフがバルクレーのところへやってきて、「ここから南に約五〇〇ないし六〇〇マイル（実際の距離は六〇〇キロ程度である）離れたパラワン諸島のプエルト・プリンセサまで行けるか否か」を尋ねた。バルクレーが「まったく問題ない」「簡単にやれます」と答えると、ハフは驚きの声を発し

た。バルクレーは、「この時、私は自分の能力と艇の能力に十分自信があった。そして何をしようとしているのか、その航海について知った。まったく問題はなかった。その時にマッカーサーと幕僚らが私の艇を使おうとしていると想像した。もちろん、これは興奮させる作戦だった」とその時の心境を語っている。

今度はマッカーサー自身がバルクレーに接近してきた。バルクレーに陸軍の勲章を授与するとの理由で、島の北側ドックに来るよう命じた。当日午後、マッカーサーがジン夫人とサザラント参謀長と数名の将軍を連れて現れ、叙勲後、マッカーサーはバルクレーに対し、自分とジーンのために短時間のクルーズを行うよう求めた。そこでバルクレーは両者を高速魚雷艇第四一号に乗せて、三〇分程度の湾内クルーズを敢行した。夫人はPTボートの実力を知って安心したようであった。バルクレーは「この時、私は何が起ころうとしているのかを知った」のである。

同日夜、バルクレーはマッカーサーの邸内に呼ばれた。人目を避けるためであった。ジーンは彼の容貌を“海賊”のようであったと述べている。彼は乗務員の水兵とともに艇内で生活しており、無精ひげを生やし、殺伐とした服装であった。ただマッカーサーはこのような型破りの人物を好んだ。バルクレーによれば、「彼は私をコレヒドール島の中央部の、誰もいない野原へと連れて行った。スパイにも誰にもわれわれの話が聞かれないように。そして彼がこう言った。『私の計画は脱出することだ。大統領から直接命令を受けた。実際これは三度目だ。脱出したのちミンダナオへ、そしてオーストラリアまで行く、少なくとも三月一五日までに最速で行くようにとのことだ。私の計画はそうすることだ』と言った」。バルクレーは「まったく問題ありません」と返答した。<sup>(5)</sup>この確証を得て、マッカーサーはコレヒドール脱出にPTボートを使用する決意を固めたのである。

この間、マッカーサーの同伴者の人選作業がサザラント参謀長を軸に秘かに進んでいた。まさしくバターンボーイズが誕生する瞬間であった。ルーズベルトとマーシャルは、マッカーサーの妻子以外には「参謀長のサザ

「ランドだけの同伴」を許可していた。しかしマッカーサーは出発の時期とともに同行する人員についてもフリーハンドを得るつもりでいた。最終的にはルーズベルトもマーシャルも、マッカーサーが要求するとおり、二一名もの同行をすべて黙認せざるをえなくなった。マッカーサーは回顧録の中で、「私がまず気を使ったのは、同行者を選ぶことだった。私の家族以外に軍人一七人が同行することとなったが、この軍人たちは将来のフィリピン解放に役に立つという点で選ばれたもので、その大部分はのちに南西太平洋方面軍司令部の幕僚となった」と、選抜した正当性を明らかにしている。<sup>(6)</sup>

たしかに選ばれた人員は、第二節で論じたとおり、陸軍側の一五名、すなわち、マッカーサー総司令部の枢要な上層メンバー八名とそれを支える中下層メンバー七名、それと海軍側二名を加えた計一七名であった。海軍のロックウェルとレイは別として、陸軍側の一五名とは、参謀長のサザランド少将、参謀次長のマーシャル准将、技術工兵部長のケーシー准将、諜報部長のエーキン准将、砲兵部長のマーカット准将、航空部長のジョージ准将、人事部長のステイバース大佐、情報部長のウイロビー大佐（以上が上層）、そしてマッカーサー副官のディラー中佐とハフ中佐、サザランド副官のウイルソン中佐、暗号解読部門のシャー中佐、医務官のモアハウス少佐、フィリピン要人との連絡役のマクミッキング大尉、サザランドの秘書兼タイピストのロジャーズ軍曹（以上が中層）であった。

選拔者への連絡は、マッカーサーが大統領命令の受諾をごく一部の幕僚に明言した二四日以後、サザランドがマッカーサーの承諾を得ながら個々人に秘かに伝達したことは間違いない。実際ワシントンとの重要な交信を知るロジャーズの二月二四日の日記には、「私はサザランドの命令で彼の下に留まる<sup>(7)</sup>」とあり、これは彼が脱出メンバーに選ばれたことを意味するのであろう。なお次の三名が同伴者に選ばれたときの経緯について語っている。



まずケーシーは、「私はずっとバターンにいたが、ある晩に私はコレヒドールへ行つた。爆撃を受けた施設の修理面をチェックするためだった。私がコレヒドールの小さな飛行場(キンドレーを指す)に降りた時、サザーランドからその話をされた」という。彼はそのときの心境について、「複雑だった。永久にそこ(バターン半島とコレヒドール島)を保持するのは不可能だとわれわれは感じていた。大きな増援部隊が来ないことも知っていた。しかしオーストラリアへ行くということは、マッカーサー將軍と幕僚にとつて一つのチャンスであると思つた。そこには航空機や陸上部隊が待機していて、フィリピンに戻るための増援を得る大きな機会だと感じた。状況が決定的に悪化する前に、わが軍を補充できることを願っていた」と、これを起死回生の好機であると感じた旨を指摘している。<sup>(8)</sup>

ハフは、「伝達されたのは」サザーランドが公式にそのメッセージ(大統領の避難命令)について話し、マッカーサーが行くと決めたと聞かされたその日の晩だったと思う。その後にはサザーランドから旅行同伴に選ばれた幕僚と一人の軍曹のリストを渡された」と証言する。なお、そのときのサザーランド手書きのリストは今も彼が所有しているという。もう一人の副官ディラーは、「ある晩、私が將軍とサザーランド將軍と一緒に夕食を取り、私が將軍の宿舎からトンネルの外へ出たとき、サザーランド將軍が『止まってタバコを吸おう』と言つた。それはごく自然だった。われわれはトンネルの中では吸わなかつた。それから彼は刑事のように周りを見渡した。私は何をしているのかと訝つた。すると彼は『將軍は来週の火曜日にオーストラリアへ発つ。君は彼と一緒に行くのだ』と言つた。このときだけだ、私の膝が震えたのは、戦争中何度も怖い思いをしたが、膝が震えてまったく困つたのはそのときだけだ。この時に私の人生哲学と将来計画が一変した。逃げるべきか否かをこれほど考えたことはなかつた」と複雑な心境を明らかにしている。<sup>(9)</sup>

なお夫人のジーンと四歳の息子アーサー、そして家政婦のアチューも一行に加えられた。この点についてマッ

カーサーは、「私は広東人のアマ（乳母）のアー・チュー<sup>マ</sup>を一行の中に加えたということでも激しく非難された。……（彼女は）完全に家族の一員であり……アーサーが生まれたときから私たちと一緒だった。もしアー・チューがあとに残され、コレヒドールが落ちたら、私との関係のため拷問の果てに殺されてしまったら」と、人道的観点から家政婦の同伴を決断したことを指摘している。ハフも、「マッカーサーはこれ（アチューの選抜）が批判されるであろうことを認識していたが、同時に彼女は外国人として彼と契約しており、彼は法的に彼女への責任を考えていた。彼女が一家へ献身的な奉仕をしていたことに加えて、彼女を含めるのが義務だと決心した。そう決心すると、彼は人々が言うことに構わず遂行した」とマッカーサーの見解を肯定する。<sup>(10)</sup> こうしてマッカーサーと家族三名、バターンボーイズ一五名、海軍二名の合計二一名が出揃ったのである。

## 2 コレヒドール脱出の期日とルート

②の脱出の期日については、マッカーサーとマーシャル参謀総長との間で次のような交信があった。マッカーサーはもつとも重要な二月二四日のマーシャル宛返書で、自己のミンダナオないしオーストラリアへの移動命令に同意しながらも、「移動のタイミング」および「移動方法」は自分の選択に委ねてほしいと要請した。翌二五日、マーシャルは大統領がその要請を了解し、マッカーサーに完全な決定権を与えた旨を伝達しながらも、「出発日時がはっきりしなければ明確な計画を立てられない」とクレームを付けた。そこでマッカーサーは翌二六日の返信で、「恐らく三月一五日頃に計画実施の可能性がある」と初めて脱出期日に触れたのである。そこで同日、マーシャルはメルボルのブレット司令官にその出発予定期日を伝えると同時に、その期日に合わせての長距離爆撃機のミンダナオ手配を命じた。<sup>(11)</sup>

こうして出発期日がほぼ定まった。そこで③の脱出ルートについての検討が行われた。マッカーサーから有無

をいわせぬ調子でPTボート使用を告げられたサザーランドは、バルクレイ、レイ、ハフの三名を呼び、極秘裏に逃避行の詳細を検討しよう命じた。ハフは、「誰もわれわれの計画にヒントを与えてくれなかった。バルクレイの乗務員でさえ、われわれがどこに行くのか最後まで知らされなかった。……ロックウエルもレイも長い海軍での経験があるが、PTボートの専門家ではなかった。私にはQボート(PTボートの意味)の経験があったし、私がフィリピン海軍を作ったので、次のような方法を確信していた。長い船旅では、一本の縦線隊列で行くのが最善であると。最初の艇が航路を開き、後続艇がその波跡を追っていく。先艇のスピードの波高で転覆するのを避けるためである。しかしロックウエルとレイは戦闘状態に入るかもしれないから、マッカーサー將軍を乗せる艇を最後尾にしたダイヤモンド型の艇隊形がベストであると感じた。私はそのような隊形は静かな海でもかなり揺れることになる」と主張したが、私の抗議は脇へ追いやられた」と議論が割れた事実を明らかにしている。<sup>(12)</sup>

一方、バルクレイとロックウエルは、進行ルートについて「海岸からはるか沖、五〇マイル(約八〇キロ)ほどの沖に出て進む。沿岸航路(Passage way)には日本軍が待ち構えているだろうから、通常の航路を避けよう。沿岸から遠く離れて航行すれば、日本軍はわれわれを発見しにくいだろう」との点で意見が一致した。バルクレイは、「当時はまだリーダーがなかったため、日本の艦艇は従来の古臭い視力に頼る方法でわれわれを発見しなければならなかった。しかしそれはかなり難しかった。だからその計画を実行することにした。私は作戦命令やその他のことも行なった。私はこの航海の指揮官であり、マッカーサーが陸軍の將軍であろうと誰が海軍の提督であろうと、一切どうこうしろとは言わせないようにした。それは素晴らしいことだった」と誇らしげに述べている。その結果、「最初の夜にわれわれはミンダナオ島の北西に位置するクロー諸島の一つの島(タガヤン島)まで行くことを決定した。われわれは日中その小島に隠れ、もし可能なら、次の日の夜までミンダナオまで続けて航行する。何らかの理由で魚雷艇での航行を継続できなくなった万一の場合は、潜水艦が第二日目の朝にクロー

「諸島へ来て、われわれを收容することになった」<sup>(13)</sup>。

ところが出発日程が急遽三月一八日夜から三月一日へと七日も繰り上がった。この変更の理由についてハフは、月明かりの状況を指摘する。つまり、当初予定した一八日夜は満月に近く、したがって、わが艇が月光に照らし出されて日本側に発見されやすい。そこで陰月である二日夜、「月明りが暗いとき」に出発を変更したという。「われわれが出発する際、すべてが暗いことが必要であった。というのは高速で走るPTボートは波を蹴立てて広い波高を残すので、敵の航空機からは夜でも見えるからだ」と説明している<sup>(14)</sup>。

以上のような議論を経て、次のような詳細な「コレヒドールからのマッカーサー將軍一行のための一九四二年三月一〇日作戦命令」が定まった<sup>(15)</sup>。

第一六海軍地区司令官から高速魚雷第三艇隊指揮官へ

主題「作戦命令」および添付資料……別紙A「一般的指示」、別紙B「代案計画」、別紙C「乗船計画」、別紙D「敵情報」、別紙E「許可申請コピー」

1. 第三高速魚雷艇隊は、二一名搭乗の一行を下記に指定する南方の港まで運ぶ任務に当る。進路上、敵の航空活動および海上活動が予想される。

2. 一行は三月一日二〇時にターニング・ブイで待ち合わせて、別紙Cに従って出発する。海峡を通過する海路を進み、三月二日ほぼ七時三〇分にタガヤン島に到着する。風下側の岸（西側）に沿って碇を下ろし、同日一行を上陸させる。一七時に再び出航し、指定された港まで進み、三月一三日七時以前に到着する。一行を降ろし、別の命令による指示に従って進行する。もし艇が破損した場合、乗員を移動させて個々に進むか、あるいはすべての人員を移動させ、もし必要ならば艇を沈没させる。コラム（表）での最後尾艇は航行不能となった艇を横づけにして航行することを命じる。

3. 燃料は五一〇(約八一六キロ)マイル分を保有し、食糧は五日分を保有する。集結地はタガヤン島、ピエドラ・ブアンカ島、ミンダナオ島カガヤン、救援のための同じ場所とする。
4. 詳細な指示と代案計画は別紙を参照せよ。

F・W・ロックウエル

〔別紙A 一般的指示〕

1. 敵の行動

- (a) もし第三高速魚雷艇隊が夜間に敵と遭遇した場合、たとえ発見されなくても、また攻撃されなくても、優先艇「マッカーサー搭乗艇」が逃避できるような回避戦術を取る。他の艇は敵を攻撃し、自己の裁量(無条件)で日中は潜伏するようにする。そして実際のDOGボイントへと進む。
- (b) もし日中の潜伏中に敵の航空機(調査の脅威を伴う)によつて発見された場合、艇隊は直ちに発進し、分散し、攻撃前に北方ないし西方へと敵を引き付けるように試みる。もし暗闇により乗員の再出航が可能ならば、打撃を受けていない艇は引き返すか、さもなければ実際に(ミンダナオ島の)カガヤンへと進む。
- (c) もし可能であれば、一隻の艇が上陸前に偵察のために先行することは許される。
- (d) MTBの原則は航海と攻撃に関しては維持される。

〔別紙B 代案計画〕

〔計画1〕 もし最初の行程で敵の空中ないし海上からの攻撃のために、第三高速魚雷艇隊が夜明け前にタガヤン島に着できない場合、艇隊はもっとも近くの潜伏可能な場所(恐らくクリオン諸島のデイクバイト島)へと進む。そして二日目および三日目の夜間に最善の方法を取つて(ミンダナオ島の)カガヤンへと行く。

〔計画2〕 一行全体は上陸することなく、夜明けまで乗船し続けることを決定する。旗艇は水上艦の接近を警戒するため、監視員と信号手を置く。そのような情報を受け取るため、すべての艇は西方へと分散し、のちに指定されている

場所と時間に集結するよう指令されるかもしれない。

〔計画3〕 もしタガヤンで敵の空中ないし海上からの攻撃によって、艇隊が再出航を不可能と考えて同島に留まらざるをえなくなつた場合、一行は任務をすべて改め、残留する者が三月一三日の夜明けまでに選抜されることを許可する。

〔計画4〕 もし第二の行程で遅れが生じて、艇隊が夜明け前にカガヤンに到着できない場合、もつとも近くの潜伏場所へと進み、次の夜までそのまま潜伏を継続する。

〔計画5〕 その他の計画が失敗した場合、そしてその他の許可ないし潜水艦の救援を必要とする事態となつた場合、潜水艦との待ち合わせの場所と時間については、第一六海軍区司令部を介してシャープ提督から命令が発せられる。ここではFOXポイントが用いられる。もし可能であれば、一隻の魚雷艇ないし他の小型艇が指定された集結地点で潜水艦と落ち合う。夜間の場合、この艇は一〇分間隔で一分間サイド・ライトを点滅させる、そして一〇分間隔で三〇秒間、白いライトを照らすこと。

〔別紙C 乗船計画〕

1. 艇と乗艇者は、指定された時間までに迅速に荷物を積み込み、二〇時に次の場所に集合し、十分な時間的余裕をもつて出発する。

- ・ PT四一号 (バルクレー中尉) ……一九時半に北ドック
  - ・ PT三四号 (ケリー中尉) ……一八時に北ドックの“コモ”に乗艇
  - ・ PT三五号 (エイカーズ下士官) ……同上
  - ・ PT三二号 (シューマチャー下士官) ……一九時一五分に検疫ドック (マリベルス)
2. 乗客は次のとおり。

- ・ PT四一号 ……マッカーサー將軍 (および三名)、サザーランド少将、レイ海軍大佐、ハフ中佐、モアハウス少佐の計八名

・PT三四号……ロックウェル海軍少将、マーシャル准将、ステイバース大佐、マクマッキング大尉の計四名  
・PT三五号……ウイロビー大佐、ディラー中佐、ウイルソン中佐、ロジャーズ軍曹の計四名  
・PT三二二号……エーキン准将、ケーシー准将、マーカット准将、ジョージ准将、シャー中佐の計五名  
合計二一名と乗組員

「別紙D 敵情報」

1. 敵の軍隊は次の地域に集結していると伝えられている。

ルソン島のバタンガス、ソルソゴン、ミンドロ島のポート・カラバン、カラバン〔占領は東海岸のボンガボンゲ南まで拡大している模様〕、マスバテ島のマスバテ、アロロイ、ミンダナオ島のザンボアंगा、ダバオ、ジョロ島のジョロ
2. 敵の海上部隊はルソン北部に加えて、次の地域で作戦を展開中と伝えられている。
  - (a) ミンドロ島の南および東沿岸。アンブロング島に巡洋艦一隻が数日前に停泊
  - (b) ネグロス島の南西とバナイ島の南西の間
  - (c) セブ、ネグロス、ミンダナオ各島の都市への砲撃
3. 敵の航空活動がビサヤ地域で頻繁に伝えられている。明らかに台湾からマニラまで、そしてダバオまでの飛行が活発に行われつつある。敵の航空機は飛行中、群島の内海を探索している。レガスビはバラワン湾(ミンドロ島)で猛爆撃されたし、カガヤン(ミンダナオ島)は爆撃された。現在の敵の行動目的は、空から敵艦艇を発見し、その後水上艦がこれを捕獲することにあると思われる。REGIUS(意味不明)がアンブロング島の風下に日本の駆逐艦一隻を曳航していたと最近伝えられている。
4. スービック湾における敵の水上艦の活動は活発化しつつある。巡洋艦を含む多数の戦闘艦艇の出入りが、多数の輸送船とともに同様に毎日伝えられている。それら艦船は、通常朝に到着し、午後遅く出発する。わが軍の偵察艦艇は暗くなったのちは敵艦艇の停泊地点へ接近できない。それゆえ、敵艦艇が同一かどうかわかりでなく、それら艦艇

がフィリピン南方へと進むのかどうか、あるいは船団がスービック湾で人員や物資を日本へ輸送するために停泊しているのか否かは判明しない。

以上

### 3 コレヒドール脱出の当日

この間コレヒドール島は、ほぼ連日、日本軍から嵐のような爆撃と砲撃を受けていた。ロジャーズの日記はその苛烈さを伝えている。二月六日「ジャップ、約三時間、コレヒドールを砲撃。一〇〇発がフォート・ドラム（コレヒドール島の南方に位置する小島を指す）に命中。前線で砲撃。強制上陸失敗と伝えられる」。一日「カビテから砲撃」。一日「コレヒドールに激しい砲撃。……シンガポール、午後七時に陥落」。一日「カビテから激しい砲撃、前線に沿って増大。フォート・フランクの外にある水槽破壊。フォート・ミルズからバケツで補給中」。一日「すべての前線とハーバーで砲撃増大」。二日「敵軍、犠牲者続出によって大きく減退。われわれを殲滅するには増援を必要としよう」。三日「日本の巡洋艦と駆逐艦によって〔マニラ〕南部の多くの市は砲撃される。……夜、私はミドルサイドを歩く。オー、私は勇気があるのか?」。四日「私は寂しく、空腹だ」。五日「ジャワ陥落。バターンではひどい。雨期が始まる」。九日「私の時計とチョコレートの塊とを交換する。それだけの価値があった。前線では何もすることなし。私は正真正銘の悪漢になりつつある」。バルクレームも次のように語っている。「コレヒドールでは、午後には必ずいたるところが爆撃されつつあった。台湾から重爆撃機が五〇機から七五機もやって来た。同時にバターン半島南端のカブカベンの海軍造船所のすぐ近くに日本軍は長距離砲を据え付けており、コレヒドールを砲撃しつつあった。それ〔陥落〕は時間の問題だった。状況はひどかった。アメリカから救援がなく、望みはなかった<sup>(16)</sup>。

以上のような空と陸からの攻撃に加えて、飢えと疲労による心理的重圧からコレヒドール島の司令部と守備隊



の窮状は沸点に達しつつかつた。そのような雰囲気の中でマッカーサーの脱出計画が漏れ出した。脱出メンバーに入れるか否かは生死の分かれ目でもあったから、守備隊全員がその成り行きに神経を失わせたであろうことは想像に難くない。それゆえ、選ばれなかった者も選ばれた者も、複雑な心理に陥った。副官のディラーは、「(サーランドから)秘密を守るように誓わされて、非常に困った。私には多くの親友がいた。彼らにさよならと言えないし、去るとも言えないから、とても辛かった。明らかに「秘密が」漏れていた。何人かがやって来て、私に手紙を渡し、「君が行くことを知っている。それを否定するな。君が向うに着いた時にこの手紙をどうか出してほしい」と言われた。私は何も言えなかった、それは最も辛い時間だった。もちろん私は將軍が去って軍を立て直すために戻り、フィリピンを救ってほしいと思った。それはフィリピンおよびコレヒドールにとって唯一の望みであつたが、友人と離れるのは辛かつた」とその時の心情を吐露している。<sup>(17)</sup>

マッカーサーとて同じ思いであつた。「私の悪口をいう連中は、私がだれを同行者に選んでも非難の種にしただろう。毒のある話が幾つも流され、次第に大げさになって伝わった。中でも恐らくそれ見たことかといった調子で伝わったに違いないと思われる話は、私が重病の米人看護婦たちをコレヒドールに残して、マニラ・ホテルの私の部屋からもつてきていた家具(二説ではピアノも含む)を船に積み込んだということになつてた。事實は、あの時コレヒドールを離れた一行は、私も私の家族も含めて一人にスーツケース一個を許されただけで、他に何の荷物もなかつた」と彼は告白している。<sup>(18)</sup>

ジーン夫人がマッカーサーから脱出のことを知らされたのは、出発のほんの数日前であつたという。記憶の良きジーンにしては珍しく、その日時を忘れたという。恐らく彼女は早くから何かを感じ取つていたのであろう。彼女は出航までの期間、ハフトともに四隻のPTボート搭乗者のための食糧等を調達することで多忙であつた。「シドが軍需品倉庫へ行って、大きな丈夫なバッグを持つてきた。そしてわれわれはトンネル内の売店へ行った。

暗い場所へ行った。これら四袋一杯にKクラス(軍の配給等級を指す)の割当食糧を詰め込んだ。PTポート上でわれわれの身に何か起こった場合に備えた物すべてだった。……アチューとアーサーに何をしているのかを言ったかどうかとも覚えていない。私がやったことは袋詰めだけ。シドがそれを秘密にするように言った。深くて暗い秘密だった」とジーンは語っている。ハフも、「私にはもう一つの仕事があつて、それは乗船者と乗組員のための一日分の十分な食糧を用意することだった。ジーンは私を手助けしてくれた。缶詰などをトンネル内の將軍の宿舎に静かに移した。そこでわれわれは四袋に分けた。一週間以上、われわれは小さな宿舎に食糧を集め、それをジーンが四つに仕分けしてくれた」と証言している。<sup>(19)</sup>

出発前日の三月一〇日、バターン半島の右翼守備隊の責任者であるウェンライト少将がコレヒドール島に呼ばれ、マッカーサーから脱出計画を打ち明けられた。彼にとつて、それはさぞ衝撃的であつたに違いない。ウェンライトはウエストポイント士官学校ではマッカーサーが最上級生であつた時の最下級生であり、先輩後輩の絶対的關係があつた。彼は一九〇六年組の生徒隊長になるなど、将校以下の者からも評判が良かった。その彼にマッカーサーは「私が帰つて来るまで頑張るように」と命じた。ジーン夫人は、「ウェンライトがコレヒドールにやつて来た。將軍は常に彼をジョナサンと呼んだ。こう呼んだのは唯一だと思う。私を含めて皆彼を『スキニー』と呼んだ。彼は私に対して非常にフォーマルで『マッカーサー夫人』と呼んだ。……私は、『あなたが私をジーンと呼んでくれないから、私はもうあなたのことをスキニーと呼ばないわ』と言つた。それが彼との最後の会話だつた」という。<sup>(20)</sup> なおマッカーサーから後事を託されたウェンライトは、まもなく少将から中将へと昇格するが、結局彼は五月のコレヒドール陥落以後、日本の敗戦まではほ三年余も遠い満州の地で捕虜として過ごすこととなる。まさしく明暗を分けたのである。

一日の出発当日がやつてきた。ハフは当日の様子を次のように述べている。マッカーサーは「私に自動車か

ら四つ星(大将)の証明板を取り外してバッグに入れるように言った。そして、『われわれはオーストラリアで彼ら(ブレット少将の意味か)に代わることができないかもしれない』と指摘した。……私はわれわれのバッグやその他の荷物を積むために、三台の車を使ってトンネルへと行かねばならなかった。……何人かが静かに『さよなら』と言った。……それは張り詰めた、何ともいえない不幸で落ち着かない数分だった。誰も多くを言わなかった。誰も多くの質問もしなかった。<sup>21)</sup>」

一方マッカーサーは、当日の状況を次のように回顧録に記している。「私の時計で午後七時一五分に、私は玄関にすわっている妻のところへ行き、『ジーン、もう車に乗る時刻だよ』とやさしくいった。私たちは静かなドライブのあと、バルクリーがPTボートで待機している南波止場(実際は北側の波止場であった)に着いた。一行のほかの連中はもう艇に乗り込んでいた。その日は終日、波止場付近が断続的に砲撃されていた。私は家族——妻とアーサーとアー・チェー——を乗艇させて、ゆっくりとうしろへ振り返った。波止場には兵士たちが立って、私をじつと見つめていた。私はこの兵士たちと同じ食糧を食って一キロもやせていた。……やつれてみすばらしく見えたに違いない。……トプサイドの丘の上では、重砲がまだしきりにあたりの薄闇を引き裂くような音響を立てて、赤い炎を吹き出していた。……夕闇が迫って、かすかな夜の風が水面にざざ波を立て始めた。夕方からの射撃はやみ、かすかなざわめきのほかは、完全な沈黙がおとずれてきた。まるで死が廃墟の悪臭の中を歩いてでもいるかのように、むかつくようなにおいが夜気に立ち込めていた。私は別れの挨拶に帽子を持ち上げながら、顎の筋肉が急にひきつり、私のこげ茶色にやけた顔がにわか青ざめるのを感じた。誰かが『將軍が突破できるチャンスは、どんなもんかね、軍曹』とたずねていた。『さあ、わからないね。あの人は運がいいからな。五つに一つぐらいのもんかね』<sup>22)</sup>』というのんびりした返事が聞こえた。私は魚雷艇に乗り込んで『用意ができたら、出てもいいよ』と声をかけた。

午後八時、バルクレーは直ちに第四一号艇を北ドックから出艇させ、湾の深い暗闇へと進ませた。現在、その出発地点の波止場近くにはマッカーサーの銅像が記念碑として建っている。

#### 4 コレヒドール島からタガヤン島へ

ではPTボートとはどのような艇であったのか。バルクレーは次のように説明している。「われわれが所有していた艇は全長七〇フィート(約二一・四メートル)で、ポケット・マリーン・エンジン三基を備えていた。五二ノットから五五ノット(約九六キロから一〇二キロ)のスピードが出せ、一時間に六〇マイル(約九六キロ)以上走ることができる。装備としては左右に二発ずつ、計四発の魚雷発射管を備えていた。これは非常に強力であった。また対空用の五〇ミリ口径機関銃を四基と、後尾にルイス銃を何丁か備えていた。艇には二名の士官と七名の兵士が乗員していた。艇体はベニヤ板ではなく、厚いマホガニー材が斜めに敷き詰められていた。当時PTボートは非常にパワフルだった」。しかしこれらPTボート四艇は長い間酷使されていたため、後述のとおり各艇に故障が生じるが、それでもPTボートは日本の巡洋艦や駆逐艦を追い抜く高速スピードをもっていたことと、合計一六本の魚雷を装備するなどの攻撃力が魅力であった。そして各艇には、ハイオクタン・ガソリン五〇ガロン(約一八九リットル)入りドラム缶一〇本が余分に積み込まれた。

四艇のうち三艇はコレヒドールの北ドックに集結した。全体の旗艇となる第四一号(艇長バルクレー中尉)には、マッカーサー大将(および三名)、サザーランド少将、レイ海軍大佐、ハフ中佐、モアハウス少佐の計八名が、第三四号(艇長ケリー中尉)には、ロックウエル海軍少将、マーシャル准将、ステイバース大佐、マクマッキンダ大尉の計四名が、第三五号(艇長エイカース下士官)には、ウイロビー大佐、デイラー中佐、ウイルソン中佐、ロジャーズ軍曹の計四名がそれぞれ乗艇した。そしてバターン半島の南端マリベレスからは第三二号(艇長シュ

「マチャー下士官」が残りのエーキン准将、ケーシー准将、マーカット准将、ジョージ准将、シャー中佐の計五名を乗艇させてほぼ同時刻に出港し、沖合いでもまもなく四艇が出揃った。

全体の指揮を任されたバルクレーは、初日夜の状況を次のように証言する。「われわれはまず機雷原を通過せねばならなかった。わが方の機雷原を問題なく通過できた。私は自軍の機雷原を自分の手の平のように熟知していたからだ。しかし日本側の浮遊機雷がわれわれの行く手を包囲するようには撒かれていることは間違いない。だから、そこを静かにゆくりとまわって通過せねばならなかった。機雷を見定めて、船体に当たらないように避けて行かねばならなかった。結局敵の機雷には当たらなかった。まずはうまくやった。次にわれわれは縦列隊形を取った。先頭艇(第四一号)のあとに一艇ずつ続いた。予定どおり、私はルバング島付近で南へと方向を転じた」。ところが島(恐らくルバング島であろう)から光線が反射したのが確認できた。バルクレーは、その光がわれわれを包囲するための信号であるならば、四艇が日本軍に見えられたのかもしれないと判断し、「最高スピードへとエンジンのクラックを回転させた。荒れた海の中で、安全な航路を見つけることが大事な要素だった。以後、三三ノット(約六一キロ)の高速スピードで進んだ」。この点についてマッカーサーは、「海岸線に大きい焚き火が点々と現れ」、日本軍は「魚雷艇のエンジン音を聞きつけたらしいが、PTボートの爆音は爆撃機の飛行音とまぎらわしいから、敵は明らかに勘違いしていたらしい」とやや異なった感想を述べている。ともかく、予定していた菱形の艇隊は崩れ、お互いに艇を見失った。つまりバラバラとなったわけである。

マッカーサーのその後の描写はもっと切迫したものとなっている。「数時間は事もなく過ぎた。うねりが高まり、海が荒れてきた。激しい波が、小さい舟艇の薄っぺらな船体をたたき、視界はだんだん悪くなった。日本海軍の封鎖艦隊に近づくにつれて、私たちの緊張は次第に高まってきた。突然、眼前に艦隊の姿が現れた。ゆっくと流れる不思議なほど穏やかな雲のかたまりを背景に、巡洋艦の群れが不気味な輪郭をみせている。私たちは

息をのんで、私たちの正体をばらそうと最初の砲弾が飛んでくるのを待ち受けた。一〇秒、二〇秒。まる一分経った。しかし砲声はとどろかない。海が荒く、私たちの乗艇はあまりにも小さいので、敵は気づかぬらしい。パルクリーは大急ぎでコースを変えて、敵艦の西を北に向かい、闇にまぎれて通り抜けた。同じような事態が一晩中つづいて起こったが、私たちの幸運は変わらなかった<sup>(23)</sup>。

ではほかの艇はどうであったのか。三番手の第三五号艇に乗船していたディラーは、「機雷原を通り過ぎて何もない水面に出た。……私はケンタッキー・ダービーを思い出した。『さあ、出発だ』、勝つか負けるか、引き分けか、あとは自分たちのやり方でやるだけだ。ついにシナ海に出た。するとガソリンの問題が起こった。燃料ターが詰まってガソリンがうまく流れず、(スピードが落ちて) われわれは他艇から離れてしまった。ダイヤモンドの隊形で進む予定だったが、バラバラになった」と乗艇に早くも故障が生じたことを指摘する。第三五号艇に同乗していたロジャーズも、「われわれは三隻目の魚雷艇に乗って、コレヒドールからバターの狭い入り口を横断した。四隻目は早くもどこかに行ってしまった。暗くなり始めたとき、エンジンを全開にしてマニラ湾を通過した。私は船尾のデッキに座り、一つの隊列を組んで進むほかの魚雷艇を見つめていた。最初の夜は、艇の波しぶきを受けて私はびしょ濡れになったものの、比較的スムーズだった。ところが翌日早朝には四艇がバラバラになっており、わが艇は予定していた集合場所から五〇マイル(約八〇キロ)も離れていることが判明した。そこで午前一一時頃まで航行し、結局小さな島の沖に碇を下ろした」と、自分の乗っていた艇が他艇からはぐれてしまった状況を明かしている<sup>(24)</sup>。

四番手の第三二号艇に乗っていたケーシーは、次のように混乱ぶりを語っている。「われわれの艇が最後尾だった。……夜中、艇内を真っ暗にして進んだ。というのは日本軍が海域をすべてコントロールしていたからだ。ところがわが艇はモーターの故障を起こし、夜中にそれを修理せざるをえなかった。他艇から大きく引き離さ

れたため、修理後、最高スピードで再び走り始めた。またモーターが故障したが、結局直って前進した<sup>(25)</sup>。

以上のように、初日の深夜には早くも四艇の隊形が崩れ、各艇が独自に最初のランデブー場所のタガヤン島を  
目指すこととなったわけである。

その後のマッカーサー艇であるが、ハフは、「アポ諸島を過ぎたのち、エンジンのマグネットがぬれ、それを乾かすために艇は止まらざるを得なくなった。同様のトラブルは他の艇でも起こっており、暗くなると連絡が取れなくなった。東方の光がわずかに見え始めるまで、私には多くの時間が経過したように思われたが、太陽が上  
がると陰鬱な気分になった。目標のまだ半分も達成していなかった。しかもわれわれが目指す島(タガヤン島)  
は午前七時になっても見えなかった。周りに味方の艇も見えなかった。幸運にも敵の艦艇も航空機も現れな  
かった……」と焦慮の念に駆られていたことを自白する。

マッカーサーは、そのときの心労を次のように表現豊かに描写している。「波はますます荒くなり、私たちの小さい、古びた、まっくらな乗艇は大揺れに揺れた。飛び散るしぶきはまるで猟銃の散弾のような激しさで、私たちの皮膚にたたきつけられた。私たちは波間に落ち込んで、また山のような水の斜面をよじ登り、そしてまた反対側に落ち込んだ。魚雷艇は玩具のように翻弄され、一瞬空中に浮いて、いまにも横倒しに向きを変えそう  
になったかと思うと、また動きはじめて前方へ突進した。私はあとでそのときの経験を、ちょうどコンクリートのミキサの中に入っているような具合だと評したものである。四隻の舟艇は隊形を保つことはもはや不可能となり、午前三時半ころついに隊形がくずれた。バルクリーは数時間、他の舟艇を集めようとつとめたが、だめだった。こうなつては集合地点になつて無人のキョヨ(クアヨ)島まで、各自が単独でたどりつくより仕方がない」状況となつた<sup>(26)</sup>。

ではマッカーサーの家族はどのような状況であつたのか。ハフによれば、「第四一号艇はコルクのように揺れ

たが、ジーンは船底に行くことを拒んだ。彼女は船酔いもせずに長くデッキにいた。將軍とジーンはコックピットの床に私が敷いたマットレスの上に座っていた。他の者は込み合った艇の上の隙間に座ったり横になったりした。艇が揺れ始めるとアチューとアーサーがひどい船酔いになったので、ジーンは二人を船底へ移動させた。そこには二つの小部屋があった。当時の状況について彼女は、「艇の騒音がひどかった。私は將軍と一緒にデッキにいました。私は決して將軍の側から離れなかった。私たちは艇の先(バウ)に座っていました。將軍はデッキの一方の椅子に、私はもう一方の椅子に座り、お互い向き合うように座ったことを覚えています。誰とも話さなかつた。日本軍に見つからないように完全に沈黙しなければならなかつた。一晩中そうした。私は船上で何かを口にした覚えがない。まったく食事をしなかつた」とそこでの過酷な状態を伝えている。なおジーンの服装は「皆が履いている小さなストローシユーズ、ベッドルームの小さなスリッパ、非常に薄いローブとドレス」という簡素な物で、ドレスの上に結婚したときに手に入れた小さなコートを羽織っているにすぎなかつた。<sup>(27)</sup>

一方、エーキンやケーシーが乗船していた四番手の第三二号艇は、故障に苦しみながらも、集合目的地を目指して進んでいた。ケーシーによれば、翌二日の明け方、「われわれは小さな島に接近しつつあつた。艇長が双眼鏡で周囲を見渡すと、一隻の船がわれわれの方に近づいてくるのがわかつた。彼は『日本の駆逐艦がわれわれの前方に来ている』と叫び、『戦闘態勢を取りますか』と聞いた。まだその船からかなり離れていた。われわれは『よし、やろう』といった。すると艇長はナイフを取り出し、デッキにあつたガソリンのドラム缶のとも綱を切つた。この補助燃料が目的地に着くためには必要だつたが、重量オーバーのためにこれらのドラム缶を捨てたのである。クルーが機関銃を構え、魚雷を発射する準備を整えた。艇長は接近してくるその船を望遠鏡で観察し続けていたが、突然、『あれは日本の駆逐艦ではない、わが方の艇だ』と叫んだ。それはマッカーサー將軍と家族が乗船している魚雷艇だつた。われわれは彼らを海の底へと沈めるところだつた」。まさに間一髪であつた。



マッカーサーの強運をうかがわせるエピソードである。

マッカーサー艇は注意深く第三二号艇が放棄したドラム缶を素早く避けて、同艇に横着けた。マッカーサーとケーシーは短時間話し合い、結局ケーシーがマッカーサーの第四一号艇に移り、そのまま予定されていた集合場所へと向かうこととなった。ようやくタガヤン島に到着すると、すでに二番手のマーシャルらが乗る第三四号艇が到着しており、計三艇が集合できた。しかしウイロビーやデイラーらが乗る三番手の第三五号艇だけが行方不明となっていることが判明した。そこで三艇は、敵機の目を逃れるためカムフラージュをして、第三五号を待つとともに、潜水艦の到着を待つことにした。潜水艦は、万一の場合、マッカーサーとその家族をオーストラリアへ送るために、この島に到着する予定であった。<sup>(28)</sup>

## 5 タガヤン島からミンダナオ島へ

二月二日(木曜日)のタガヤン島における停泊状況について、ハフは次のように述べている。バルクレイは誰も島の浜辺に上陸することを許さなかった。敵の航空機に発見されるのを恐れたためである。艇のデッキか船底にいるほかなかった。四歳のアーサーはデッキの上で「東条英機將軍」として知られたサルの玩具で遊んでいた。われわれは朝食にホットケーキを食べた。その味は素晴らしかった。しかし、しばらくデッキに座っていると、マッカーサーが気を病み始めた。ほかの艇との交信がうまくいっていないことを心配していた。このままこの島で待ち続けることになれば、逃避日程に悪影響を与えるかもしれない。一日中までに第二の集合地点の島まで行くことについてどう思うか」とマッカーサーはレイに尋ねた。レイもバルクレイも誰も「敵の軍艦がやって来ない」とは言えなかった。しかもわが第四一号艇はエンジンが不調のため、日本の軍艦を追い越すことはできなかった。かといって、このまま入江に留まっていれば、敵機によって発見される危険性があった。第三五

号艇は薄暗くなるまで待っても姿を現さなかった。ウイロビー、ディラー、その他の乗船者は亡くなったのではないかと恐れが生じた。最終的にマッカーサーはバルクレレーと相談し、出航することを決断した。

マッカーサーとロックウエルは潜水艦への乗り換えについても話し合った。そのときにマッカーサーはケーシーに「潜水艦で行くべきかどうか」と助言を求めたという。ケーシーはマッカーサーが質問をしたことに驚いたというのは、マッカーサーは決定の人物であり、人に対して決して質問をしなかったからであった。ケーシーはこのままPTボートを続けるよう求め、マッカーサーはそれに同意した。そして燃料を放棄していた第三二号艇をタガヤン島に残し、潜水艦の到着まで待たせることにした(その後、同艇の乗組員は遅れて到着した潜水艦でオーストラリアへと運ばれた)。その際ロックウエルが「海がもつと静かになる」と言ったのに対して、バルクレレーは逆のことを言った。結局バルクレレーが正しかった。こうして午後遅く(マンチェスターの著作は「午後二時半」と記述しているが、他の証言とは異なる)、まだ日が暮れない中を第三四号艇と第四一号艇の二艇は再び出発した。第三二号に乗っていたエーキン、ケーシー、マーカット、ジョージ、シャアの五名はこの二艇に分乗した。今度はロックウエルやマーシャルの乗る第三四号艇が先頭に立ち、マッカーサーらの第四一号艇が後を追う形となった。バルクレレーはマッカーサーの身の安全を考慮して後発としたのである。大波が艇を洗い、乗員は全員ずぶ濡れとなった。しかしジーンとマッカーサーはデッキにずっと座っていた。ジーンは「一晩中座っていました。私はまったく服を脱がなかった。歯を磨いた記憶もない。何をしたのかも記憶がない。私たちは日本の巡洋艦がフィリピン南方の島々を砲撃しているのを目撃しました。それを見ることができました。また私はデッキに横になって星を見ていました。私たちは砲撃されるために行くのだと考えていました」とその時の心境を明かしている<sup>(29)</sup>。

出航後まもなく、最悪の事態が生じた。日本の軍艦と遭遇したのである。マッカーサーはその時の緊迫した状況を次のように叙述している。「私はミンダナオ海を南進してミンダナオ島北岸のカガヤンに向かうようにと命

令した。……夜はすみわたり、海は大荒れに荒れた。……突然、私たちの行く手に立ちふさがるように、黒い、威嚇的な敵戦艦が一隻現れた。近すぎて、よけたり、逃げたりするひまはもうなかった。私たちはエンジンを止めて静止し、戦闘行動を整えた。秒針がカチカチとゆっくり進み、やがて何分かつたが、敵艦は一向に信号のフラッシュを出さず、私たちの前方を横切つてゆっくり西へ動いて行つた。戦艦はもし私たちを見つけていたのなら、フィリピンの漁船隊の一部と思つたに違いない。私たちの行く手は、ついに解放された」。

しかしハフの証言はマッカーサーとは異なる。「バルクレーはわれわれの進行を邪魔するように日本の巡洋艦が進んで来るのを発見した。それはまだ日中だったが、敵はまだわれわれを発見していない可能性があった。バルクレーは針路を変え、フルスピードにした。彼らはわれわれを見ていなかった。しかし太陽が沈むまでにはまだ一五分か二〇分あつた。われわれはイライラした。將軍は横になっており、何も言わなかつた。乗組員の話聞いていただろうし、どういふ状況かはわかつていただろう」。

ケーシーの見解は、「夜暗くなるのを待たずに午後に出航した。暗くなる直前、前方に日本の巡洋艦を発見した。今度は本物の巡洋艦だった。われわれは南へ向かつていたが、敵艦は東へと向かつていた。そこでわれわれは発見されないことを祈つて、西へと方向を転じた。恐らく彼らはわれわれの姿を見ていたろうが、二隻のフィリピンの漁船だと思つたのだろう。ともかく巡洋艦はそのまま進み、その艦長はマッカーサー將軍とその幕僚を捕まえるという素晴らしい機会を失つた」となっている。バルクレーの証言では、日本の巡洋艦がほぼ六マイル(約九・六キロ)前方を「北」へと進んでおり、そこで直ちに「南」へと方向を変えたとする。<sup>(30)</sup>

以上のようにコメントはまったく異なる。マッカーサーは敵艦が「戦艦」であつたと指摘するが、他の者は「巡洋艦」であつたと指摘する。マッカーサーは自艇が停止して戦闘態勢を取つたと主張しているが、他の者は進路を西へ取つたのか南へと転じたのかなどで違うものの、直ちに逃走したと述べている。彼らの見解の相違は、

艇内が当時いかに切羽詰まった状態に陥っていたかを如実に物語っているものの、マッカーサーが多分に事態を誇張している観は否めない。いずれにせよ、一行が最大の危機を脱したことは、度重なるマッカーサーの運の強さを実証していよう。

なおバルクレーは、このときのジーンの毅然たる態度を、「將軍と一緒にいたマッカーサー夫人はコックピットの下の方から起き上がってきて、巡洋艦の方を一瞥したが、まったく顔に混乱した様子など見せず、つまり恐怖の色をまったく見せず、また下の方へ降りて行った。……その時私は、もし日本軍がわれわれを見つけたら、全員死亡するだろうと感じていたので、彼女は本当に勇気があった。マッカーサー夫人は私がこれまで会った人の中でもっとも勇敢な女性の一人だ」と絶賛している。ジーンは、恐らくその緊張が解けたのちのことであろうが、次のようエピソードを漏らしている。「私たちは木曜日の夜中をずっと進みました。將軍がマットレスの上に横になり、私もそうして寝ていた。アチューとアーサーはまだ船酔いで下にいた。……誰かが私を起こした。一人の下士官だった。小さなサーモスのボトルに熱いチョコレートかココアを入れてくれた。ところが海が荒れていたのは私はそれをひっくり返してしまった。それが私の頭の上にごぼれて、マットレスの上にもごぼれてしまった。そこで私は懐中電灯のスイッチを入れた。するとバルクレーから大声で怒鳴りつけられた。彼は私を怒鳴った。私はもうドレスがびしょびしょになった<sup>(31)</sup>」。ジーンはわずかに二着のドレスしか持参していなかった。

同様に、ハフもマッカーサーについての次のようなエピソードを語っている。「夜、眠っていると『シド』という將軍の声で起こされた。『私は眠れない、何か話したい』と言う。ジーンは眠っているようだった。それは私の人生の中でもっとも不思議な時間であった。彼がフィリピンでの敗北について考え込んでいたことがわかった。彼はそれを分析し、整理しなかったのだ。彼は一九四六年までにフィリピンを防衛できる準備計画について話した。彼はワシントンとの違いも思い出していた。彼が考えることを止めたのは午前二時だった。それから

彼はつけ加えた。『オーストラリアに着いたら、最初に君とデイラーを完全な大佐にすることだ。お休み』と。將軍がオーストラリアのオフィスに就いた最初の日、私は大佐になった<sup>(32)</sup>。最大の危機を脱し、最終目的地が一段と近づいたために、マッカーサーは興奮して眠れなかったのかもしれない。

三月一三日金曜日の夜明け前、二艇はスル海を東へと舵を切り、ミンダナオ海(ボホール海)へと入った。太陽が昇った時点でも、予定より遅れ気味であった。日中に何としてもミンダナオ島北岸に到着する必要があった。午前六時三〇分にミンダナオ島のデルモンテ・パイナップル農場の近くに接近した。その直後に第三四号艇の見張り役がカガヤン岬の灯台の光を認めた。港が見え始めると、乗員は日本の艦艇がいまいかと必死に目を凝らした。誰もが敵艦を警戒したが、日本の国旗を掲げる船はなかった。午前七時、三五時間ずつと舵を握ってきたバルクレーの第四一号艇が第四三号艇に先頭を譲られ、カガヤン港の水路へ入り、波止場に着岸した。第三四号艇も続いて着岸した。こうして一行二一名のうち一七名が五六〇マイル(約八九六キロ)もの長い旅程を無事に終了した。ついにバルクレーと第四一号艇の乗組員は、敵陣の中、マッカーサーを脱出させるとの大きな目標を成し遂げたのである。

波止場には南部地区司令官のシャープ准将が歩兵の一隊とともに待機していた。マッカーサーは二隻のPTボートに乗っていた将校と下士官兵を集めて、「真に海軍にふさわしい航行ぶりだった。私は大きい喜びと名誉を感じながら、両艇の乗組員に対し、きわめて不利な状況の中で勇氣と不屈の精神を示したことにより銀星章を与える」と感慨を込めて訓示した。バルクレーはマッカーサーから、「君は私を死の淵から救い出してくれた。私はそれを忘れない」と褒め言葉をかけられた。そしてマッカーサーは、「私は戻る(アイ・シャル・リターン)」と述べたという。のちに彼の代名詞ともなる有名な言葉が、すでにここに発せられていたわけである。バルクレーは「それは短く、気持ち良い言葉だった」と感想を漏らしている。さらにバルクレーはマッカーサーに手を握り

締められて、「君はシャープ將軍から、日本帝国との防衛戦のために、ミンダナオ北岸で戦えと命令されるだろう」と小声で言われた。これはバルクレーには大変な名譽と感じられた。わずかに四隻のPTボート部隊ではあったが、彼はその言葉を自分を「太平洋の司令官」に任命してくれたと同然と受け止めたからである。<sup>33</sup>

ではウイロビー、デイラー、ウイルソン、ロジャーズ四名の乗る行方不明の第三五号艇はどうしていたのか。二日目、ロジャーズは昼に眠りから覚めたが、「日中にはそこは日本軍が監視している危険水域であるらしかつた。……午後三時頃、二本マストの帆船がわれわれの舳先を指してやって来るのが目に入った。こちらの望遠鏡は壊れており、乗組員は日本の国旗を掲げているではないかと必死になった。……銃を構えるなど準備したが、結局それは漁船であることが判明した。地元の間人が両手を上げ、小さな米比の国旗を振った。……午後六時頃、わが艇は待ち合わせ場所へと出発した。……船旅を再開すると、その夜、(衣服を)乾燥させるために下の特別室に入った。しかし荒い海を航行していたので、波がデッキから室内まで入ってきた。そして艇が上下に揺れ、私は横転してずぶ濡れになった。翌朝(二三日)、部屋からデッキへ行つた。五時間ほど島の沿岸に沿ってゆっくりと航行し、昼頃(午前一時)最終目的地らしい港(カガヤン)へ到着した。敵機に見つからないかと注意したが、何も現れず、全員が幸せに旅を終えることができた。<sup>34</sup>

こうして二二名全員が揃ってミンダナオ島への脱出に成功したのである。

## 6 ミンダナオ島からオーストラリアへ

マッカーサーが決死の逃避行を続けている間、ワシントンとオーストラリアはその成り行きを注視していた。すでに二月二六日の時点で、マーシャル参謀総長はメルボルの在豪米陸軍司令官ブレット少将に対し、マッカーサー一行のミンダナオ島到着を「恐らく三月一五日前後」になる旨を連絡しており、同島への爆撃機一機の派

遣を依頼していた。二日後、ブレットはこの最高機密を了解したとマーシャルに返信した。そこでマーシャルは三月六日、「オーストラリアでは貴官の早期の到着を待っている」とマッカーサーに伝達した。そしてマッカーサーの出発前日の一〇日、マーシャルはルーズベルト大統領の承認を得た上で、次のような重要な指令をブレットに発した。①マッカーサー將軍は三月一七日にオーストラリアに到着すると予想されているが、その時までこの高度の機密を守秘すべきこと、②將軍のオーストラリア到着後一時間以内に、貴官は豪首相ないし政府高官を訪ね、將軍の訪問が米大統領の指示によるものであり、將軍が現地の米陸軍司令官への就任を受諾している旨を伝えること、③豪政府が將軍を南西太平洋地域の最高司令官に指名するよう提案し、その指名がロンドンとワシントンで同時に提案できるよう進言すること、④貴官は將軍の到着次第、早急に在豪米陸軍の指揮権を移転するための調整を行い、貴官が將軍の下で空軍部隊の次席指揮官となる旨を伝えることである。これに対してブレットは、一二日、「すべての調整が完了した」とワシントンに報告した。<sup>(35)</sup>

しかしマッカーサー一行がミンダナオ島に到着してみると、その準備はまだ完了していないことが判明した。シャープはマッカーサーに対して、一行を迎えるためにオーストラリアから爆撃機四機が発したものの、二機は到着せず、一機は湾内に墜落し、残る一機だけが到着したが、それは非常に古くて最悪の状態であったため、一行がカガヤン島に到着する以前にオーストラリアへ引き返させたと報告した。マッカーサーは激怒した。一三日夜一時二五分、彼はマーシャルに対して一行のミンダナオ到着を報告すると同時に、ブレットを批判する以下のような電文を送った。<sup>(36)</sup>

「私は海軍の高速魚雷艇によってミンダナオ島のデルモンテまでの危険な旅行を成功裏に行った。この実施に際して、私は潜水艦を待てなかった。到着時、ブレットは四機の古いB17爆撃機を送ってきたが、そのうちの一機だけが到着し、しかもそれは過度の操業不足のために(われわれ)乗組員を輸送できないことが判明した。三機の到着失敗は敵の行動

によるものではない。残りの一機は私の到着前に引き返した。私はブレットに伝えていたし、貴殿にもブレットに対してわれわれ一行の輸送を伝達するよう依頼していた。そして彼にはしかるべき航空機の派遣を命じていた。……私は妻と子供と一四名の将校、ロックウェル提督とその参謀長を伴っている。米国ないしハワイでの最高の三機ときわめて経費豊富なパイロットを用意すべきである。装備の不十分な航空機でこのような重要な飛行を試みることは、一行全員を死へ追いやることになるし、そのような責任を私は負うことができない。私は頻繁にコレヒドールと交信し、通常の態度で基地からの回答を要請した。私はフィリピン全軍の指揮を行使し続けている。私のデルモンテ（ミンダナオ島の町）での存在は完全な秘密とすべきであり、あらゆる手段によって私が依然ルソンにいると（日本軍に）信じ込ませる措置が取られるべきである。貴殿の命令に従って、私はブレットに対して自己の使命を伝えなかった。彼はいかに自分がこの重要性に無知であったかをいざれ知るだろう。

このようにマッカーサーはブレットを“無知”と罵倒したのである。ケーシーは、このときマッカーサーが非常に怒っていたことと、ブレットの対応の遅れがその後のマッカーサーのオーストラリア行きに影響を及ぼしたことを認めた上で、「マッカーサーはブレットを平時の行政者であって、戦時の行政者には向かないと感じた」こと、以降の両者の関係が険悪になったことを証言する。もちろんマーシャルは、一行のミンダナオ到着を喜ぶ半面、オーストラリアからの爆撃機が未到着であるとの報告に驚いたのであろう。翌一四日、マーシャルはブレットに対して、直ちにミンダナオ島へ最高の B 17 爆撃機三機を発進させること、この任務はいかなる飛行計画よりも優先させることを命じた<sup>(37)</sup>。しかしブレットはオーストラリア側と極秘に調整することに苦慮し、時間を要した。では一行はミンダナオでどのような状況にあったのか。一三日にカガヤンに到着した後、マッカーサーらはシヤープの案内で五マイル（約八キロ）離れたデルモンテまで進み、そのクラブハウスで朝食を取った。ハフは新鮮なパイナップルに味をしめた。パイナップルはマニラ以来の最初のフルーツであり、彼は三個も食べた。P



Tボート上でほとんど何も口にできなかったジーンも、このときのパイナップルの味を「生涯忘れられない」と語っている。ただし、一行が待機した場所は決して安全ではなかった。「われわれは日本の飛行場からわずか一時間半の距離のところに行ったので、もし将軍がそこにいるというニュースが漏れれば、何が起こるかを理解していた。日本側は一七名の一行を殺すことで大きな勝利をものにしたかったろう。連合国軍将校の中の最高の人物を多く含んでいたのだから」とロジャーズは回想している。実際、彼らは日本軍機が頭上を飛ぶのを何度も目撃していた。

ジーンとアーサーとアチューが小さな家で休んでいると、フィリピン人の軍曹がシャープの命令によって、三名を汚い泥の地下トンネルへと案内した。三名はそこを這って進まなければならなかった。緊急避難場所であったが、ジーンにとっては二度と行きたくない場所であった。そこでジーンはシャープにその旨を告げて、万一の場合でも「家の中にいます」と伝えた。シャープは了解した。そこへ突然フィリピン女性が現れ、ジーンに面会を求めた。彼女は二五マイル(約四〇キロ)もの遠方から徒歩でやって来て、バターン半島で戦っている息子の消息を聞きたがった。もちろんジーンは何も話さなかった。しかし現地人が忽然と現れたということは、秘密であるはずのマッカーサーの存在が広く知れ渡っている可能性を意味した。シャープはスパイの嫌疑で、フィリピン女性を一行の出発まで軟禁したが、彼女に何ら問題はなかった。それはジーンがのちにウイロビーから聞いた話であった。<sup>(38)</sup>

さて三日を経た一六日の月曜日、マッカーサーにメッセージが届き、三機の爆撃機が本来のダーウィン飛行場からではなく、バッチェラー飛行場から来ることが知らされた。ジーンはマッカーサーの声を聞いた。「連中(パイロットら)はデルモンテの滑走路を見たことがないそうだ」と。実際、指揮官のカーマイケル大佐の搭乗する爆撃機はその短い滑走路への着陸に失敗し、引き返さざるをえなかった。危険な着陸は勇気を必要とした。

そこで他の二機が着陸する際、車のライトで滑走路を照らし出すなど補助するほかなかった。ようやく二機が午後八時に着陸に成功した。そこで一行は深夜に慌しく出発することになった。

そのときの状況についてジーンは、「アーサーはソファアに伸びていた。眠っていた。まったく突然でした。……私たちは車に乗り、滑走路へ行った。たった二機だから、多くの物を捨てなければならないと言われた。私是一个の小さなスーツケースのみを持ち、その中にナイトガウンが入っていた。それ以外何もなかった。こうして搭乗し、プロペラ機は出発した。そのときに若い少尉が乗り口の傍に立っていたのを覚えている。将軍は少尉の肩に手をかけて何かを言った。すると彼は『マッカーサー将軍、私は最善を尽くしてあなたを送り届けます』と言った。それで私たちは搭乗したが、バランスを取らねばならなかった。……将軍はパイロットのすぐ後ろの席に座った。なぜかという、そのパイロットが以前乗った飛行機は衝突したが、彼自身は大丈夫だったからだ。……私が覚えているのは、深夜、大きな月の光の夜に飛び立ったことだ。アーサーとアチューと私はマットレスの上に横になった。椅子はひとつしかなく、そこは将軍の席だった」と語っている<sup>(39)</sup>。

離陸後、オーストラリアへと向かう五時間の飛行について、マッカーサーがまたも表現力豊かに叙述している。「私たちは敵機が哨戒している敵の占領地域の上空を飛ぶわけで、闇で見つからないことを頼りにするほかない。しかしチモール島上空でついに発見され、敵機が追跡してきた。私たちは、敵が私たちの着陸を予想していたダールウィン上空でコースを変え、敵機がちょうどダーウィンを攻撃しはじめた時に六四キロ南のバチュラーフィールドに着陸した。……私は着陸した時(翌一七日の午前九時)、デッキ・サザラントに『きわどいところだったね。しかし、戦争とはこういうものなのだ。勝つか負けるか、生きるか死ぬかの違いはほんの紙一重なのだ』と語ったものである」。ジーンは、バチュラー飛行場に着いたときの感想を述べている。「そこには格納庫が見えず、テントが点在するだけでした。私たちが飛行機から降りると、乗組員は勲章を与えられました。将軍が一人

ひとり何かを言った。私は將軍に『(パイロットのところへ)行かせて』と言って、若い少尉に挨拶した。彼は出発前よりも一〇歳以上もふけて見えた。私は彼にお礼を言った。彼らは全員直ちに昇進した<sup>(40)</sup>。

しかしバチュラー飛行場も安全ではなかった。二五機のゼロ戦が空襲してくるとの情報が入ったのである。そこで一行は急いでブレットが用意したDC3型機に乗り込み、一〇〇〇マイル(二六〇〇キロ)離れたオーストラリア中央部のアリス・スプリングへと飛んだ。到着地は大陸奥地の殺伐とした原野の中にあり、砂塵が舞う町はアメリカの西部劇映画に出てくる情景を思い起こさせるものであった。ジーンはすでに飛行機の激しい揺れに耐え切れなくなっており、そこからアデレードまでは決して飛行機で行きたくない、列車で行くと言い張った。しかし週一本の列車は前日に出てしまっていた。同地までの飛行機を手配していたブレットは、今度は特別列車を手配せざるをえなくなった。それまで一行は「開拓時代を思わせるひどいホテル」に宿泊した。日中も夜も蠅の大量に悩まされた。マッカーサーのカーキ色の制服と大きな帽子は水に濡れて塩が付いていた。

そこへ当時ニュージールランド大使を務めていたパトリック・ハーレー(Patrick J. Hurley)准将がわざわざ個人の飛行機で飛来した。一行をメルボルンまで送るためであった。しかしジーンは決して妥協しなかった。そのため、マッカーサー一家とサザラランドとハフとモアハウスを残して、他の者はハーレーの飛行機でメルボルンを目指した。一方、マッカーサーらは一八日昼、小さな珍しい機関車が引く二両の木造車両に乗車し、砂漠を横断して一〇〇〇マイル南方のアデレードを目指した。ハフはそのときの様子について、「オーストラリアの夏の終わり頃だった。われわれは座つて外を眺める以外になかった。しかしこの列車の旅はわれわれに休息を与え、われわれをリラックスさせた。……ジーンは『この列車の旅が(將軍にとって)最善なことがわかっていて。パールハーバー以来、初めて本当に熟睡できた』と穏やかに言った」と述べている<sup>(41)</sup>。

この間、マッカーサーのオーストラリア到着を華々しいセレモニーとするためのお膳立てが準備されつつあつ

た。そのように仕向けたのはむしろワシントン側であった。決してマッカーサー一行のコレヒドル脱出を「負け犬の逃亡」としてはならなかった。そうすることは枢軸国側の喧伝をいっそう増長させることを意味したからである。それゆえ、あくまでマッカーサーを堂々たる凱旋將軍のように飾り立てる演出が必要であり、それが全軍の士気を奮い立たせ、ひいてはアメリカ世論を沸騰させるためにも欠かせなかった。無論、自尊心の強いマッカーサーにとってこのような舞台装置は願ってもないことであった。

マッカーサーが日本軍機の攻撃をうまく切り抜けてバチューラー飛行場に到着した一七日当日、米陸軍省は次のような声明を発表した。「本日マッカーサー將軍は飛行機でオーストラリアに到着した。彼は夫人、息子、サザーランド參謀長、ジョージ空軍部長、その他の幕僚を伴っている。彼はオーストラリア政府の要請によって、フイリピンを含めたこの地域の最高司令官となる」。ルーズベルトも同日、海軍関係者に対し、マッカーサーと「わずかな」幕僚がオーストラリアに到着したことを語り、オーストラリア、ニューギランド両首相がブレックトに対して、この地域の最高司令官にアメリカ人が就任するよう提案しており、自分はカーチス氏を就任させるよう指示していたが、同氏は熱心にマッカーサーの最高司令官就任を求めている、彼ら（オーストラリア、ニューギランド両首相を指すと思われる）はリークを避けるために報道機関への共同発表を早急に行うよう求めている、枢軸国側がマッカーサーのフイリピン脱出を宣伝材料として攻撃しようとする出鼻をくじくためにも、この発表は非常に重要である、そこで私は午前一〇時三〇分にマッカーサーの最高司令官任命を新聞に報道させることを承認した、と伝えた。

つまり、マッカーサーを最高司令官に任命することは、枢軸国側の非難中傷を相殺するためであったのである。そのような政治的粉飾を行うことをマーシャルはもつと率直に指示していた。すなわち、同じく一七日、マッカーサーの最高司令官就任は豪首相の声明と「オーストラリア政府の要請」に応じたものであり、マッカーサーの

フィリピン脱出を非難しようとする枢軸国側の宣伝を回避するためであり、マッカーサー一行に関する声明では、彼の司令部が「引き揚げた」のではなく、むしろ「移転した」ことを強調すべきであると、マーシャルは指示した。<sup>(42)</sup>

以上のようにルーズベルトもマーシャルも、マッカーサーのオーストラリア到着を軍事的見地よりも政治的見地から捉えており、マスコミ対策を重視していた。片やマッカーサーも、参謀総長に就任する以前からマスコミ報道の表裏を知り尽くしており、このような配慮をよく理解し予想していた。七〇時間に及ぶ三日間の旅程を経て、二〇日、マッカーサーらはアデレード駅に到着すると、駅には多くの群集が待ち構えていた。マッカーサーは記者団から談話を求められて、「私は米大統領から、日本の戦線を突破してコレヒドールからオーストラリアへ行けと命令された。その目的は……日本に対する米国の攻勢を準備すること、その最大の目標はフィリピンの救援にある。私はやつて来たが、また私は帰る」と述べた。マッカーサー自身は「何気なく述べた談話だった」とコメントしているが、マスコミ対策に長けた人物がそうであったのは信じ難い。ともかく、このとき語った「私は帰る(アイ・シャル・リターン)」という文句は、マッカーサーの言うとおり、「魔術のような力」をもって独り歩きし始めたのである。

マッカーサーらはアデレード駅から豪華な専用の急行列車に乗り換え、翌二二日朝九時五七分、メルボルのスペインサー駅に到着した。マッカーサーは満足であった。「メルボルンで私が受けた歓迎は耳を聳するばかりだった。何千人という群集が歓声をあげながら、鉄道の駅を埋め、街路にあふれて、私を迎えてくれた」<sup>(43)</sup>からである。こうしてマッカーサーとバターンボーイズの一日間、約三〇〇〇マイル(約四八〇〇キロ)に及ぶコレヒドール島からの「逃避行」、いや「移動」は終焉したのである。

- (1) 前掲書『ダグラス・マッカーサー(上)』二九〇～二九一頁。
- (2) 〈SEC〉 From Ft. Mills PI to Gen George C. Marshall, MacArthur, Feb. 24, 1942; 〈SEC〉 From Ft Mills PI to Gen George C. Marshall, MacArthur, Feb. 26, 1942.
- (3) *Ibid.* My Fifteen Years With General MacArthur: By his long-time aide Col. Sid Huff, USA with Joe Alex Morris, p.51.
- (4) *Ibid.* Admiral Charles Bulkeley.
- (5) *Ibid.* Admiral Charles Bulkeley, Papers of Jean MacArthur, Oral History, Transcript #6. GR13.
- (6) 前掲書『マッカーサー大戦回顧録(上)』三三頁。
- (7) *Ibid.* Papers of Paul P. Rogers.
- (8) *Ibid.* Engineer Memoirs Major General Hugh J. Casey, US Army.
- (9) *Ibid.* My Fifteen Years With General MacArthur, p.51; *ibid.* General Diller.
- (10) 前掲書『マッカーサー大戦回顧録(上)』三三～三四頁。 *ibid.* My Fifteen Years With General MacArthur, p.54.
- (11) Memo for the President, Marshall, 2/24/42; *ibid.* 〈SEC〉 From Ft Mills PI to Gen George C. Marshall, MacArthur, Feb. 24, 1942; 〈SEC〉 Secret radiogram to Gen MacArthur, Marshall, Dwight D. Eisenhower, Brig. Gen, Feb. 25, 1942; 〈SEC〉 From Ft. Mills PI to Gen George C. Marshall, MacArthur, Feb. 26; 1942 〈SEC〉 Memo for the Adjutant Gen., Subj: Far Eastern Situation, Marshall, Dwight D. Eisenhower, Feb. 26, 1942.
- (12) *Ibid.* My Fifteen Years With General MacArthur, pp.52-54.
- (13) *Ibid.* Admiral Charles Bulkeley.
- (14) 〈SEC, PRIO FOR ENCONDING〉 MacArthur to Commanding Gen. US Forces, Melbourne, Mar. 1, 1942; *ibid.* My Fifteen Years With General MacArthur, p.53.
- (15) 〈SEC〉 The Commandant, Sixteenth Naval District to The Commander, Motor Boat Squadron Three, Sub: Operation order, Mar. 10, 1942.
- (16) *Ibid.* Papers of Paul P. Rogers; *ibid.* Admiral Charles Bulkeley.

- (17) *Ibid.* General Diller.
- (18) 前掲書『マッカーサー大戦回顧録(上)』七三頁。
- (19) *Ibid.* Papers of Jean MacArthur, Oral History, Transcript #6; *ibid.* My Fifteen Years With General MacArthur, p.54.
- (20) *Ibid.* Papers of Jean MacArthur, Oral History, Transcript #6.
- (21) *Ibid.* My Fifteen Years With General MacArthur, p.55.
- (22) 前掲書『マッカーサー大戦回顧録(上)』七五～七七頁。
- (23) *Ibid.* Admiral Charles Bulkeley, 前掲書『マッカーサー大戦回顧録(上)』七九頁。
- (24) *Ibid.* General Diller; *ibid.* Papers of Paul P. Rogers.
- (25) *Ibid.* Engineer Memoirs Major General Hugh J. Casey, US Army.
- (26) *Ibid.* My Fifteen Years With General MacArthur, p.57. 前掲書『マッカーサー大戦回顧録(上)』七九頁。
- (27) *Ibid.* My Fifteen Years With General MacArthur, p.54; *ibid.* Papers of Jean MacArthur, Oral History, Transcript #6.
- (28) *Ibid.* Engineer Memoirs Major General Hugh J. Casey, US Army.
- (29) *Ibid.* My Fifteen Years With General MacArthur, p.60; *ibid.* Engineer Memoirs Major General Hugh J. Casey, US Army; *ibid.* Papers of Jean MacArthur, Oral History, Transcript #6.
- (30) 前掲書『マッカーサー大戦回顧録(上)』八一頁。 *ibid.* My Fifteen Years With General MacArthur, p.62; *ibid.* Engineer Memoirs Major General Hugh J. Casey, US Army; *ibid.* Admiral Charles Bulkeley.
- (31) *Ibid.* Admiral Charles Bulkeley, *ibid.* Papers of Jean MacArthur, Oral History, #6.
- (32) *Ibid.* My Fifteen Years With General MacArthur, p.63.
- (33) 前掲書『マッカーサー大戦回顧録(上)』八二頁。 前掲書『ダグラス・マッカーサー(上)』三〇二頁参照。 *ibid.* Admiral Charles Bulkeley.
- (34) *Ibid.* General Diller; *ibid.* Papers of Paul P. Rogers.

- (35) <SEC> From Melbourne to AGWAR, Brett, Feb. 28, 1942; <SEC> Memo for the Adjutant Gen., Subj: Far Eastern Situation, Marshall, Mar. 6, 1942; <SEC> Memo for the Adjutant Gen., Subj: Far Eastern Situation, Marshall, Dwight D. Eisenhower, Mar. 10, 1942; <SEC> From Australia to Adjutant Gen., Brett, Mar. 12, 1942.
- (36) <SEC> From Ft. Mills PI to Gen. George C. Marshall, MacArthur, Mar. 13, 1942.
- (37) <SEC> Memo for the Adjutant Gen., Subj: Far Eastern Situation, Marshall, Mar. 14, 1942; *ibid.* Engineer Memoirs Major General Hugh J. Casey, US Army, p.183.
- (38) *Ibid.* My Fifteen Years With General MacArthur, p.64; Papers of Jean MacArthur, Oral History, Transcript #7 <This interview took places at the Waldorf Towers Apartment on Tuesday afternoon on August 17, 1984, GR13>.
- (39) *Ibid.* Papers of Jean MacArthur, Oral History, Transcript #6.
- (40) 前掲書『マッカーサー大戦回顧録(上)』八三～八四頁。*ibid.* Papers of Jean MacArthur, Oral History, Transcript #6.
- (41) *Ibid.* My Fifteen Years With General MacArthur, p.72. 前掲書『ダグラス・マッカーサー(上)』三〇九～一一頁参照。
- (42) <SEC CODE>, 3/17/42; <SEC> Memo for the Adjutant Gen., Marshall, Mar. 17, 1942.
- (43) 前掲書『マッカーサー大戦回顧録(上)』八四頁。*ibid.* General Diller.

(7) 第二次バターン攻防戦とバターン「死の行進」

——一九四二年二月初旬から五月上旬まで——

1 第二次バターン攻防戦の前夜

一九四二(昭和一七)年一月九日に開始された第一次バターン攻略戦は、日本側の第六五旅団に大きな犠牲をもたらし、結局二月八日、本間雅晴第一四軍司令官の命令で中止された。明らかに日本軍が米比軍を侮った結果



であった。以後、作戦面について第一四軍司令部、南方軍、大本營の三者間で意見の隔たりが顕著となり、対立が表面化した。

まず第一四軍司令部内は次のような三つの意見に割れた。①改めて十分な準備を整えた上で攻撃を再開する、その間ルソンをはじめフィリピン中南部の残敵を撃破して治安を確保すべきである、②バターンの敵軍を封鎖し、糧食の欠乏によって彼らが屈服するのを待つべきである、③依然バターン攻撃を続行すべきである、という意見のうち、①が多数派を占め、②は前田参謀長ら少数が、③は作戦参謀の中山源夫大佐だけが主張した。これに対して本間司令官は、二月中旬、前田らが主張する②のバターン封鎖案を採決した。フィリピンに関する知識が豊富な前田の提案は、コレヒドール島などマニラ湾口要塞への強襲は困難である上、バターン半島も険峻な地形のため、この攻略を性急に実施するのは難しい、この際、残った兵力での猪突攻撃は避け、米比軍を封鎖し、その戦闘力を少しずつ消耗へと導いて敵の降伏を待とうとの合理的方策であった。この提案の根底には米比軍の糧食の貯蔵は半年もたないであろうとの判断があった。

これに対して南方軍の考え方は、戦力の少なくなった第一四軍のバターン処理に多少遅れが出てもやむをえないが、とにかく攻略の意思を緩めずに攻撃を続行すべきであり、敵の主力を温存させたまま、他方面の残敵を撃破するといった生温いことでは作戦の完遂にはならない、というものであった。作戦主任参謀の荒尾中佐はマニラへと出向き、中山参謀の③案を支持して、これを実行するよう説得を試みた。他方、大本營の考え方は、概して第一四軍の①案を支持するものであった。以上のように、第一四軍が②の封鎖案、南方軍が③の続行案、大本營が①の再準備案を支持して、一本化できなかつた。

そこで第一四軍の前田参謀長がバターン封鎖監視案を南方軍に説明して諒解を得るため、サイゴンに出頭しようとしていた矢先の二月二〇日、彼は突如参謀長職を罷免され、また同じ見解であった作戦主任参謀の牧中佐と

後方担当の稲垣参謀にも転任命令が出るなど、一方的な人事措置が取られたのである。『機密戦争日誌』の二月一六日には「第一部長南方視察報告アリ 『バターン』問題トナル、現地軍ニハ占領地行政ヲ過重視シアル傾向ニアリ」、翌一七日には『「バターン」再興ニ関シ作戰指導ノ為（作戰班長）辻（政信）中佐着任三日ニシテ現地ニ飛ブ 意気壯ナリト云フベシ」とあり、大本営の動向とこの更迭人事が深く関係したことを暗示している。ともかく流れは③案の方向となった。なお前田参謀長の後任には、本間司令官旧知の和知少将が任命された。<sup>(1)</sup>

こうして第一次攻略中断後の第二次バターン攻略は、南方軍の志向する「攻撃続行」へと一本化されたが、大本営は第一次攻略の失敗を踏まえて、フィリピンへの兵力の増強およびその他の準備態勢の必要性を痛感しており、この点について南方軍と議論した。その結果、大本営は二月八日に第四師団を新たに派遣することを内定したほか、重砲兵や重爆撃戦力が増加され、さらに米比軍の堅固な陣地への攻撃に不可欠な資材や補給品等も第一四軍へと送られることとなった。この時点になると、日本軍の未制圧の東南アジア地域はもはやビルマとフィリピンだけとなっており、大本営も南方軍も共にフィリピンへ本腰を入れることに転じたわけである。第一四軍は開戦以来、陸軍の作戦としてはつねに補助的な処遇を受けてきたが、ここに至って、ようやく必要な兵力を与えられて本格的な攻略戦が可能となった。

しかも三月初頭、日本軍はマニラの米軍兵営内でバターン半島南部の米比軍陣地配備図を発見した。その後の戦闘などから、敵の陣地線や各種の施設などはこの配備図と大差がないことが分かり、これは日本軍にとって米比軍攻撃上きわめて有益な物証となった。その一方で第一四軍は、第一次攻略戦における最大の失敗原因が、特殊地形での陣地攻撃に対する教育訓練不足にあったことを痛感していた。そこで作戦中止以後、第一六師団と第六五旅団に対し、次の作戦に備えてこの種の訓練を実行させた。新たに到着した第四師団と永野支隊に対しても、同様の要領に基づいて訓練を実施させ、軍司令官や幕僚が部隊訓練の状況を視察した。<sup>(2)</sup>

ではバターン半島の米比軍側はどうであったのか。彼らは日本軍の第一線部隊の後退に伴い、個々に小部隊を進めるとともに、特にサマツト山麓とその東方地区では主要陣地を強化し、損耗部隊を改編するなど、戦力の補強に努めていた。しかし二月半ば以降、砲撃は次第に弱まり、その戦意が徐々に喪失しているように日本側には感じられた。米比軍の陣地内では、夜になると糊をすったり打ったりする音が聞こえるため、フィリピン軍の斥候を捕えて尋問すると、米比軍は主食制限を行い、定量を半減させるなど、兵士が空腹に苦しんでいることが判明した。しかし捕虜はいずれも「投降ではない」ことを強調し、特にバギオ士官学校出身者には抗戦意識が強かった。マニラで発行している新聞を見せても「宣伝用記事だろう」と信用せず、捕虜の説得には骨が折れた。また米比軍向けの宣伝放送に協力する者はなく、皆拒否した。このような諸点から、フィリピン軍幹部の統御力は相当なものであり、フィリピン軍兵士は最後まで抵抗するであろうし、彼らが宣伝によって投降することは期待できないと判断され、攻撃を再開するほかないとの結論に至ったのである。しかもバターン半島ではマラリア、アメーバ赤痢、デング熱などがひどく流行し、日本軍ばかりでなく、米比軍もまたこれら病気との戦いが実際の戦闘と同様に軽視できない状態にあった。<sup>(3)</sup>

バターン半島に立てこもる米比軍は、このように病気の蔓延に悩まされるとともに、食糧が底をつき始めて飢えに苦しんでいた。あまりに大量の兵員と避難民がバターン半島に流れ込んだことと、十分な食糧の移転が果たせなかったことが大きな誤算であった。しかもバターン陥落に備えて、マッカーサーが半島の備蓄食糧をコレヒドール島へ移送するよう命じたため、現地状況はさらに悪化した。マッカーサーが一月上旬にバターン半島を視察して以来コレヒドール要塞にこもったままで、以後まったく姿を見せていないことも前線部隊の士気を衰えさせた。怒った兵士らは、コレヒドール島の地下壕でのうとうとしていたのである。マッカーサーを「ダッグアウト・ダッグ (Dugout Doug)」と侮蔑的なあだ名で呼び、彼を嘲笑する歌さえ作られた。このような状況を

以前から憂慮していたのがケーシーであった。彼自身はコレヒドール島から頻繁にバターン半島へ出向き、日々前線の視察を欠かさなかったが、コレヒドール島のマッカーサーおよび幕僚はバターン半島へ出張することが少なく、彼はこの点を遺憾としていた。<sup>(4)</sup>

マッカーサーもそのような嘲笑を知らないはずはなかった。彼は二月二日にルーズベルトから移動命令を受けた以後の時期について、次のように回顧している。「その後三週間、私はワシントンからの圧力が次第に強まってくるにもかかわらず、粘り続けた。バターンから敵中を突破してザンバレス山系にたてこもり、強力なゲリラ活動をやることも考えてみた。ところが、ちょうどそのとき、日本軍の精鋭な師団がバターンとフィリピンの各島から引き抜かれ、私たちの戦線に加えられていた圧力が急に弱くなった。私はマーシャルに『われわれは持久戦の膠着状態にはいるうとしていたのかも知れない』との電報を打った。折り返してマーシャルから、オーストラリアの状況で私が早く同地に到着することが緊急に必要なようになった、との電報があり、結局私は出発の用意を整えることとなった」。確かにマッカーサーは同月二七日にワシントンに対して、「敵は今守勢に入り、すべてがもつとも好ましい状況である」との報告を打電していた。<sup>(5)</sup>しかし、彼が自己のコレヒドール脱出の論拠をワシントンからの圧力と日本軍の攻略戦中止に求めることができたことと、バターン現地の将兵がそれを納得したかどうかは別問題であろう。やはり自己弁護の観は否めない。

それでも副官のデイラーは、「日本軍はあまりにも強く、われわれは皆最後が迫りつつあると感じていた。私の親友シド・ハフも、将軍が三二口径のピストルをポケットに入れておいてに気づいていた。そして将軍はこう言った。『奴らにダグラス・マッカーサーを生け捕りにはさせないぞ』。……私もそれが最善の答だろうと思つた」という。<sup>(6)</sup>

さて三月上旬、マッカーサーは家族やバターンボーイズらとの脱出計画を進めると並行して、次のような善

後策を講じていった。万一、ケソン大統領とオスメーニャ副大統領の両者が敵側に囚われの身となった場合、前月に大統領秘書に任命されたロハス陸軍大佐が比大統領に就任することをワシントンに伝達した。この時点ではまだロハスはマッカーサーの副官であると同時に、実体を失っていたとはいえず、連邦政府代表の地位にあった。要するにマッカーサーは、ケソンに代わってロハスを傀儡とする体制を構想していたのである。もう一点、彼はバターンの指揮官のジョーンズ准将を少将へ、歩兵部隊を率いるビーブ大佐を准将へ昇進させるようワシントンに要請した。両者はこの三カ月間に顕著な役割を果たし、今後の米比軍再建のためにこの昇進はもつとも重要である、との理由からであった。なお、まもなくマッカーサーの後継者となるウェーレンライト少将の中将への昇格は、マッカーサーの要請ではなく、ワシントンの配慮によって実現した。<sup>(7)</sup>

他面、米比軍は日本軍との戦闘で戦果も上げた。マッカーサーはワシントンに対し、三月四日に「われわれはオロンガボとスービック湾を急襲して成功を収めた。一万二千トン級の軍艦一隻、数千トン級一隻、八千トン級一隻、小艇二隻を破壊した」、翌五日に「昨日、スービック湾にて突発的な攻撃が大成功した。われわれは何の損失もない。敵は数千名死亡」、六日には「敵はまだスービック湾での敗北から立ち直っていない。敵の活動は取るに足らない」と強気の報告を繰り返した。またすでにコレヒドール島を脱出したケソンについても、「ケソンはビサヤ(諸島)の数カ所を訪問した。人々の忠誠心と士気は素晴らしい」と伝えた。<sup>(8)</sup>

これに対する日本軍の動向であるが、第一四軍が待ち望む第四師団の諸部隊は、二月下旬に上海を出航して、リングエン湾には同月二十七日から四月三日までに順次到着し、徐々に総攻撃の準備が整いつつあった。総攻撃を前にして、米比軍の戦意を徹底的に挫くため、三月六日、マニラ湾全域を嚴重に封鎖する命令が出され、海軍もこれに協力した。その結果、同月末までに概ね封鎖の目的を達成できた。この海上封鎖策がいかに米比軍の物心両面に深刻な影響を及ぼしたかは、この攻略戦終了後の調査によって明らかとなった。米比軍はこの時以来、ほ

ば完全に外部との連絡、外部からの補給その他一切を阻止され、生存環境が急速に劣悪となったのである。<sup>(9)</sup> マッカーサー一行がコレヒドール島を脱出したのは、日本軍がこのマニラ湾封鎖作戦を開始した直後であり、まさに危機一髪のタイミングであった。

マッカーサーが去ったことは、当然ながら米比軍の士気に大きく影響した。日本軍側にも米比軍の砲撃が以前よりもまばらとなり、その戦意が低下しつつあるように感じられた。バガック方面では二〇日と二一日、ともに一〇数名の投降兵があった。しかし日本側がマッカーサー一行の脱出を知ったのは、脱出から一週間後の三月一八日であり、「情報記録第十七号 昭和一七・三・一八 渡集団司令部」には、「米極東軍司令部マッカーサー大将ハ參謀長サザラント少将等ヲ伴ヒ豪州ニ逃走シ西南太平洋反枢軸連合軍指揮官ニ就任セリ後任ハ ルソン東北部軍司令官ジョナサン・ウェーソライト少将ナリ セーヤー高等弁務官亦本国ニ逃亡セリ」とある。また『朝日新聞』がこれを取り上げたのは翌一九日夕刊であり、「マックアーサー 遂に濠州へ遁走す 連合軍司令官に就任」と報じた。<sup>(10)</sup>

このように日本側がマッカーサー退去を知った時点では、一行はすでにミンダナオ島からオーストラリアへと飛び去ったあとであった。日本の伝統的な精神文化では、最高責任者の司令官が敵前逃亡するなど、卑怯の極み<sup>(11)</sup>であるとはいえ、他面、マッカーサーらが潜水艦ではなく、高速魚雷艇を使用して逃避する可能性を第一四軍や大本営がどれほど真剣に検討していたのか、「マッカーサーの捕獲作戦」を含めて彼らの責任が十分に問われなければならないであろう。たとえマッカーサー一行の逃亡が日本軍の予想を上回る大胆な行動であったとしても、日本軍に油断があったことは否めない。敵将マッカーサーという大物を易々と取り逃がしたことは、その後の戦況にマイナスの効果をもたらし、日本が勝利する好機を得損じたと同然であったろう。

## 2 第二次バターン攻防戦の展開

第一四軍は着々と第二次バターン攻略戦の準備を進めていたが、大本営はなおも慎重な対策を講じていた。大本営の服部卓四郎第二課長は、「バターンの戦況は、政略的影響もあり、本当にいらいらした気持ちであり、歩兵第二〇連隊が散々な目に遭って、爾後の目途もなくなったので、これでは駄目だと考え直し、さらに十分な砲兵を展開するなどしつかり準備をしてから攻撃しようということになった。そこで私は、課員全員に問題を出してバターン攻略計画の要図答解を求めた。私の原案は、攻撃正面を四キロ程度に限定し、砲爆撃を集中して敵陣地を突破するという構想であった。そして井本熊男中佐を現地派遣して、大本営の思うように内面指導をやらせた」と証言している。また第一四軍は海軍航空部隊との協力にも腐心した。その上で同軍は、三月二三日、各部隊指揮官をサンフェルナンドに集め、冒頭、本間軍司令官から「この度の攻撃の成否は、今次戦争の運命にも係るものであることを思い、将兵の奮闘を期待する」旨の訓示があり、また同司令官は「敵主将ハ『コレヒドール』ヨリ脱出シ敵軍一般ハ志気沮喪シアリ」と檄を飛ばした。そして二九日には、第一四軍は攻撃開始日を「四月三日」と決定し、戦闘司令所をサンフェルナンドからバターン半島の根元のオラニ<sup>(1)</sup>まで前進させて、総攻撃の態勢を完全に整えたのである。

四月三日朝、ついに総攻撃が開始された。まず軍砲兵隊が猛烈な射撃を実施した。この砲兵隊は三個連隊から成り、威力のある二四ミリ榴弾砲、一五ミリ加農砲各一〇門を含む重砲を備えるなど、日本軍としては強力な編成であった。この一斉砲撃に加えて、第二二飛行団が一带を空爆した。すでに米比軍の航空戦力はほぼ撃滅されていたので、航空部隊は地上作戦に協力できたのである。このように第二次攻略戦では地上と空からの強大な戦力が統合發揮された結果、第一四軍はサマツト山北西麓の米比軍陣地をほとんど完全に制圧できた。このように攻撃がきわめて有利に進展したため、同軍は予定を変更し、米比軍の第一陣地帯を一気に突破することに決め

た。そこで第六五旅団と第四師団は攻撃を続行した。<sup>(12)</sup>

三月中旬に中国から現地に到着した一兵士は、次のように証言している。「第一次バターン攻略に失敗して兵団が壊滅的な打撃を受けた直後に、その補充として私たちが戦場に到着した……。みんなタテ壕を掘って壕の中に身を遮蔽して前進することも後退することもできずにいた。そこへ補充部隊の到着である。支那事変の体験者ばかりの歴戦の部下を迎えた中隊長は、我々の顔を見て言った。『ああ、今夜からゆつくり寝られる』と涙を流さんばかりに我々の戦場到着を喜んでくれた。それから第二次バターン攻略戦の準備にとりかかったわけである……。昼間の移動は敵の目標になるし、我が方の企図を秘匿する意味からも、行動はすべて夜間であった。我々が所属する第一大隊第一中隊第四分隊も例によって夜間行軍を続けていたが、どうも部隊の動きがあわただしい……。なんとなく普段と違う空気がただよっていた。夜間の真暗闇の中の行動なので、兵は脊のうの飯盒に白い布を付けてその白い布をたよりに闇の中を行軍していた。どこでどういう具合になったのかよくわからなかったが、第四分隊だけ小隊の主力を見失って、はぐれてしまった（後で分かったことであるが、これが第二次バターン半島総攻撃の日であったのである）<sup>(13)</sup>」

一軍に同行していたある報道部員は、次のように戦況を伝えている。「四月三日神武天皇祭当日、この日準備全く完了した総攻撃は午後二時を期して一斉に火蓋が切られた。……（報道関係者は）正午近く重点方面ナチブ山当面の北野兵団戦闘司令部所に到着した。……午後二時、まずわが荒鷲数十機が爆音轟々、入れ替り立ち替り敵陣の上空に殺到、必中の投弾を繰り返すや、これに呼応することく、そここのジャングル内に陣地を布いた数百門の我が重砲も一斉に砲門を開き、完膚なきまでに敵の堅陣に大鉄槌の乱打を加える。暫く敵陣一帯は爆煙に包まれ、バターンの山容も改まるばかりの凄じさに敵はまったく沈黙してしまった。この時、轟然一発紺碧の空高く合図の信号弾が打ち上げられる。発進の機を今や遅しと待ち受けていた第一線歩兵部隊は、一斉に起ち上がっ



て、敵陣目がけて破竹の突進に移った。戦車隊も轟々とエンジンの爆音を轟かせつつ敵陣を蹂躪していった<sup>(14)</sup>。

このように万を持した日本軍は、米比軍にとって一段と脅威となった。ケーシーは、「私は彼らがまったく優秀であることを知った。中国で経験済みだと思った。彼らは機械のように戦い、よく訓練され、装備も優れていた。またわずかな携帯で行動していた。それに比べてわが軍は通常、ジャングルで戦い抜くような準備をしていなかった」と日本軍の強さを認めており、バルクレーも「日本海軍は中国で五年間も経験を積んでおり、何もかもわれわれを圧倒していた。われわれは海戦しても勝てなかった」と証言している<sup>(15)</sup>。

こうしてバターン半島の米比軍は追い詰められていった。米比軍が積極的な抵抗を見せたのは日本軍が総攻撃を開始した初日程度であり、米比軍の陣地は次々と日本軍によって奪われていった。しかしワシントンにはウェー  
ンライトに徹底抗戦を命じた。マーシャルは三月二四日、「フィリピンにおけるわれわれの義務は、日本の侵略  
に対して最後まで抵抗し続けることである。……今や世界では、自由を破壊しようとする政府への反対勢力が  
徐々に強固となりつつある。この強固な線を突破されてはならない」と大統領命令を前面に押し出し、ウェー  
ンライトを叱咤激励した。これに対して彼は、二六日、敵の封鎖策によって外部からの供給が欠如しており、状況  
は急速に悪化しつつあるが、「たとえ兵士の食事が一オンスになろうと、弾丸が一発になろうとも、フィリピン  
にわが軍旗を立て続けることを誓う<sup>(16)</sup>」と応えた。

しかし日本軍の総攻撃は、もはや米比軍の抗戦を許さなかった。総攻撃開始の翌四日、マッカーサーからウェ  
ー  
ンライトに「バターン司令部は決して無条件で降伏してはならない」との暗号電報が送られたが、五日、ウェ  
ー  
ンライトは左右の守備隊を指揮するエドワード・キング (Edward P. King, Jr.) 少将とジョージ・パーカー  
(George M. Parker, Jr.) 少将と協議するためにバターンへ戻らざるをえなかった。そして七日、彼と参謀長のル  
イス・ビーブ (Lewis C. Beebe) 准将はアーノルド・フンク (Arnold J. Funk) 准将と「バターンでの絶望的状況

に關して会谈」を持った。ついに八日、彼はマーシャルに次のような緊急事態を告げた。「現在わが軍は半分から三分の一の補給で敵の攻撃を防ぎ続けている。しかし長時間は戦力を維持できない。……敵は増強後、わが陣地に対して大型砲で攻撃を繰り返している。また敵機による絶え間ない爆撃があり、防衛線は猛攻撃されている。日時の経過とともに、わが軍は弱体化し始めた」。同日、マッカーサーもマーシャルに、「敵は第一軍団と第二軍団の間に楔を打ち込み、さらに前進しつつある。そこ（バターン半島）を熟知する私の見解では、状況は最悪であり、貴殿は短時間内に大惨事（disaster）が起ることを予期すべきであると私は認める」と伝達した。いかにも自分が依然としてバターン半島で指揮を執っているかのような物言いであった。<sup>(17)</sup>

同日、アイゼンハワーはマーシャルに対して、「セブ島に七五〇〇トンの食糧がある。三隻の潜水艦がコレヒドール島へ向かい、一隻が明日向かう。もう一隻の潜水艦がオーストラリアから向かうと思われる。米艦隊司令官はセブ島からルソン島へ潜水艦による食糧運搬を指令した。ハワイから食糧を積んだ輸送船が四月三日に、医薬品を積んだ潜水艦が同月七日に出航した。重爆撃機七機とさらに九機が出撃態勢にある」など、フィリピン救援態勢が整いつつある旨の報告をしたが、すべて手遅れであった。<sup>(18)</sup>

また同日、マクナニー参謀次長は、ウェーレンライトとマッカーサーからの各報告を精査したのち、マーシャルに対して、「バタールの状況は最悪である」、「マッカーサーの推測と結論に留意しなければならぬ」と指摘し、この状況では、「二月九日に大統領領からマッカーサー將軍に発出された命令」がウェーレンライト將軍をして「非論理的なところまで部下を追い込むかもしれない。……彼には最終決定で大きな許容範囲を与えられるべきである」との修正案を提起させた。そこでマーシャルとマクナニーは、ウェーレンライトの降伏を事実上認める大統領メッセージを用意した。すなわち、「私は貴官の四月八日の第七三四号文書を読み、最悪の状況にあることを痛感した。貴官の部隊の人的消耗は著しく、もはや食糧支援がなければ反抗の可能性がないことを了解した。……

私は二月九日付のマッカーサー宛電文と三月二三日付の貴官宛電文における命令を修正する。私の目的は、バターン守備隊の将来に影響を及ぼす決定に対して、貴官が最善の判断を下す権限を貴官に委ねることである。私は貴官が堅実な行動を示してきたことと、最悪の状況の中で貴官が使命を達成してきたことを称賛するほかない。遅かれ早かれ貴官がどのような決定を下そうと、私は満足である。またスティムソン陸軍長官も、「この危機的な状況の中で、私は貴官の部隊の健闘を称賛するほかない」と、ウェーンライトが降伏せざるをえないことを承認した<sup>19)</sup>。

このときの日本軍の快進撃について、四月五日の『機密戦争日誌』は、「四月三日十五時前進開始、敵第一線ヲ抜ク予期以上ノ戦果ヲ戦果ヲ収メツツアリ、準備ノ周到ト航空隊ノ増加ニヨリ必勝ノ確信満々タリシニヨルベシ」と叙述している。そして九日には、第四師団は朝七時にラマオ川を出発し、その戦車部隊は午後一時にマリベレスに突入し、主力はさらに午後五時頃にマリベレスの東北まで進出した。他方、第一六師団は永野支隊を合わせて、やはり朝七時にラマオ川を出発し、ラマオ、カブカーベン、マリベレスの道を通って敗走する米比軍を急追し、その先頭部隊は午前零時にマリベレスへ進出した。さらに永野支隊は敗敵を追って、一挙にカブカーベンに向い追撃中であつたが、九日午前六時頃に前方から大白旗を掲げた軍使が来着し、支隊長に対して、バターン半島総指揮官キング少将が降伏の用意がある旨のメッセージをもたらした。支隊長は、キング自ら出頭して無条件降伏するよう通告し、第一四軍に幕僚の派遣を要請した上で、カブカーベンへと急追を続けた。途中、午前一一時頃、ラマオで幕僚を帯同したキングに出会つた。このとき軍参謀の中山大佐が到着し、全米比軍の無条件降伏を要求したが、キング少将はバターン半島以外については「権限外である」として承知せず、同少将と幕僚は進んで永野支隊に投降した。バターン半島の米比軍はその指揮中枢を失い、組織的な抵抗は終わつた。したがって、この日から無秩序と混乱のうちに投降する将兵が続々と出てくることとなつた<sup>20)</sup>。

日本軍の一兵士はそのときの戦況を次のように回顧している。「バターンの山中へ前進開始、行軍を続行、密林の中を工兵隊の苦勞により東海岸から西海岸にと道路が付けられていて有難い行軍でした。ドンドンと砲声が近づいた。第二次バターン攻撃は第一次とは異なり連日の飛行機の爆撃と砲撃にてサマットの陣地も崩壊されて、敵の將兵がゾクゾクと降伏して下りてきた」<sup>(21)</sup>。

この敵將の投降は、日本軍にとって予想外の事態であった。「軍司令部以下驚きかつ喜んだ。なぜならば、米比軍はマリベレス周辺に予想される複郭陣地帯で、コレヒドール要塞と連係し、なお強い抵抗を試みるであろう。この陣地帯に対しては、かの旅順口におけるような至難な要塞攻撃を要するものと思われる。この攻撃準備のためには相当の日時と多大な軍需品の集積を要し、また補給路たるカブカーベンからマリベレスに通ずる道路は、コレヒドール島に全く側面を暴露しているので、この攻撃の効果的方法をどうするかについてはまったく頭痛の種であった。その上、西海岸方面の全く無傷の米比軍に対しても何かの方策をたてなければならぬし、ルソン島全般の治安も漸次悪化して便々たる攻撃を許さない。以上のような困難を前にして苦慮を重ねていた軍に対し、キング少將以下の米比軍の降伏は、全くの救いの神と思えた」<sup>(22)</sup>。

こうして第二次バターン攻防戦は集結を迎えた。九日、ウエーンライトは「バターン半島の日本軍の攻撃は、わが第二軍団の東部防衛線にまで達するほど成功している。第一軍団が救済のために攻撃したが、多くの兵力を失って失敗した。詳細な報告はもはや不可能である。恐らくこの状況はバターン防衛が終焉したことを示している」とワシントンに報告した。ワシントンはこれを確認した。同じ九日、マクナニーはマーシャルに対して、ウエーンライトから受信したメッセージによれば、「白旗が前線全体に掲げられ、バターンは停戦となった。四月九日朝一〇時、キング將軍は日本の將軍に対して停戦交渉を要求した。同日夜七時、彼はまだ戻っておらず、交渉結果はまだ不明である。日本軍は今バターン南部におり、そこからコレヒドールに向けて砲撃している。ウエ

インライトは自軍の現状からこの砲撃に応戦できない。コレヒドールでは新たな空爆が行われている。まだこの重爆撃は深刻な結果をもたらしていない」と報告した。そして同日、直ちに次のような文書がウェンライトへ送られた。「大統領は貴官の行為に対して満足の意を表し、貴官のいかなる決定も理解すると述べている。大統領はコレヒドールが維持されることを願っている」<sup>(23)</sup>。

九日に東部地区・第二軍団司令官キング少将が降伏したのに続いて、一日には西部地区の第一軍団司令官ジョーンズ少将も投降し、ここに第二次バターン攻防戦は幕を閉じた。

### 3 コレヒドール島の陥落

日本軍はバターン半島への第二次攻略を進めるとともに、三月二四日以降、コレヒドール島への空爆を断続的に実施していた。そして四月九日のバターン陥落後、半島南部の海岸に大砲を据え付け、一〇キロ先のコレヒドール要塞への砲撃を本格化させた。『朝日新聞』は「コレヒドールを痛爆」(四月三日)、「コレヒドール要塞最期に瀕す」(同月二日)、「コレヒドール要塞の砲火沈黙」(同月二三日)とほぼ連日コレヒドールの戦況を報じた。実際ウェンライトも、四月一〇日(推測)、「コレヒドールは敵による絶え間ない砲撃と空爆下にある。敵はバタールの南岸に大型砲を設置している。……キング將軍による折衝について私は何も情報を得ていない。バタールの通信は厳しくなっている。わが軍旗は今も島に翻っている」と苦しい抗戦ぶりを伝えていたが、海軍は「食糧の供給は四〇日分から六〇日分ある」と報告しており、まだコレヒドールには持久力があつたのである<sup>(24)</sup>。

しかし強固といわれるコレヒドール要塞には弱点があつた。これについてケーシーは、「島中のトンネル構造は非常に頑丈で空爆にも耐えうるものとなっていたが、シンガポールの要塞と同じく、配列されていた大砲などはすべて“海からの攻撃”に対処するものだった。その防衛態勢はマニラ湾を攻撃しようとする海軍力に対抗す

るように出て来ており、バターン半島など「陸からの攻撃」を防護するものとなっていなかった」とその欠陥を認めた。日本軍はシンガポールを陸路から攻めて陥落させたのと同様に、今回も海路ではなく、空と陸から攻撃を集中させた。まさしくコレヒドール要塞の欠点を巧みに突いたわけである。当時、要塞にいた将兵の状況についてガイソン大尉は、バターン陥落の翌日から砲撃が激化し、塹壕の内側まで正確に砲弾が届くようになったこと、爆弾の破片が自分のベッドまで飛んできて目を覚ましたこと、数日間トンネル内にいると外へ出るのが怖くなる「トンネル病」と称する言葉があったこと、島内でもバターン半島と同様に「ダッグアウト・ダッグ」というマツカーサーを誹謗する語句が囁かれたこと、四月のバターン陥落後、皆は何が起きるかを悟って弱気になっていったことなどを証言している。<sup>(25)</sup>

五月初頭、ついにコレヒドール守備隊は苦境に陥った。同月二日、日本軍は五時間にわたって三六〇〇発もの砲弾をコレヒドール要塞に叩き込んだ。そのうちの一发が分厚いコンクリート壁をぶち抜き、弾薬庫を直撃し、要塞は大爆発を起こした。マーシャルからコレヒドール現地の士気について率直な見解を求められたウェーライトは、四日、正直に自軍の士気の低下を認めた。「四月二十九日(天皇誕生日)に始まった砲撃は強まり、今日まで継続されている。空爆は比較的効率的ではないが、二四〇ミリ大砲はわが沿岸砲などに相当の打撃を与えている。また四月九日以来の空爆で約六〇〇名の犠牲者が出た。これが士気の低下をもたらしている。(昨年)一月二十九日以来空爆や砲撃を絶え間なく受けているため、士気を保つことは難しい。……敵はコレヒドール上陸を計画中である。多くの小型艇に兵器を乗せる準備をしているし、兵士を運搬する小型船を集めている。……ルソンに残る大軍がコレヒドール作戦を実行すると思われる。……私の意見では、敵はいつでもコレヒドールを征圧できる。……攻撃を撃退できる機会は、とても五分五分とはいえない」<sup>(26)</sup>。

上記の報告に接したマーシャルは、コレヒドールの降伏が切迫していると判断し、直ちに大統領のウェーラ

イト宛文書を作成した。翌五日、ルーズベルトからウェーレンライト宛に次のような文書が緊急発信された。「この数週間、敵の猛攻撃に対する貴官らの英雄的な戦闘に称賛の声が高まっている。完全な孤立の中で、しかも食糧および弾薬の不足という劣勢の中で、貴官たちは愛国的かつ犠牲的な輝かしい具体例を世界に示してきた。…この悲惨な状況下における貴官の指導力と静かな決意は、世界に展開するわが軍兵士たちに義務とは何であるのかという高い規準を提示している。あらゆる兵舎で、あらゆる艦艇で、フィリピンの戦友の奮闘ぶりにすべての者が勇気づけられている。…貴官とその従者は、戦争のわが目的とわが勝利のための生きたシンボルとなっている」。このような激賞に対してウェーレンライトは、同日午後七時すぎ（ワシントン時間）、「貴殿の多大なご親切に対し、深い感謝の念を表す言葉がありません。われわれは貴殿の以前における指示を遂行するために最善を尽くしました。そして五月五日午後一〇時三〇分まで、わが軍旗を掲げ続けました。敵はこの七日間、わが海岸へ空爆撃を加えたのちに上陸しました。海岸の防備は完全に除去され、多くの兵器が破壊されました。今これを午前三時三〇分に記述していますが、わが偵察隊は敵の位置を探ろうと努めています。敵軍を海岸へと押し返せるか、壊滅できるか、私は反攻に打って出るつもりです。大統領の素晴らしいメッセージに改めて感謝します。すべての部隊にそれを伝えます」と感慨を込めた返信を送った。この直前、トンネルAの暗号所に保管されていたすべての書類が破棄されたほか、残金の米貨四万ドル、フィリピン通貨二〇〇万ペソ弱、またすべての預金(27)が破棄された。

五日午後一一時過ぎ、精銳の北野兵団約五千名がコレヒドール島の東部（オオサンショウウオの尾の部分）北岸へ決死の上陸を敢行した。そして敵の猛反抗を排除して、翌六日の正午頃には完全に同島を制圧占領した。このときの激しい戦闘について、日本の一兵士が次のように回顧している。「コレヒドール島上陸作戦の前夜、今夜か明日一日の生命だと思つと一抹の寂しさが押し寄せてきました。…故郷を慕つてひそかに別れを告げ、遺言

も書きました。隊員は大発艇（上陸用舟艇のこと）に乗り込み、燦燦と輝く星空の下、対岸のコレヒドール島へ進んだ。途中敵は待つてましたとばかり一斉に照明弾、曳光弾を打ち上げ、島のバリケードより弾が飛来する。大発より少しでも頭を上げようものなら撃たれ海中に落ちていくのを見ながらも、自分は死に対する恐怖は少しも感じなかった。目的のコレヒドール島に乗り上げると、岸にはコルタールが敷き詰めてあり、軍刀は餅のように食いついてどうにもならない。一夜岩陰に潜伏し、翌朝敵陣地に対して攻撃を開始しました。戦闘中突如米軍は白旗をかざして降伏してきました。第六一連隊長・佐藤大佐はこれを認め戦闘を一時中止しました。しばらくして再び発砲してきたので、佐藤大佐は先の降伏を認めぬとのことで再び攻撃を開始し、ついに全面的にコレヒドール島を完全攻略しました<sup>(28)</sup>。

六日午前二時二三分、ウェーシヤル参謀総長に対し、「本日、私はマニラ湾口諸島（コレヒドールほか四島）の降伏に関する折衝のために出向かねばなりません。心破れ悲嘆に暮れています、恥ではありません」との大統領宛親書の伝達を要請した。こうして同日昼過ぎ、彼は日本軍に対して白旗を掲げた。ここに日本軍は敵前上陸から半日ほどでコレヒドール島を攻略し、多数の米比軍を捕虜とした。同日午後五時、バターン半島東南端のカブカーベンでウェーシヤルと本間軍司令官は会談したが、本間は「南方のミンダナオなどフィリピン全軍を含まない降伏であるならば、降伏を拒否する」と言明した。そのため、ウェーシヤルはコレヒドールに戻ることを余儀なくされ、改めて「フィリピンにおける米比軍すべての降伏を日本軍司令官に対して宣言する」こととなった。そして七日夜、ウェーシヤルはラジオを通じてフィリピンの米比軍に対し、日本軍に投降するよう命令したのである。日本の従軍報道班の一人は、歴史的な日米交渉を次のように叙述している。「（五日の）朝十時頃リマイの軍戦闘司令所に居た私は、降伏を申し出た米比軍総司令官ウェーシヤル中将が、間もなくカブカーベンに到着すると聞いて、直ちに記者写真班映画班その他を伴い、同地に車を走らせた。焼き払われ



たカブカベンの部落に近い路傍の一軒ボツンと取り残されたニツパハウス、ここで間もなく我が本間軍司令官と敵将ウエーンライト中将との歴史的会見が行われたのである。……ウエーンライト中将はマニラのK Z R H放送局から比島全域の米比軍に対し降伏命令を放送した<sup>(29)</sup>」。

ところがウエーンライトの全米比軍に対する降伏命令は問題を残した。五月七日、彼はミンダナオ方面の司令官であるシャーブ少将に対し、ラジオによる降伏命令を出した経緯を次のように説明した。「本間將軍は、貴官の指揮下にある部隊も降伏せよと、私の降伏の申し出を断つた。わが守備隊は空爆と砲撃により大きな被害を受けており、コレヒドールは戦車で守られた歩兵により制圧されている。交渉決裂後、私は本間の提案を『人間性 (humanity)』の名において受諾することを決意し、四二年五月の六日から七日にかけての深夜、日本の高級将校に対して、フィリピンにおける全米比陸軍部隊の正式な降伏を伝えた。したがって、ビサヤおよびミンダナオ方面の貴官指揮下の全部隊も日本に降伏する」。すでにシャーブ司令官は「各島ごと独自の判断を下す」よう命じていたが、この命令を受けて、一〇日、管轄する周辺諸島(セブ、ネグロス、レイテとサマル、ベレラとアグサン、ボホール)の各司令官に対し、「直ちに日本軍への作戦すべてを中止するよう指令する。貴官たちは白旗を掲げ、私の幕僚の到着を待て。幕僚が降伏のための交渉要件を示す。これは命令であり、これ以上の流血を避けるために遂行されねばならない」と、ウエーンライトの降伏命令に従うよう厳しく通達した。

ところがこの命令を拒否する者が現れた。パナイ島を守備するクリステイ (Christie) 大佐である。彼は「降伏を命じる権限がシャーブにあるのか」と疑問を呈し、「マッカーサーの了承がなければ私は満足しない」、マッカーサーの了承がないなら「裏切り (treason)」となるだろう、「私は、なぜわが部隊が降伏しなければならないのか、微塵の理由も感じられない」と降伏命令を退け、日本軍への「継続的抗戦」を呼びかけたのである。メルボルのマッカーサーも、一日、ウエーンライトを非難し、シャーブに「命令の撤回」を求めた。「ウエーン

ライト將軍からの命令は無効である。可能であれば、貴官の部隊を小部隊に分割し、貴官の完全な責任をもってゲリラ戦を主導し、緊急な場合のみ私との交信を続けるべきである。貴官は勇敢であり、臨機応変の才ある司令官である」とシャープを叱咤激励し、クリステイが主張するごとく抗戦を続けるよう命じた。このように降伏をめぐって指揮官の間に不統一が露呈し、そのために降伏要件が満たされず、それが捕虜の取り扱いにも影響を及ぼしかねない事態となった。オーストラリアのマッカーサーによるいわば「遠隔操作」が厄介の種となった。実はウェンライトは、「伝達の失敗がもつとも悲惨な結果をもたらす」と恐れていたのである。

そこでシャープは、一日、クリステイに厳命した。「貴官の返信は受諾できない。……再度私は貴官に対して白旗を揚げるよう直接命じる。日本軍への作戦をすべて中止せよ。ウェンライトの降伏も私の降伏もまだ日本軍に受諾されていない。もし貴官および他の司令官が直ちに私の命令に従わなければ、攻撃は再開されるだろう。私はセイヤー中佐をそちらに派遣する。彼が詳細な状況説明を行う。私はマッカーサーと交信しており、彼から行動に関する助言を得ている。……貴官は直ちに服従する旨を返信せよ」。しかし翌二日、クリステイは「私の部隊に対する貴官の降伏命令はまったく不要であろう。私にとって、それはマッカーサーの承諾なしには裏切りとなる。はたして一つの島の降伏が自動的に他の島々にも適用されるというのが最善の命令であるのか。……私のような単純で鈍感な軍人には理解できない。……私は貴官に対して、マッカーサーの承認を得るよう求める。……私は直接の上司チノウェス (Chynoweth) に相談するつもりである。どうか威圧的な命令を私に発しないでもらいたい」と持論を繰り返し、シャープの命令に承服できないと抗弁した。

そこで同日、シャープはクリステイに今度は温和に伝達した。「当初からの使命を遂行しようとする貴官の勇氣は理解できる。しかしながら戦況はもはやそのような使命を不要としている。……私はビサヤおよびミンダナオを含む全部隊の降伏を誓った。この命令を遂行するよう期待する」。それでもクリステイは抵抗した。そこで

一九日、シャープは「貴官は私の指揮下にある。したがって貴官とその部隊は降伏する。チノウェスはすでに同意している。このメッセージを理解し、直ちに取るべき行動(つまり降伏)を連絡せよ」とクリステイを恫喝した。同日、ついにクリステイは、「降伏命令に忠実に従う」旨を伝達し、ようやく全島の司令官が揃って日本軍への降伏に応じるにいたったのである<sup>(30)</sup>。

ワシントンがこのような最終段階での混乱をどの程度把握していたのか不明であるが、少将へと昇格していた戦争計画部(WPD)のアイゼンハワーは、五月六日の日記に「昨晚コレヒドールが降伏した。可哀想なウェー  
ンライト。彼はフィリピンで戦った。……マッカーサーの長広舌、TJ(陸軍省の副官T・J・デービス大尉を指す)も私もマニラでよく聞いたが、それはわれわれに対するものと同様、一般大衆へのばかばかしい話のように聞こえる。しかし彼は英雄だ。あーあ(Yah)」とウェー  
ンライトに対する同情の念とともに、英雄視されているマッカーサーへの嘲笑を綴っている<sup>(31)</sup>。

#### 4 “バターン死の行進”

丸四カ月、二次に及ぶバターン攻防戦は、日本の圧勝で幕を閉じるはずであった。ところが歴史はそれを許さず、この攻防戦は“バターン死の行進”という日本に着せられた汚名をもって終結することとなった。今なおその実態が解明し尽くされないまま、この“バターン死の行進”が“南京虐殺”とともに、日本軍の非人道的行為のシンボルと化しているが、一体いかなる経緯があったのであろうか。

まず米比軍の日本軍に対する降伏に真つ向から反対を唱えていたマッカーサーの主張からみていこう。彼は、もしもワシントンが自分の一時的なバターン司令部復帰を承認して、残存部隊による抗日ゲリラ戦の指揮を自分に取らせていれば、「死傷者二万五千人と推定される降伏後のあの恐るべき『死の行進』は絶対に起こらなかつ

た」と断言し、自分の要求を受け入れなかったワシントンを批判する。そしてマッカーサーは、日本軍の捕虜収容所から脱走してきた米兵三名（現地のゲリラ隊に救出され、米潜水艦でオーストラリアのブリスベンへ輸送されてきた）から日本軍が捕虜に強制したバターンの「死の行進」と、その生存者が収容所で受けた残酷行為のむごたらしい、胸をえぐるような事実の詳細を知らされ、ショックを受ける。そこで彼は「戦争捕虜に野蛮で残酷な暴虐行為が加えられたことを示す、この疑いの余地のない記録に接して、私は全身にいいいような嫌悪を感じる。これは軍人の名誉をささえる最も神聖な掟を犯す行為であり、日本の軍人の心情にぬぐうべからざる汚点を残すものである」との声明文（これはマッカーサーの自筆であろう）を報道陣に発表するよう命じた。

ところがワシントンは、捕虜に対する暴虐行為の詳細な発表を一切禁止したため、この兵士の談話も彼の声明とともに発表されることはなかった。マッカーサーはその理由を、「当時、欧州優先の戦争努力を既定方針としていた米政府は、おそらく米国の世論の中に日本に対してもっと激しい反応を示せという要求が出てくるのを恐れたのだろう」と推定しているが、ここでまたしても彼の被害妄想が頭をもたげた。<sup>32</sup>なぜアメリカ政府がこの報道を抑えたのか、マッカーサーの分析が正しいのか否かは不明である。

では「死の行進」の体験者たちはどのように証言しているのか。この体験者たちは数万名に及ぶため、無数の体験談があるが、その中でもっとも過酷な体験をした捕虜の一人が、第一九二戦車大隊B中隊に属していた志願兵のレスター・テニー (Lester I. Tenney) (のちアリゾナ大学教授) であろう。彼はバターン半島南端のマリベレスからサンフェルナンドまでの約一〇〇キロを徒歩で進み、そこからカバスまでを列車で行き、さらにそこから一二キロを徒歩で進み、目的地オドネル収容所に到着するまでの一二日間を、自身の著書の中で詳述している。その行進部分を抜粋すれば、以下のとおりとなる。<sup>33</sup>

「四月一〇日の朝、……私の班にとってバターン死の行進はマリヴェレスの東二マイル(約三・二キロ)の、一六七キロ標識からはじまった。……もしも、味方を移動させるための敷台を残せというキング司令官のメッセージを注意して聞いてさえしたら、もしトラック全部を破壊していなかったら、私たちは收容所まで車で行ったかもしれない。……ごく少数のアメリカ軍捕虜は最初の收容所であるオドネルまで全行程を車で行ったのである。私たちは歩いた。……道路はどこもかしこもただ穴ぼこだらけ、柔らかい砂、岩石、足もとの悪い砂利が交互にあるという状態だった。この地形を短距離歩くだけでも大変だが、長距離を一定時間歩くとなれば、それは苦しく困難な体験となる。一列四人の縦隊を組み、だいたい一〇列一班で行進ははじまった。最初の一マイルが終わるころには、私たちは行進ではなくただ歩いており、もう縦隊ではなくよろめく群れだった。……水筒をもたずに出た者は水があっても水を手にいれることができなかつた。帽子やかぶるものをもたない者は焼けつく太陽の中を……頭を保護する物もなく歩いたのだ。……」

日本軍の見張りたちも日本語でどなりはじめたが、私たちには理解ができなかつた。思うほどすばやく私たちが命令に反応しないため、彼らは道ばたで拾った棒切れで私たちを打ちたたきはじめた。……この絶えまないやがらせと殴打と肉体的な悪条件のなかで四、五時間も強行軍をつづけたために、仲間の捕虜の多くが、休まないことにはもうこれ以上一歩も進めなくなつた。しかし見張りたちはどんな状況でも私たちに休むことを許さなかつた。……その見張りは疲れはてたアメリカ兵を(銃剣で)刺した。……生きるためには、ズボンをはいたまま排尿するほかなかつた。行進の二日目、私は日本軍のトラックが道をやってくるのを見た。トラックの後部には長いロープを持った見張りたちが乗っていて、行進している兵士たちをムチ打つていた。彼らは早く歩いていない者はだれであろうと打とうとした。……私はひとりの日本兵が自分の飯盒の米飯と自分で開けたばかりの魚の缶詰を食べ終わるのを見まもつていた。缶には二さじほどの魚が残つていた。私のいた方角をふり向いた彼は、私の目を見つめると缶を私に押しつけた。……私はほとんど二日間食べておらず、空腹で、疲れ、士気を失つていた。一瞬もためらわず、私は缶を取つた。……

バターン周辺には水が流れていている井戸がたくさんあったが、日本軍は私たち捕虜に水を与えることについてきちんとした決まりがなかつた。見張りのあるものは、水を飲み井戸に何人かを行かせてくれたが、他のものにはその同じ

恩恵を認めなかった。……私たちは毎日、行進中はゾンビのようにとぼとぼ歩いた。朝の六時半から夜の八時か九時まで歩いた。たいていの日は、日本軍が見張りの交替をするときに数分休むのが普通だった。さもなければ、休憩時間は行きあたりばったりだった。……道の状態が悪かったことや悪化していく健康状態、食糧や水不足、全体をおおっていた敗北者の態度のせいで、私たちは行進中一時間に一マイルか、せいぜい二マイルしか歩けなかった。日本人の見張りの叫び声やむち打ちはさらに増え、絶え間ないものになった。……やっと四日目にバランガの町（半島の东北部にあり、マリベレスからサンフェルナンドまでのほぼ中間地点）に入ったとき、フィリピン人が道端に立ち、私たちにいろいろな食べ物や水を投げてよこした。……これらのフィリピン人のおかげで私たちの沈んでいた気分は新たに高まった。突然、どこかから鉄砲の音が高く響くのが聞こえた。……私たち捕虜に食べ物や水を恵んでいた連中を日本兵が撃っていたのだ。……それを一目見れば、日本軍が野蠻であるという記憶を焼きつけるには十分であった。……私たちと一緒に進んでいたフィリピン人捕虜の多くの者が脱走し、自分の国の者と一緒に走った。……

ついに夜になると大きな倉庫に集められた。……私たちはびっしり詰め込まれていたのでお互いに手足がぶつかり合った。……その夜は、赤痢にかかっている者たちの排泄物で床がおおわれてしまって、かかっていた大勢の者もこの死に至る病にかかってしまった。悪臭、死にかけている者たちの声、衰弱して建物の裏へ行くことのできない者たちの哀れな泣き声やうめき声はとても耐えられないものだった……。翌朝……倉庫の中庭で……三つの大鍋がありそれぞれ米が入っていた。食器セットを持っていない連中は直径三インチ（約八センチ）ほどのおむすびをもらった。……過去四日間の飢えの後だったので、乏しい食物であつたけれど私たちはおいしく食べた。……私たちは行進の列に押しもどされ北へ向かった。

その後もさらに数日歩き、おまけに夜になっても歩くということはしよっちゅうだった。たった二回だけ食糧と水をあてがわれたが、どちらもほんの少しずつだった。ルバオの町から……一五マイル（約二四キロ）ほどはなれたオラニ（半島の根元）の居住区にたどり着くには、さらに二日かかった。この二日の間もまた食糧と飲み水なしだった。この道筋でも、最初の四日間に見た扱いと同じようなこと（殴ったり、人殺しなど）をもっと目撃した。……遂にヘトヘ

トになって立っていることもままならないのに、二キロほど先のサン・フェルナンドの町に入るまで早足行進を続けさせられた。……私たちは地元の駅へ進みそこで休むように命じられた。……一時間ほど座っていると列車がポツポツと言いながらその小さな駅へ進んできた。……私たちは小さな貨車に追いこまれた。……八〇人から一〇〇人の人間がぎゅう詰めになった。全員が同時に座るだけの十分な空間がなかったので、かわるがわる座らなければならなかった」。

では日本兵はどのような証言をしているのか。上記の米兵の証言と対比したい。第一六師団の歩兵第九連隊に所属していた川並藤一と伴八三は、次のように叙述している。

「夜が明けてみると、前方の山から白旗をかかげたアメリカ兵がゾロゾロと出てくるではないか。第四分隊、こちらには総勢一三人、敵のアメリカ兵は何千、何百と雲霞のように山を下りてくる。まずこの光景を見て我々は腰を抜かさずばかりに驚いた。武装解除されているので武器は所持していなかったが、キャラメルやタバコをくれたり、チョコレートをくれたり、我々のご機嫌をとってくる。降伏したアメリカ兵の行列が続く中で、約三〇〇人くらいのところで行列を区切って日本兵が一人付くことにしたが、前記のとおり日本兵は一三人である。その一三人が降伏した敵の兵隊を引率するのである。

とにかく後方へ送ろうということ、大隊本部へ送り届けることになった。大隊本部がどこにあるのか、それも分からない。とにかくもと来た道を後方に下がるだけである。一人の日本兵が三〇〇人近いアメリカ兵を引率しているのである。後ろからブスッとやられたらそれきりである。気味の悪いこと、この上なしである。もしこれが日本兵とアメリカ兵と立場が逆になっていたら、一三人くらいの敵ならアツという間に殺していたであろう。部隊主力に昨夜間の中ではぐれたばかりに奇妙なことになってしまった。自分たちも昨晩から何も食べていない。まして何千、何百人といふ降伏兵に食糧などあろうはずがなかった。やつとのことで大隊本部を探し当てて降伏兵を送り届けた時は思わずホッと安堵の吐息をもらした。大隊本部はこの降伏兵の大軍を見て泡を食った。処置に窮していた。ここから先は私の想像で

あるが、『大隊本部は連隊本部へ、連隊本部は旅団司令部へ、旅団司令部は師団司令部へ、師団司令部は軍司令官へ』送り届けるよりほかはない。この間三日はかかる。炎天下の中を飲まず食わずで三日間歩かされたことであろう。死者も病人も出たであろう。降伏兵たちを運ぶトラックもない。これが世に言う『バターン半島死の行進』である。軍司令官本間中将はこの責任を取らされて処刑される破目になったが、当時は夢にもそのようなことは考えられなかった。重砲兵連隊に属していた小谷輝夫も、ほぼ同様の証言をしている。

「私は二回ほど捕虜輸送に同行しました。日本軍が一五人ぐらいで捕虜を五百人ぐらい連れていく。日本軍には降伏は無いから、こんなに沢山の捕虜が出て来たのでかえってびっくりした、というのが実感ではないですか。だいいち受け入れ態勢も何も無い。我々だって自分の飲み水も食糧も無いのです。捕虜もひどいがこちらだってひどい。我々も水筒一本ぐらいしか水が無いのだから、こちらも飲まず食わずだった。それにマラリアが多くて捕虜がバタバタ倒れた。車が無いのだから我々も歩くより仕方がない。水・食糧・マラリアの三つの苦しみ、捕虜ばかりでなく、日本軍も同じだった<sup>34</sup>」。

第一四軍の和知参謀長は次のように証言している。

「敵味方ともマラリヤにかかり、その他に Dengue 熱や赤痢に倒れる者もあつて全く疲れていた。バターンの米比軍の捕虜は五万であったが、その他一般市民で軍と共にバターンへ逃げ込んだのが約二〜三万は数えられ、合計八万に近い捕虜があつた。一月から四月まで、かれこれ三カ月半もバターンの中中にひそんでいたため、ほとんどがマラリヤその他の患者になつていった。その彼らを後方にさげねばならなかつた。なぜなら軍にはまだコレヒドール島攻略が残つていたのである。



捕虜は第一線から徒歩でサンフェルナンドへ送られた。護送する日本兵も一緒に歩いた。水筒一つの捕虜に比し、皆背囊を背負い銃をかついで歩いた。全行程約六〇数キロあまり、それを四〜五日がかりで歩いたのだから牛の歩くに似た行軍であった。疲れきっていたからである。南国とはいえ夜になると肌寒くなるので、日本兵が焚き火をし、炊き出しをして彼らに食事を与え、それから自分らも食べた。通りかかった報道班員が見かねて食糧を与えたこともある。できればトラックで輸送するべきであったろう。しかし貧弱な装備の日本軍にそれだけのトラックもあるはずもなかった。次期作戦、すなわちコレヒドール島攻略準備にもトラックは事欠く実情だったのである。繰り返していうが、決して彼らを虐待したのではない。もしこれを死の行進とするならば、同じく死の行進をした護送役の日本兵にその苦勞の思い出話を聞くがいい。

むろん道中でバタバタと彼らは倒れた。それはしかしマラリヤ患者が大部分だった。さらにもう一つ付け加えれば、彼らはトラックで移動することを常とし、徒歩行軍になれていなかったことである。つまり機械化された軍隊と、そうでない軍隊との違いだ。といって機械化されていなかったことを自慢するわけではない。彼らはサンフェルナンドに着くと、そこから汽車で中部ルソンのオードネル捕虜収容所に送られた。そしてそこにたどりついてから、気がゆるんだのか息を引き取った捕虜が多かった。私はこの情報に接し心から気の毒に思った。そしてコレヒドール陥落後、本間軍司令官の代理としてオードネル収容所に駆けつけ無名戦士の墓に花輪を捧げ、日本軍としてのせめてもの供養としたものだ。また本間中将は比島人捕虜は現地で釈放した。ともかく軍としてはあの条件下でありながら、できるだけのことをしたつもりである。だのに本間中将はバタールの死の行進を主な罪状とされ、戦後銃殺刑に処せられたのである<sup>(35)</sup>。

従軍報道関係者は、米比軍の降伏の様子を次のように描写している。

「山から、谷から、ジャングルの中から続々と手を挙げて出て来る敵兵は、街に道路に充滿した。武器を捨て、てんでに食器類只一つを後生大事にぶら提げて、他には格別の持物もない。埃と垢にまみれたアメリカ兵に比島兵、半年に

及ぶ我が猛攻撃に、スッカリ参ってしまった痩せ衰えた髑面の哀れな姿は同情すべきものがあつた。かれら捕虜達は、我が軍の手によつて整理され、五、六十名毎に一団となつて後方の収容所へ延々長蛇の列をなして続々送られていった。投降兵達に混つて難民達も、続々出て来る。マラリヤの高熱に悩む子供を背負つた若い母親、病魔に苦しむ老婆を旁り励ます息子たち、自分達と同じ皮膚の色をしたこれ等数万の難民はみな疲労困憊死の一步手前を彷徨している。私は直ちにバランガの軍戦闘司令部所に引き返し、この状況を詳細報告し、医薬、食糧品等諸物資の提供を受け、沿道救護所を開設し、炊き出しと患者の診療を開始した。また、マニラの軍政部にも将校を急派し、この応急対策について協議させ、さらに尾崎士郎君等を重ねてマニラに派遣し、為し得る限りの救護を懇請。さらにまた比島側行政機関にも連絡して赤十字社等の手による速やかな救援策を講ぜられる件を要請した。やがてマニラからはたくさんな救援物資が送り届けられ、数万に上る瀕死の難民の顔にも間もなく生氣が甦つてそれぞれ自分達の郷里に引き取つて行つた<sup>36)</sup>。

なお米海軍関係資料の中に、一九四二(昭和一七)年四月にバターンからコレヒドールに逃げてきた陸軍兵にインタビューした結果を報告した文書がある。そこには「何人かは戦争捕虜とされ、一度以上日本軍から簡単に逃亡できた。日本側によるバターンでの戦争捕虜の取り扱いは残虐行為もない。強制キャンプはどこに位置しているのかわからない。二〇〇〇名以上の傷病兵がバターンから日本の前線の後方へと避難しつつある」とあり、この米陸軍兵士はバターンの行進では残虐行為はなかつたと証言しているのである<sup>37)</sup>。

また終戦後の昭和二〇年一月一日付の「比島方面俘虜関係調査表」という興味深い資料が残されている。これは上段に「米国防議ノ要点」を、下段に「帝国政府回答ノ要点」を対照列記したものである。米国の抗議要点としては、「俘虜ノ行軍輸送収容」に関して、①「オードネル」迄九〇哩(約一四四キロ)を行軍、疲労、疾患、負傷にかかわらず強制歩行、②病人、負傷者等落伍者は無看護放置、③収容所到着後三六時間給食なく、三日間屋内に収容せられず、④米比人医師、看護婦の奉仕拒絶、死亡率二五%、⑤行軍中俘虜の靴及び水筒の強奪、時

計掠奪、を指摘しているのに対して、日本側は、①「バタン」<sup>マ</sup> 占領直後にして治安を回復して居らず、②輸送機関の破壊等あり、③米軍退却時の焦土戦術の為、食糧医薬品等を焼却せること、④当時の戦況により皇軍も亦食糧医薬品等の不足ありたること、⑤投降俘虜の予想外の夥多なりし為、彼等に対する手当の予備を有せざりしこと、を回答している。<sup>38)</sup>このように上記資料では、日米双方の主張ないし見解の相違が歴然としている。

以上を総括すれば、日本軍には明らかに四点の誤算があつた。第一は、日本軍はバターン半島にいる米比軍を二万五〇〇〇名から三万五〇〇〇名と推定していたが、実際には一万二〇〇〇名の米軍将兵、六万五〇〇〇名のフィリピン軍兵士、そして二万五〇〇〇名のフィリピン避難民の合計一〇万五〇〇〇名程度、つまり米比軍は推定の三倍ないし四倍もいたことである。第二は、日本軍側は敵軍兵士が良好な健康状態にあると想定していたが、現実には正反対であつたことである。バタールの米比軍兵士の食糧割当は、最後の四日ないし五日間はわずか一日八〇〇カロリーまで落とされ、兵士は米と小さじ一杯のC食(軍隊用非常食として戦闘中に用いるよう特別に調理されパックされた肉)を食べていた。前線の全兵士は一日二食しか出されず、ときには蛇、猿、イグアナなどを食べた。そのため壊血病や脚気、マラリアとなる者が多く、すでに行進に耐える力を失っていたのである。第三は、日本陸軍は「戦陣訓」によって、「玉碎」を是とし、「捕虜」となることを一切否認していたため、敵側が降伏することを予想しておらず、しかもコレヒドール決戦を目前としていたため、捕虜の取り扱いで混乱し、その処理に戸惑いがあつたことである。そして第四に、米比軍の降伏が意外に早かつたため、米比軍の捕虜に対する食糧収容施設、輸送などに関し準備を行う余裕がなかつたことである。当時、日本軍自体が食料と輸送力の不足に苦勞している状況であり、したがって、これら捕虜を食糧などを比較的補給しやすい地域へと、徒歩で移動させなければならぬ事情にあつたのである。<sup>39)</sup>

以上の諸点に加えて、当時の日本人の心情やナシヨナリズムがあつた。たとえば、「鬼畜米英」思想によるア

メリカ人への蔑視感や、バターン攻略戦の過程で戦友などを米比軍によって殺傷されたことへの激しい憎悪感などである。それらが人間性を欠いた残酷非道の行為をもたらし、たゞしこのような不条理な感情のうねり、また理屈抜きの心理状態は、激しい戦闘直後ではどこでも常に避けられないものであつたろう。<sup>(40)</sup>ここに「バターン死の行進」の奥深い背景があり、一九四二（昭和一七）年八月一日までに、米兵一五二二名、フィリピン兵二万九〇〇〇名といわれる死者を出す結果となつたわけである。

さらに付言しなければならないのは、コレヒドール島で捕虜になつた者は「バターン死の行進」といった悲惨な体験をしなかつた点である。五月六日の陥落後、投降した米比軍は船でマニラへ移送され、そこからトラックでカバナチュアン収容所へ送られた。前出のガイソン大尉は、次のように証言している。翌七日朝九時頃、「われわれは昼に降伏するから武装解除せよ」と言われた。その翌朝に日本軍将校がやって来て下方へと下りるよう命じられ、一群の羊のように一箇所に集合させられた。そして、約三週間もそこに放置された。その間、スクラップ化した金属を收拾する仕事を命じられたりしたが、外出して食事を取ったりできた。水も食糧もあつて、食事の欠乏で死んだ者はいなかつた。その後船に乗せられ、マニラ湾を横断し、ブーツをはかされてマニラ市街を歩いて古いスペインの監獄に数週間入れられ、その後汽車に乗せられてカバナツアンの収容所へと連れて行かれた。<sup>(41)</sup>

このようにコレヒドール島で捕虜となつた者は過酷な行進を強要されることがなかつたばかりか、一般に健康状態がバターン半島の関係者より良く、またバターン関係者の収容所到着時のような「半死半生」状態ではなかつたのである。栄養状態という面で、地域的な格差があつたからであるう。

最後に「バターン死の行進」という衝撃的イベントの報道についてであるが、マッカーサーが指摘するとおり、アメリカ本国がこの事件を報じたのは事件発生から一年九カ月を経た時点であつた。一九四四（昭和一九）年一月

二八日の『ニューヨーク・タイムズ』(The New York Times)は一面に、「バターン後、五二〇〇人のアメリカ人とそれ以上のフリーピン人が飢餓と拷問で死去」との見出しを掲げ、三人の脱走者が「一万二〇〇〇名が七日間食事を与えられず、灼熱の中を死ぬまで歩かされ、生き埋めにされた」など、「死の行進(March of Death)」の恐怖の実態を語ったと報じ、収容所で骸骨のようになった捕虜の実情を詳しく伝えた。翌二九日には同紙の三面に、マッカーサーがオーストラリアへと脱走したウィリアム・ダイス(William E. Dyess)中佐ら三名を引見する写真(一九四三年八月四日撮影)が掲載された。<sup>(42)</sup>

以降、この「死の行進」という表現は、「リメンバー・パールハーバー」とともに、反日のスローガンとなり、日本人の残虐性の象徴となったわけである。とりわけマッカーサーは、この友軍に対する非人道的な虐待行為への怒りを決して忘れることなく、死に至るまで持ち続けた。しかしその感情の強さの奥には、あの屈辱的なコレヒドール島からの逃亡という苦々しい想い出があつたはずである。味方を見殺しにしての敵前逃亡は、彼の輝かしい軍歴とプライドに大きな傷を残したからである。彼にとつては、この敵前逃亡は願わくは抹消したい記録でもあつた。そのような個人的な怨念とコンプレックスが相乗効果を来して、この「死の行進」への非難を勢いづかせた、といつては言いすぎであらうか。

これらのことの余波は、敗戦直後の日本に及んだ。既述のとおり、マッカーサーはこのバターン攻防戦を指揮した第一四軍司令官の本間雅晴を戦犯として裁くことを固く決意していた。一九四五(昭和二〇)年八月三〇日に厚木飛行場に降り立ったマッカーサーは、C I C(対敵諜報部隊)部長のエリオット・ソープ(Elliott R. Thorp)准将に対して、すでに三年前に予備役に回されていた本間を生きたまま逮捕することを命じた。新潟港で逮捕された本間は私服の特別高等警察(いわゆる特高)の刑事事によって東京まで連行され、まもなく巢鴨刑務所に留置された。本間はそこで、米国陸軍法務局のアルヴァ・カーペンター大佐が作成した二月四日付の「罪

責書及び明細調査」に署名することを要求された。同調査には四二項に及ぶ罪状が列記されていたが、とくにその第一三項では、「一九四二年四月九日頃より四月二九日頃までの期間、破廉恥なバターンの死行軍が実施され、米人俘虜約一万三百人およびフィリピン人俘虜約七万四千八百人がバターンからサンフェルナンドまで六〇キロないし一二〇キロの距離を強制的に進軍させられ、虐殺が履行されたこと」が明記されていた。そのほか第一項では、マッカーサーによる「マニラ無防備都市宣言」にもかかわらず、日本軍がマニラを空爆して公共物の破壊や多数の住民を殺傷したこと、日本陸軍将兵がバターン州の病院患者のための食物・衣服・薬品等を故意に拒絶するなど虐待したこと、など大小の事例が挙げられていた。<sup>(43)</sup> さぞ本間はその内容に驚愕したことであろう。

本間・元第一四軍司令官は裁判にかけられたが、これは多くの事例で見られたとおり、当初から「死刑」という結論があつての裁判であり、まさしく勝者が敗者を裁く裁判であつた。翌一九四六(昭和二一)年二月一日に本間に下された判決は「有罪」であり、「絞首刑」が宣告された。弁護団は米最高司法裁判所に提訴したが、同裁判所は一切干渉せずと却下した。すべてがマッカーサーの決定に委ねられ、ここに彼の復讐劇はひとまず幕を閉じたのである。マッカーサーは自己の回顧録で、「日本国内でも、この日本軍人が行った残虐行為は一言も発表されず、降伏後にその真相が明るみに出た時には、日本大衆の細やかな感受性は米国民や連合国諸国民に劣らないほどの深い衝撃を受けた」と指摘し、本間事件を含む一連の判決を「日本人の感性に訴えた事件」として総括する。<sup>(44)</sup> 確かに日本国民は戦争の実態を戦後初めて知ることが多かったものの、彼自身および部下が受けた屈辱を洗い流すためのマッカーサーの個人的行為が、はたして一般的行為に置き換えられ得るのかどうか、その適否と妥当性についてはなおも歴史の検証を重ねる必要がある。<sup>(45)</sup>

(1) 前掲書『大東亜戦争作戦日誌』九二～九三頁参照、前掲書『比島攻略作戦』二二一九頁参照。『機密戦争日誌』二

- 一二三頁、一二三二頁参照。
- (2) 前掲書『比島攻略作戦』三三二、三三三、三三七頁参照。
- (3) 同上書三一五～三二六頁、三二八～三二九頁参照。
- (4) 前掲書『図説マッカーサー』二八～二九頁参照。*ibid.* Engineer Memoirs Major General Hugh J. Casey, US Army.
- (5) 前掲書『マッカーサー大戦回顧録(上)』七二～七三頁参照。〈SEC,PRIO〉MacArthur to AGWAR, Feb 27, 1942.
- (6) *Ibid.* General Diller.
- (7) From Ft. Mills to The Adjutant Gen., MacArthur, Mar. 6, 1942; 〈SEC〉From Ft. Mills PI to Gen. George C. Marshall, MacArthur, Mar. 8, 1942.
- (8) 〈SEC,PRIO〉MacArthur to AGWAR, Mar. 4, 1942; 〈SEC,PRIO〉MacArthur to AGWAR, Mar. 5, 1942; 〈SEC,PRIO〉MacArthur to AGWAR, Mar. 6, 1942; 〈SEC,PRIO FOR ENCODING〉MacArthur to Gen George C. Marshall, Mar. 4, 1942.
- (9) 前掲書『比島攻略作戦』三三二頁、三三九頁参照。
- (10) 同上書三三九頁参照。
- (11) 同上書三五五頁、三六七頁、三七七頁参照。
- (12) 同上書三八一～四一一頁参照。
- (13) 川並藤一・伴八三「パターン死の行進」前掲書『平和の礎・恩欠編第一巻』収録。
- (14) 勝屋福茂「コレヒドールへの道は長かった！」猪瀬直樹監修『目撃者が語る昭和史第六巻 太平洋戦争』(新人物往来社、一九八九年)所収二二二～二二三頁。
- (15) *Ibid.* Engineer Memoirs Major General Hugh J. Casey, US Army; *ibid.* Admiral Charles Bulkeley.
- (16) 〈SEC〉Memo for the Adjutant Gen., Subj: Far Eastern Situation, Marshall, Mar. 24, 1942; 〈SEC〉Memo for the President, John R. Deane, Encl. Message from Wainwright, Mar. 26, 1942.
- (17) 〈SEC〉Memo for the President, Subj: Situation in Batuan, Joseph T. McNarney, Apr., 1942.

- (81) Memo for the Chief of Staff, Subj: Relief of Philippines, Dwight D. Eisenhower, Major Gen., Apr. 8, 1942.
- (91) <SEC> Memo for the War Dept Classified Message Center, Subj: Message to Commanding Gen., U.S. Forces, Great Britain, Acting Chief of Staff McNarney, D.D. Eisenhower, Assistant Chief of Staff, Apr. 8, 1942; <SEC> Memo for the President, Subj: Bataan Situation, Apr. 8, 1942; <SEC> Memo for Gen. Watson, Acting Chief of Staff McNarney, Franklin D. Roosevelt, Apr. 8, 1942; Memo for Sec. of War, <Hand Writing>.
- (20) 前掲書『機密戦争日誌』二三四頁。前掲書『比島攻略作戦』四二六頁。
- (21) 伴八三「英霊の五十回忌法要を営み、戦ったアノ戦闘の記憶を辿る」前掲書『平和の礎・恩欠編第三卷』所収。
- (22) 前掲書『比島攻略作戦』四二七頁。
- (33) Message from Gen. Wainwright, Apr. 9, 1942; <SEC> Memo for Classified Message Center, War Dept, McNarney, Apr. 9, 1942; <SEC> Memo for the Adjutant Gen., McNarney, Apr. 9, 1942.
- (24) <SEC> Memo for the President, Joseph T. McNarney, Apr. 10, 1942; <SEC> Southwest Pacific, Com. 16 to OPNAV, Apr. 14, 1942.
- (35) *Ibid.* Engineer Memoirs Major General Hugh J. Casey, US Army; *ibid.* Oral Reminiscences of Benson Guyton.
- (32) <SEC> Memo for the War Dept Classified Message Center, J.R. Deane, May 4, 1942; <SEC> From Ft. Mills to Gen. George C. Marshall, May 4, 1942.
- (27) <SEC> Memo for the War Dept Classified Message Center, Subj: Far Eastern Situation, Franklin D. Roosevelt, May 5, 1942; <SEC> From Ft. Mills to Chief of Staff US Army, Wainwright, May 5, 1942; <SEC> Memo for Army, Com. 16 to COMINCH, May 5, 1942.
- (28) 川島増造「バタン半島・ロレドニール島従軍記」前掲書『平和の礎・恩欠編第六卷』所収。
- (29) <SEC> From Ft. Mills to Chief of Staff, NoSig, May 6, 1942. 前掲書『図説トラックサー』三二一～三二三頁参照。前掲「ロレドニールへの道は長かったー」二二四～二二五頁。
- (36) <RADIOGRAM> From Wainwright to Sharp 3CF V 20X, May 6, 1942. なお各島の司令官は次のとおり。Gen. Chynoweth (Cebu), Col. Hilsman (Negros), Col. Cordell (Leyte-Samar), Col. Chastaine (Yerela, Agusan), Capt.



Blancas(Bohol).

- (31) *Ibid.* The Eisenhower Diaries, p.54.
- (32) 前掲書『マッカーサー大戦回顧録(上)』八五〜八九頁参照。
- (33) レスター・I・テニー著(伊吹由歌子ほか訳)『バターン 遠い道のりのさきに』(梨の木舎、二〇〇三年刊) 八五〜一〇七頁参照。
- (34) 前掲「バターン死の行進」、小谷輝夫「武漢・コレヒドール攻略と比島敗退を体験し」(前掲書『平和の礎・恩欠編第五巻』所収)。
- (35) 前掲書『比島攻略作戦』四三二〜四三三頁。
- (36) 前掲「コレヒドールへの道は長かった!」二二三頁。
- (37) 〈SEC〉 Southwest Pacific, Com. 16 to OPNAV, Apr. 14, 1942.
- (38) 「俘虜ニ関スル書類綴三二〜三五」(防衛研究所蔵)。
- (39) 前掲書『バターン 遠い道のりのさきに』八二〜八三頁参照。
- (40) 最近の研究として、立川京一「戦史の教訓——何が捕虜問題を生んだのか・日本軍の方針と背景(後編)」(『M A M O R』二〇〇八年九月号、四六〜四七頁)は、第一に一九四二年四月一八日の「ドーリットル空襲」、第二に同年六〜七月に俘虜情報局長官が代読した東条首相兼陸相の訓辞のそれぞれが与えた影響を論じている。すなわち、前者に関しては、空襲後に米軍爆撃機のうち二機が中国大陸の日本占領地に不時着し、搭乗員三名が通常の捕虜としてではなく、戦争犯罪人として処刑されたこと、後者に関しては、その訓示の中に、捕虜は「人道ニ反セサル限り嚴重ニ之ヲ取締リ且一日ト雖モ無為徒食セシムルコトナク其ノ勞力特技ヲ我カ生産拡充ニ活用スル等総力ヲ拵ケテ大東亞戦争遂行ニ資センコトヲ務ムヘシ」というくだりがあり、この一節もその後の日本軍の捕虜取り扱いに影響を及ぼしたとしている。
- (41) *Ibid.* Oral Reminiscences of Benson Guyton.
- (42) *The New York Times*, January 28, 29, 1944. なお同紙は二月六、八、一一日、四月一八、二五、三〇日にもパターンの行軍について触れ、いずれも“Death March”という表現を用いている。

(43) 半藤一利「総司令官マッカーサーの復讐」(『オール読物』一九八八年九月号所収)、GHQ/SCAP Records Box no. 1906, Sheet No. IS-35484. 類例として「マニラの悲劇」(Military Intelligence Division, SCAP)と『長崎の鐘』との合冊出版をGHQが要求したことを挙げることができる。つまり、アメリカ側は日本人が長崎への原爆投下の悲劇を明らかにしようとした著書を発禁処分とし、その後、この著書を「マニラの悲劇」と一緒に出版するならば、この条件で出版を承認したのである。日本人の非人道性を強調することで、アメリカの原爆投下を正当化しようとの考え方である。

(44) 前掲書『マッカーサー大戦回顧録(上)』八九頁。

(45) のちに駐日大使・国務次官となる職業外交官のアレクシス・ジョンソン (U. Alexis Johnson) は、かつて中国の天津で米国務省の官吏として天津防衛軍司令官であった本間と面識があった。その当時は振り返って、「本間はつねに穏やかに話し、部下たちをうまく使っていた。彼はまずまずの英語さえ口にした。彼の指揮する軍隊がアメリカ人に被害を与えたことを説明すると、本間はその件について究明すると約束し、必要ならばいつでも自分を訪ねてよろしいと言った。彼は第二次大戦後、バターンにおける『死の行進』の責任によって戦争犯罪人として処刑されたが、その報を聞いて私は悲しかった。本間の責任は名目にすぎなかった。その判決はあまりにも苛酷だと考えるアメリカの将軍もいた。私は日本陸軍の中で唯一の紳士と思える人物が、それほど意図的に非情な行為を強要したとは信じ難かった」と回想している。改めてこの本間事件の是非が問われなければならないであろう。——U・アレクシス・ジョンソン著(増田弘訳)『ジョンソン米大使の日本回想』(草思社、一九八九年) 四四頁より。

おわりに

以上のとおり、小論はマッカーサーとバターンボーイズの動向に焦点を当てながら、フィリピンをめぐる日米開戦前後の時代状況を考察し、歴史的推移の一断面を明らかにした。この戦争初期段階は、マッカーサーとバターンボーイズを含む米軍側にとって、クラークフィールド全滅、マニラ放棄、バターンおよびコレヒドール陥落、

そしてオーストラリアへの逃避と、まさしく敗戦と屈辱に彩られた時期に相当するが、逆に、日本軍にとってはバターン攻略戦で思わぬ苦戦を強いられたとはいえ、総じて一九四二(昭和一七)年二月のマニラ陥落は、パールハーバーに続く勝利と栄光のシンボルとなった。こうして日本軍は絶頂期を迎えていたのである。

しかしマッカーサーとバターンボーイズは、この敗戦と屈辱をバネにして、同年五月以降、オーストラリアから日本への反攻作戦に着手する。マッカーサーは南西太平洋方面軍(SWPA)司令官として、太平洋方面軍司令官のニミッツ海軍大将と競い合いながら、戦略と戦術を巧みに駆使してニューギニア、ガナルカナル、ブーゲンビル、モロタイ等の諸島で日本軍を次々と撃破しながら太平洋を北上し、フィリピンの「レイテ沖海戦」の勝利によって、日本軍から制海権と制空権を完全に奪い取った。そして一九四四(同一九)年一〇月、ついにレイテ島に上陸し、続いて翌四五(同二〇)年二月にはフィリピンの首都マニラを日本軍守備隊から奪還する。ここにマッカーサーはオーストラリアから六四〇〇キロに及ぶ長い旅程を終えると同時に、世界に広く知られた「アイ・シャル・リターン」の公約を三年ぶりに果たしたのである。それは多くの部下をバターン半島やコレヒドール島に置き去りにし、「ダッグアウト・ダッグ」と嘲笑されたマッカーサーの汚辱を雪ぐ重大な意義をもった。

さらにマッカーサーとバターンボーイズは、マニラ制圧から半年後の八月末、日本の無条件降伏によって厚木飛行場に降り立つ。愛機バタアン号のタラップが降ろされると、元帥帽にサングラス、コーンパイプにノーネクタイのマッカーサーが姿を現し、感慨深げに周囲を見回したのち、一步一步タラップを下りてくるシーンはあまりにも有名である。自意識の強い彼は、自分の晴れ姿を何度も想像し、そのシーンが歴史の映像として残ることを十分自覚していたはずである。それにしても、いまだに硝煙の消えない敵地に悠然と乗り込んだマッカーサーの大胆不敵さは、特筆されてしかるべきであろう。「戦争中の数々の驚きの中で、マッカーサー将軍の厚木への着陸はもつとも勇敢なものである」とのチャーチル英首相の賛辞はまことに適切である。

ともかく開戦から三年九カ月に及ぶ長い戦争はここに終止符が打たれた。マッカーサーのみならず、マッカーサーとともに戦ってきたバターンボーイズら将兵すべての感慨はいかがであったか、その勝利の高揚感も察して余りある。そしてそれから二カ月後にはマッカーサーが首都東京の皇居の正面に位置する三井生命ビルに連合国最高司令官総司令部(GHQ/SCAP)を設置し、以降、「ポツダム宣言」に則った日本の「非軍事化・民主化」政策を強力に実施していくことは広く知られるとおりであるが、それについては稿を改めることとする。

最後に、冒頭で提起しつつ、まだ論及していない側面に触れて結びとしたい。一体、マッカーサーとバターンボーイズとを深く強く結びつけたものの本質とは何だったのかということ、そしてマッカーサーとバターンボーイズのその後についてである。

前者に関連してマッカーサーは、軍人にもっとも大切な資質として、第一に「忠誠」、第二に「勇氣」、第三に「知力」を挙げている。まず忠誠とは、長上の者に対する忠誠、共に働く大義に対する忠誠、上官と部下に対する忠誠を意味するとし、「上の者でも忠誠の念を欠くと危ない」と説く。勇氣とは、心身を賭しての勇氣であり、戦時でも平時でも発揮できる勇敢さである。知力については、「気の利く男よりも知的な男が欲しいが、本当に気が利くのが一番大事なことだ」と彼は指摘する。<sup>1)</sup>これら三条件はマッカーサー自身が保持する資質であると同時に、バターンボーイズはじめ、マッカーサーの下で働いてきた者、バターン半島、コレヒドール島、ニューギニア、フィリピンなどで彼と行動を共にしてきた者ほぼすべてに共有されるべき資質でもあった。いかえれば、これら三つの資質を欠いた者は必然的にマッカーサーの宮廷グループからの脱落を余儀なくされたわけである。

とりわけ第一の「忠誠」こそ、絶対的条件であった。マッカーサーが考える忠誠とは、他者が彼に対して忠誠を尽くすことと、彼がその者に対して忠誠を尽くすことという両面があり、もしその者が困難に陥れば、彼は徹底的に支援するが、もしある者が忠誠に背く態度を取れば、それは彼を苦しめて、時には怒りとなった。第二の

「勇気」は、やはり彼自らが手本を見せた。マッカーサーはコレヒドール島が日本軍機によって空襲された時も、平然とトンネルの外へ出て戦況を見守ることを常としたし、ニューギニアやアドミラルティ諸島などへの数々の敵前上陸の際にも、彼はヘルメットで防備することなく、敵の標的になり易い目立つ元帥帽で通した。日本軍機による激しい空襲下でも、彼は何もなにかのように悠然と部下とともに夕食など団欒を続けた。敵弾をも爆撃をも恐れないその勇気と度胸は、周囲の者を驚かせ、睥睨させた。そして第三の知力の面でも、彼は誰よりも卓越していた。優れた軍事戦略・戦術面ばかりでなく、歴史・哲学・思想・政治・経済・文化などに関する豊富な知識と幅広い教養、ワシントンからの機密文書などを一読して瞬時のうちにその要点を見抜く理解力や洞察力、ピクチャー・メモリーともいふべき聡明さと記憶力、人の心を揺り動かすような弁舌力と文筆力、誤りなく正しく決断する能力など、奥深い知力を誇示した。

このような高い資質に基づく総合力が、彼をパターンボーイズらの部下から絶対神のように崇められてられる偉大な人物たらしめたわけである。パターンボーイズの一人、マーシャル参謀次長（のち参謀長）は、「彼は、一定の答えを出せる一定の人物を見極める点で正確でした。彼は自分のためにそのような答えを出せる人物と対話することに非常に熱心だった」と証言する。フォックスも、「私がかつて接触してきた陸軍の中でもっとも素晴らしい精神の持ち主だった。彼は通常の間人もつ知覚能力をはるかに超えている。……彼は自分の能力に完全に満足していた。彼は周囲の誰よりも問題の本質をすばやく洞察する能力があった。彼は問題の要旨を把握し、もし決定が必要ならば、その決定を下した。……しかも一般に正しく、非常に満足な形で。彼は全世界の問題を把握していたと思う。彼の軍事的能力についてはまったく疑問の余地がない。彼は恐れを知らない。彼は人の前で話す時、そびえ立つような印象を与えた。……彼が決定を下さねばならない時、彼は関係者に意見を聞いたが、最終的な分析は彼自身がやり、周囲からの助言とはまったく反対のこともあった」と激賞する。マッカーサーと

は度々対立した海軍のバークでさえ、彼は「状況を戦略的戦術的に非常に迅速に把握し、何をなすべきかを知る能力を持っていた。彼は人間を知っており、人間をどうやって操るかを知っていた。彼は人間の使い方を知っていたので、周りの者は彼のために最善を尽くすことになった」とマッカーサーが人間の操縦術を熟知していた点を指摘する<sup>(2)</sup>。

しかも、「彼は大変魅力的で勇敢なため、幕僚はじめ誰もが彼の親密な友人になりたがった。誰がもつとも彼に近くなりつつあるのかといった、競争があった。もし誰かが彼の近くになると嫉妬され、たちまち喉を切り裂かれることになった」、また「彼は決して物事を曖昧にしない。ある者に指示をする際、その内容が明確なため、その者は彼の指示を誤解することはない。また彼はタフになる必要があるときはタフになった。もし必要なら無慈悲になることもあった」と、フェラーズは証言している<sup>(3)</sup>。このようにマッカーサーは、男社会の中であって、光り輝くスター性を備えていたというわけである。

半面、マッカーサーの欠点も少なからず指摘されている。性格面についてサムズは、「彼は通常親切な人物ではなかった。内向的だった。対照的に、アイゼンハワーは外向的で、皆が「アイク」と呼んだ。しかし誰もマッカーサー将軍をそのように呼ばなかった。彼が大統領に選ばれなかった理由がここにある。……その意味で、マッカーサーは違うタイプだった。彼は生来の貴族だった。彼はそれでのし上がった。彼が若いとき、母親が彼の人生に非常に強い影響を与えた。彼女は第一次大戦後、彼を再生させたと伝えられている。彼は非常に打ち解けない人物だ。レセプションの参列者に温かく挨拶するが、決して愛想良くはしない。彼はユーモアのセンスはあるが、彼が大きな声で笑ったことは記憶にない。彼は兵隊が使うようなジョークなどは口にしない」と、やや人間性に欠ける面を指摘している。同様に前述のマーシャルも、マッカーサーをファーストネームで呼んだ唯一の人物は、「彼が下級将校のときから彼を知っている陸軍将校の奥方だけ」であって、彼をファーストネームとか

ニックネーム(彼にはなかった)で呼ぶような陸軍将校はいなかった、と証言している。なお副官として長年彼に連れ添った医務官のエグバークは、彼を「自意識過剰」でシャイであったと精神分析している。そのほか作戦面でも、クラークフィールドでの大敗では彼の判断の誤りがあったとの批判や、バターン攻防戦で多くの米比軍将兵が飢えて苦しんだ一要因には、バターン半島への食糧移送に対する彼の配慮の欠落があるとの批判も根強い。<sup>(4)</sup>

さらにバークは、海軍の立場から、マッカーサーの欠点を次のように指摘している。「彼は巧みな戦術家で、偉大な戦略家でもあったが、彼自身が考えるほど偉大ではなかった。彼はすべてを知っているわけではない。陸軍のやりに海軍の力について。彼は海軍の機動性を生かした戦法や柔軟性について知っていたわけではない。陸軍のように述べている。「これは独裁者の下で起こることだ。最初の三、四年はその国にとって悪い政治をやる独裁者はほとんどいない。国のために何かをしたために独裁者となる。独裁者は墮落しなくとも、周囲のスタッフが墮落する。彼らは“イエスマン”となり、ボスが何を言いたいのかを予期する。彼らは独裁者を喜ばせることを望み、彼の考え方に反するような意見が彼の耳に入らないようにするため、墮落していく。この傲慢さ、私に興味するのはこれだ。マッカーサーは何でも知りたがった、事態がどう進んでいるのかと。しかしそれはマッカーサー自身のためではなく、彼が幕僚によって取り囲まれているから知りたがったのだ。ある特定のグループができて、賢明で良好な人物がボスになると、その世界は悪くなるものだ。彼が良い人物であればあるほど悪くなる。それはボスが自分を全能だと感じるからだ。自分は何でも答えを知っていると思うが、実はすべての答えを知らないのだ」<sup>(5)</sup>。マッカーサーとバターンボーイズが築き上げたインナー・サークルは、実はこのような欠陥をもっていたのかもしれない。

では後者のマッカーサーおよびバターンボーイズのその後はどうであったのか。周知のとおり、マッカーサー

は一九四四(昭和一九)年末にマーシャルやアイゼンハワーとともに陸軍元帥に昇格し、いわゆるファイブ・スター・ジェネラルの一人となった。この点で父アーサーをはるかに凌いだ。母ピンキーが生きていれば、さぞ大喜びしたことであろう。そして翌一九四五(同二〇)年四月、南西太平洋方面軍(SWPA)司令官から太平洋米陸軍(AFPAF)司令官となり、対日戦終了と同時に、念願の連合国最高司令官(SCAP)にも就任した。かつて父の副官として日露戦争終結直後に訪日した彼が、今度は日本占領軍の最高指揮官として日本に君臨することとなったのである。ところが一九五〇(同二五)年六月、アジアの冷戦がついに朝鮮半島で熱戦となって火を噴く(朝鮮戦争勃発)と、彼は国連軍総司令官という三つ目の帽子をかぶることとなった。しかも敵の背後を突く仁川上陸という奇襲作戦を成功させて、マッカーサー神話を復活させた。このとき、誰もがマッカーサーに喝采を送った。しかしこれが彼の絶頂期であった。米軍を主体とする連合国軍が北朝鮮の奥深く進攻した結果、中国人民義勇軍の介入を招き、連合国軍は南へと逆走することとなった。窮地に陥ったマッカーサーは、原爆の使用と台湾の蒋介石軍の投入を強く求めたが、これが彼の命取りとなった。トルーマン大統領の怒りを買って、一九五一(同二六)年四月、彼はすべての地位を解任されたのである。明らかに彼の独断専行であり、その背後には奢りがあったことは否めない。こうして彼の軍人としての人生は幕を閉じた。時に七〇歳であった。

他方、コレヒドール脱出時に一五名を数えたバターンボーイズは、戦時下にジョージとシャーを航空機事故で失い、モアハウスがマッカーサー周辺から嫌われて離脱し、マクミッキングが祖国フィリピンに戻った結果、一名となり、また対日戦終了時にはG1部長のステイバースが病気によって帰国したため、残り一〇名がマッカーサーに随って東京へと進出した。かつての三分の二となった。そしてサザランドが総司令部(GHQ)参謀長、マーシャルが参謀次長、ケーシーが技術部(ES)部長、エーキンが通信部(SS)部長、ウイロビーが参謀部第二部(G2)部長の地位を戦時中から引き続いて占め、また新たに占領行政を担う特別幕僚部には、マー



カットが経済科学局(ESS)局長、ウイルソンが歴史部門の長、デイラーは司令官軍事秘書、ハフは再びマッカーサー副官、ロジャーズはマッカーサー付き秘書官として勤務することとなった。バターンボーイズはマッカーサーの周辺に障壁を設け、総司令部内で大きな権勢を誇ったのである。

しかしサザーランドは、すでに心臓病を患っていたこととオーストラリア女性との不倫問題によって、マッカーサーとの緊密な関係に亀裂が生じており、ついに一九四五(同二〇)年一二月に帰国して陸軍を退役し、六六(同四一)年に七三歳で他界した。なお彼の生前、病床にマッカーサー夫妻も見舞ったが、もはや本人の意識はなかったという。ナンバーワンのサザーランドの抜けた後、ナンバーツーであった参謀次長のマーシャルが参謀長職を埋めることとなったが、彼もまた母校バークリア軍学校校長に就任するために、翌四六(同二一)年五月に日本を去った。続いて一九四七(同二二)年にはエーキン、デイラーが帰国し、四八(同二三)年にはウイilson、ロジャーズが、四九(同二四)年七月にはマッカーサーともっとも親しかったケーシーが惜しまれつつ彼の下を去った<sup>(6)</sup>。この時点で残留するバターンボーイズは、マーカーカット、ウイロビー、ハフの三名のみとなった。そしてマッカーサーの解任に殉じてウイロビーとハフが東京を離れるが、ただ一人残留したマーカーカットは、日本の占領期が幕を閉じる一九五二(同二七)年四月まで、約六年半の局長職を全うする。最後のバターンボーイズであるマーカーカットの退場は、マッカーサーの強い個性を反映した占領時代の終焉を象徴していたといえよう。

(1) 前掲書『裸のマッカーサー』一六四～一六五頁参照。

(2) Oral Reminiscences of Major General Richard J. Marshall, July 27, 1971; Oral Reminiscences of Lieutenant General Alonzo P. Fox, June 26, 1971; Oral Reminiscences of Admiral Arleigh A. Burke, Washington, D.C., July 2, 1971.

(3) Oral Reminiscences of Brigadier General Bonner F. Fellers, June 26, 1971.

- (4) Oral Reminiscences of Brigadier General Crawford F. Sams(M.D.), August 25, 1971; *ibid.*, Oral Reminiscences of Major General Richard J. Marshall. 前掲書『裸のマンカーサー』六七頁参照。
- (5) *Ibid.*, Oral Reminiscences of Admiral Arleigh A. Burke.
- (6) *Ibid.*, Engineer Memoirs Major General Hugh J. Casey, US Army.